歴代歌人研究

西行法師

窪田空穂著

序

本書は西行法師の家集「山家集」より、筆者の好む歌だけを選び、簡單を期して評釋を加へることを主とし、それに筆者の胸に映つてゐる西行といふ人を、評論の形にして添へたものである。

「山家集」の評釋、選釋は、その古いもの新しいもので、筆者の記憶にあるものが三四、四五はある。本書はそれらを參酌すべきであるが、叢書の一冊であるといふ關係上、紙數に制限があつて、それをすることが出來なかつた。本書の歌は、その選も釋も一に筆者一己の心によつたものである。

猶ほ歌は、伊藤嘉夫氏の「西行法師全歌集」によつた。安んじてよることの出來たことについて謝意を表す。

評論については、その參考として、尾山篤二郎氏の「西行法師評傳」、川田順氏の「俊成、定家、西行」の二好著を參考とした。負ふところの多いことを明らかにして謝意を表す。

西行法師は、その歌につき人について、猶ほ語られなければならない多くを持つてゐる。乏しき筆者も、これで盡し得たとは思つてゐない。今はこれにとどめざるを得ない。

昭和十三年五月

窪田空穗

目次

前篇　西行法師…………………………（一—四〇）

後篇　「山家集」選釋

一　春の歌…………………………（四一）

二　夏の歌…………………………（八〇）

三　秋の歌…………………………（九六）

四　冬の歌…………………………（一六七）

五　離別の歌…………………………（一八八）

目次

六　羇旅の歌……………………………………（一九二）
七　戀の歌……………………………………（二二五）
八　雜の歌……………………………………（二五三）
九　哀傷歌……………………………………（二八八）
一〇　神祇の歌……………………………………（二九五）

西行法師

前篇　西行法師

一

文藝の人といふうちでも、その時その時の心の動きの端的を、直接に他に訴へることを旨としてゐる歌人俳人は、これを讀者からいふと、おのづからに親しみの深いものがある。歌人としての人麿、西行、俳人としての芭蕉などは、その歌の一首、句の一句をも記憶してゐない、いはば文字に全く關心を持つてゐない人にまでも、宛も隣人ででもあるやうにその名だけは知られてゐる。しかしその傳記のやや精しいことになると、その方面の研究家にも分らない。これは彼等は

何れもその資料となるべきものを自身でも、また他人によつても留めてゐないからである。自身とどめなかつたのは心あつてのこととも いへるが、他人の留めなかつたのは、彼等は何れも、その生存當時にあつては社會的地位が低く、社會人としては記錄に値しなかつたが爲である。ここに云はうとする西行法師も、まさしくさうした人である。

しかし西行には聊かながら、その生存當時、他人によつてされた記錄で、信憑すべきものがある。それは彼の出家した時、入寂した時のものを主に、間接ながら彼に關係するものの零砕なものである。又、彼自身直接に記錄したものもあるが、それは彼の歌集「山家集」の歌の端書としてのもので、これはその歌の心を明らかにしようが爲のもので、彼の傳記には關係させたものではないが、それらを綜合することによつて、彼の生活を窺ひ得させるもので、彼自身記錄してゐることによつて、信憑すべき間接な傳記資料となつてゐるものである。その他は彼の著書と稱されたもの、又傳記と稱されてゐるものは、彼が高名となつたが爲に、その名を藉りたもの、又同じく彼を興味の對象として傳說化した物で、すべて信ずべくもない僞書であるとされてゐるのである。

西行の出家した事についての記録は二つある。一つは「百練抄」卷六に「保延六年十月十五日、佐藤右兵衞尉憲淸（のりきよ）出家。（年廿三、號西行法師）」といふのと、今一つは、藤原賴長の「臺記」康治元年三月十五日の條に、「西行法師來云、依レ行ニ一品經一、兩院以下貴所皆下給也、不レ嫌ニ料紙美惡一、只可レ用ニ自筆一、余經承諾。又問レ年、答曰二十五（去々年出家廿三）。抑西行本右兵衞尉義淸（のりきよ）左衞門大夫康淸子以ニ重代勇士一、仕ニ法皇一、自ニ俗時一入ニ於心佛道一。家富年若、心無欲、遂以遁世、人歎ニ美之一也。」といふのである。これらによつて見ると、出家前の西行は、單に近親の間だけの存在であつたのに、出家といふことによつて、廣い社會の存在となり、又身分の高い人にも、認められるものとなつたことが分る。

又、西行の入寂のことは、その當時の高名な歌人の何人かによつて記錄されてゐる。これはその當時は西行は既に高名な歌人となつてゐたが爲である。慈鎭の「拾玉集」には、「文治六年二月十六日未時、圓位上人入滅、臨終などまことにめでたく、存生にふるまひ思はれたりしに更にたがはず、世の末にありがたき由なん申合ひける」といふのである。「存生にふるまひ思はれたり

し」といふのは、西行の「願はくは花のもとにてわれ死なむそのきさらぎの望月の頃」といふ歌を指してゐるのである。「末の世」は、當時を佛典の謂はゆる末世の淺ましい時代としてゐた意である。

この二つの記録によつて、西行の生れた時、その家、入寂の時がはつきりと知ることが出來るのである。これによると西行の生れた時は、鳥羽天皇の元永元年（一一七八）で、入寂した時は、後鳥羽天皇の建久元年（文治六年、建元と改元）で、年は七十三だつたのである。

これを皇室に絡ませて見ると、御代としては鳥羽、崇德、近衞、後白河、二條、六條、高倉、安德、後鳥羽の九代に亘つてをり、政權の上からいふと、鳥羽天皇に先立つ三代前の後三條天皇が、閥族としての藤原氏を制して御親政をなされ、次ぎの白河天皇が。その延長として、同じく藤原氏を制す爲に院政を始めさせられて、藤原道長を頂點としての閥族の專横の沒落期に入つて、次第にその濃度を高めつつある時代に生まれたのである。此の政權の改革は、藤原氏を屛息せしめた代りに、新たなる閥族平氏が起り、更に源氏に移ることとなりをはつたのであるが、そ

の轉回點となつた保元の亂の時は、西行は三十七、出家後十五年を經た時であつた。二年を經て平治の亂があり、政權は全く平氏一門の手に歸してしまつたのである。その平氏が滅亡して源氏に代つた文治元年は、西行は六十八であつた。

これを歌人西行の上から見ると、その歌一首が、「よみ人しらず」として勅撰集の「詞華和歌集」に入つたのは、近衞天皇の仁平元年、西行は三十四の時で、次いで十八首が「千載和歌集」に入つたのは、後鳥羽天皇の文治四年、西行は七十一で、入寂前二年の時である。西行が歌人としての存生中の面目はここに盡きてゐる。元久二年の「新古今和歌集」に、九十八首といふ集中第一位の歌が入つたのは、西行は入寂後既に十五年を經過した時だつたのである。

漏らし難いことは、西行の家門である。賴長の「臺記」は、「以＝重代勇士＿仕＝法皇＿」といひ、更に「家富」と言ひ添へてゐる點である。尾山篤二郎氏の考證によると、武家としての佐藤氏は、源平二氏に次いでの勢力あるもので、姓を異にしてゐる同族が諸方に散在して、何れも相應の勢力を擁してゐた。もしこれが團結したならば、一大勢力をなし得るもので、源平二氏のうち

の何れかと結ぶ意志があれば、優に他を壓するに足るものであつたといふのである。佐藤氏にはその團結は出來てゐなかつたが、場合によつては武家の力を利用しようとの心ある方面から見れば、その雌伏してゐる力は問題となり得るものであつたといふのである。又、在俗時代の西行は、以前は德大寺家の家臣であつたが、いつの時からか鳥羽法皇の北面の武士となつてゐた。これは時代が院政に移ると、從前は攝關家の家臣となつてゐた武家は、殆ど全部皇室へ直屬するものとかはつてゐたので、これは西行に限つてのことではなく、武家としては普通のことだつたのである。潛勢力を持つてゐる武家で、政權の中心となつてゐる院に、北面の武士として仕へてゐて、しかもその家は、富んでゐたのである。しかも當時は、源平二氏とも、まだその力をあらはすべき機會も、また自信も持ち得なかつたのである。在俗時代の西行が、たとひ身は北面の武士といふ一微臣であつても、相應にたかい矜りを持つてゐたらうと想像しても、誤ではなからうと思はれる。

二

人としての西行法師は何ういふ人であつたか。これは興味のある問題で、知り得るならば知りたいと思ふことである。これは公開されてゐる祕密で、さう思ふ人の誰にでも何等かの解說は附くと共に、誰をも領かせ得るやうな解說は、恐らく誰にも附けられまいと思はれるものである。公開されてゐるといふのは、その家集「山家集」である。これは西行自身、全力を擧げて描いた彼の面目であつて、これ以上に彼を知り得る資料はないのである。「山家集」が何ういふものであるかを掴むことが、卽ち西行は何物であるかを掴むことなのである。

歌人には大體二つの傾向がある。その一つは、今の言葉でいふ藝術派ともいふべきもので、歌は實生活の上に咲き出でた花として、實生活から或る程度の遊離を持つた、その故に美しくなつかしく憧れに値した世界と觀る派である。西行の屬してゐた平安朝時代の歌人は、歌は實生活の上の感を表現したものだといふことを標語としてはゐたが、その實生活は謂はゆる消費を事とする

貴族の生活であつて、又その生活は四百年の久しきに亙つて、殆ど外部からの刺戟のない單調なもので、新意を出すのを怖れて一に傳說を墨守する生活であつたので、勢ひ、美しくなつかしく憧れの形を取つたものとなつて行つた。彼等からいふとそれが卽ち實生活であつたのかも知れぬ。今一つの傾向は、今の言葉でいふ人生派ともいふべきものである。これは實生活を重んじて、そこにのみ價値を認め、心に直接のつながりのない歌は詠むまいとする派である。事は歌の上であるから、此の二つの傾向は截然とは分れるものではなく、その何れに中心があるかといふにとどまつて、或る程度の混合は持つてゐて、時には一人にして、年代によつて彼れから此れへ移ることもあるものである。西行の歌は此の後の人生派と稱すべきものである。平安朝の初期以來、歌といへば藝術派的のもののみ行はれ、それが傳統となり、桎梏とさへなつて、身動きも取れなくなつた末期において、彼はただ一人(ひとり)、鮮やかに、人生派の立場に立つた歌人である。平安朝時代には多くの優れたる歌人が現はれたが、その殆ど全部が、時代の靄に隔てられて、現在の我々の眼にはおぼろとならうとしてゐるうちにまじつて、一人(ひとり)西行だけが我々の眼の前に立つて、生

き生きとした聲を聞せてゐるのは、他の理由があつてではなく、彼が永遠に變らない人間の本質の上に立つて、直接に、率直に歌つてゐるが爲である。「山家集」は彼の全力を擧げて描いてゐる自畫像だといふのは此の意味で、これは平安朝時代の四百年を通じて、歌の上には極めて稀れに見る、即ち代表的な事柄なのである。

三

「山家集」は、謂はゆる玉石混淆した歌集であつて、端から讀んで讀みをはるといふことは、よほど歌好きの人でない限り忍耐を要するやうな集である。惣じていふと此の事は家集の常であるが、さういふ中にも「山家集」は、ややその甚しいものに思はれる。

何故かといふと、「山家集」は出來不出來のむらの多い集といふことである。大體からいふと、出來の悪い感心しない歌が可なりまで續く。ややいや氣がさして止めようとする頃に、飛び離れていい光つた歌が現はれて來る。時にはさうした歌が續いて救はれたやうな感がすると、また感心しない歌が續き出すといふ風だからである。

これに依つて見ると、西行といふ人は、行くとして可ならざるはなしといふ謂はゆる才人風の人ではなく、優れた方面と劣つた方面とがはつきりと分れてゐた人に思へる。これは如何なる歌人にもまぬがれ難いことではあるが、西行ほどその差別の際やかな人は恐らく稀れであらう。

その劣つてゐる歌は、何ういふ方面のものかといふと、大體人と贈答の歌、複雜な題で詠んだ歌などで、さうしたものの中には殆ど佳作が見當らない。平安朝時代は歌が實生活に織り込まれてゐて、挨拶代りの歌が隨分と詠まれてゐる。これは此方からも贈り、贈られれば必ず返しをしなくてはならないものであつた。歌好きである西行の知人にはおのづから同好の者が多く、此の贈答は可なり多くしてゐる。かうした歌はもとよりその場合場合に卽すのを目的とするものであるから、第三者から見て秀歌を求めるのは無理ともいへるが、しかし贈答の歌を並べてゐる限りにおいて、西行の歌が際立つていいといふやうなものは殆ど見當らず、相手と對當にしか見えないものばかりである。又此の當時は、歌合が盛んに行はれた影響と見え、家々で、小人數の人が寄つて歌を詠み合ふといふことが多かつたと見える。西行は知人の家である限りは、好んで出懸けて歌を詠んでゐたやうであるが、ここにもいいと思はせる歌を詠んだものが殆ど見當らない。他の人の歌は留どめてないから分らないが、多分水準を出たものではなかつたらうと思はれる。西行は謂はゆる當意卽妙の歌を詠むといふ肌合の人ではなかつたやうである。

西行の歌の光を持つたものはただ獨り、人をまじへぬ環境にあつて、眼前の自然に眺め入り、又我が身世を大觀して、靜かに燃える心、靜かに躍る心を持つて、しめやかに詠み出したと見える歌である。さうした類の歌になると、その自然に對した場合には、心と物と完全に融け合つて、單純な澄み入つたものとなり、單純ながらに複雜を含んだ、澄み入りながらに暖かさを持つた、微妙な味ひを釀し出したものとなる。自然の美しさに對した時には、恍惚として、謂はゆる沒我の境に入つた心をめでたくも具象してゐると思はせ、さみしい自然に對した時には、同じくさみしさと融け合つて、廣い天地はただささみしさその物のやうな味ひをめでたい具象によつて漂はして來る。又、述懷の歌になると、身世を大觀してするところから來るあはれに浸つて物をいつてゐて、そこには理智の心が働いてゐるのであるが、それはあはれに融け入つて、單純な形に具象されてゐる。

西行の歌の一讀注意させられることは、その單純にして平明なことであるが、この單純、平明は、單なるそれではなく、その單純は上にいふやうに複雜を含み、平明は陰影を引いた立體味を

帶びたものである。從つて此の單純、平明は、心そのものの姿ではなく、表現の爲に具象化されたところの心の姿で、强ひていへば具象の方法としての單純、平明ともいふべきそれである。此の點は如何にも手に入つたもので、平安朝時代を通じて見ても類のない、まさに天與の歌人と思はせるものである。西行は何によつてかういふことをしてゐるか、如何なる祕密があるのかといふと、そこには何の巧むところ、何の祕密めいたものもない、一に調べの力によつてそれを成し遂げてゐるのである。恐らく西行からいふと、全く無意識に行つてゐる自身の調べの力によつて、複雜の單純化、平面の立體化を行つて、彼以外、前後に類のない歌境を展開してゐるのである。全く西行の歌の味ひは、大半その調べにあるといへる。細くして强く、冷たくして暖く緩やかにして張つてゐるその調べを味ふと、西行といふ人の如何に純情な人で、愛の深い人で、纖細な、動搖しやすい人で、同時に如何に理智的な人で、いかに意志的といふよりもむしろ意地の强い人であつたかを、直接に、しみじみと感じさせられて來る。

かうした西行の歌の傾向を見て來ると、西行が二十三にして出家して、當時の都を離れて飄泊

の生活を送る身となつたといふことは、彼自身の幸福であつたのみならず、後代の我々に取つても極めて幸福なことだつたのである。宮廷を中心としての廷臣達によつて作られてゐた當時の都の歌界は、それがたとひ動搖をとほしての轉換期に入つてゐたとはいへ、大體としては傳統の歌界で、歌といへば勅撰集を目標としてのもので、題詠の範圍を多く離れないものであつた。又興味を感じてゐることは、歌合の歌に面目を施す類のことで、その題詠たるはいふまでもない。そこには全體としての流れがあるだけで、個人の持ち味を發揮するといふ道はなかつた。さすがに此の道は封じられてゐたのではないが、それを行つても誰も認めてはくれなかつたらう。同好の者と共にゐて、誰も認めない道を獨り行くといふことは、勢ひなし難いことである。西行は歌に對しては、それほどまでのつむぢ曲りではなかつた。もし出家をせずに都に終始してゐたならば、彼はその融通の利かない天性に糶うつて、題詠を試みてゆく外はなかつたであらうが、それだと我々が今日見るところの歌人西行は存在しなかつたであらう。西行をして西行たらしめた歌の大部分は、彼が都を離れて獨り山林の間に住み、その環境のさみしさに刺戟されて、生來の

愛を强く眼覺めさせられ、身を思ひ人を思ふ心の寄せどころのなさに、好きな歌に打ち込むことによつて僅かに慰められた、その形見なのである。この彼自身の心を盡すといふことが、卽ち都の歌界を離れて、彼の持ち味を發揮することになつたので、そしてそれが彼の代表作となつてゐるのである。彼には歌論の一卷が、他の筆錄によつて殘されてゐるが、それはさして特色のあるものではなく、彼の歌に較べては見劣りのするものである。その點から、それも僞書ではないかとの疑も持たれてゐるのである。第三者から見れば、西行といふ人は格別な歌論などは持つてゐなかつたらう。彼の歌は、もし傍らに心合ひの親しい者がゐれば、それに口頭をもつて語るが如き態度をもつて詠んだもので、そこに系統のあり、細かさのある論などはなかつたのではないか。晩年鎌倉で、源賴朝に歌のことを問はれた際、「詠歌者、對花月動感之折節、僅作三十一字許也。全不知奧旨。然者是彼無所欲報申。」と答へたのが、實際の彼の心ではなかつたかと思はれる。彼の歌を見ると、全く感の動くがまにまにたやすく詠んだもので、それに深みのおのづからなるもののあるのは、一に彼の人柄と環境のいたす所と思はれるのである。

四

西行よりも四つ年長であつた藤原俊成が、西行の入寂する一年前の文治五年に書いた「御裳濯川歌合」の判詞の中に、老友西行に對しての思ひ出を言ひ添へてゐる。それによると、「むかし天承、長承の頃ほひより、同じ道にたづさはり、仙洞の花のもと、雲井の月に見なれし友」といふのである。崇德天皇の天承は西行十四の年、同じく長承は十五の年である。たとひ當時といつても、廷臣のすべてが歌を詠んだのではない。十四五といふ年齡で「仙洞」に又は「雲井」に、花月の夜、歌によつて立ちまじつたといふのであるから、西行はよくよくの歌好きで、幼少の頃から歌に親しんでゐたらうと思はれる。

俊成が「千載和歌集」を奏覽したのは、後鳥羽天皇の文治四年で、その時は西行は既に七十一といふ老齡になつてゐた。浮世につなぐ心は全く絕ち切つた西行だつたらうと思はれるが、歌にだけはよほどの執着を持つてゐたと見えて、勅撰の事のあるを聞くや、歌を整理して、遠く態々

撰者俊成の手許に寄せてゐるのである。歌好きであると共に、いかに歌といふものを重んじてゐたかが思はれる。

「御裳濯川歌合」と「宮河歌合」とは、西行の自歌合で、歌合に伴ふべきものとして判詞を欲し「御裳濯川」の方は老友俊成に、「宮河」の方は、その子の定家の、自分よりは遙かに年下の者に、歌道の上での立者として囑したのである。「御裳濯川」の判詞の出來たのは、後鳥羽院、文治五年、西行は七十二で、河内の弘川寺に病んでゐる時であつた。俊成は病を危んで、前より囑されてゐたのを、急いでしたのである。この兩歌合は、「御裳濯川」は伊勢の內宮へ「宮河」は外宮へ奉納する爲のものである。當時の信仰として、神佛も歌を愛で給ふとして、現に歌合なども神社佛閣で行つてゐる。それと同じ心持の爲で、言ひかへる西行自身の信心の爲のことだのである。此の兩歌合の淸書を托された慈鎭の記すところによると、西行は十二の社へ奉納しようとの志を持つてゐたとのことである。自身の過去に詠み捨てた歌であるが、いかにそれを愛し重んじてゐたかが思はれて、西行と歌との關係の並々ならぬ、むしろ宿命的のものであることを感じさ

せられる。

西行がこれ程に思つてゐたところの歌が、その存生中、又寂後程なき頃に、その時代から如何に扱はれてゐたかといふことは、歌人西行を知る上に意味のあることである。

當時の歌人の評價は、勅撰集に入撰の歌數によつて定められてゐた。これは撰者の好みによつて定まることで、權威あるものとはいへない譯であるが、その撰者は一代の權威者で、そして歌界の意思を心に置いて、公平を期して行つてゐることであるから、大體妥當なものと認め得らるるものである。

西行の存生中は、勅撰集の御事は二回あつた。第一は「詞華和歌集」で、近衞天皇の仁平元年奏覽かといはれてゐる。それだとすると西行三十四の時で、出家後十一年を經てゐる時である。撰者は藤原顯輔である。「詞華和歌集」は歌數が少く、それに當時の作者の歌は多く取らない方針のものであつたが、西行入撰の歌は僅かに一首で、「身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」といふ歌で、これを後年のものに較べると、多少生硬の感はあるもの

の、しかし西行の特色は十分に持つてゐる歌である。しかも「よみ人しらず」として取られてゐるのである。當時の西行は、これをその時代から見ると、全然捨てる譯には行かないが、さりとて然るべく扱ふといふ程の歌人ではなく、條件附で一首を取るといふ程度に評價されてゐたものと見える。

その第二は、後鳥羽天皇の文治四年に奏覽となつた「千載和歌集」で、その時は西行は七十一で、入寂に先立つ二年といふ時である。撰者は藤原俊成である。これは歌數も多く、當時に近い頃の作者の歌を取ることも多かつたが、西行の作は十七首であつた。この數は相當の數であるが、集中からいふと第九位で、必ずしも代表的の數とはいへないものである。

入寂後、第一の勅撰集は、土御門天皇の元久二年に竟宴を行はせられた「新古今和歌集」であつて、撰者は當時の權威を網羅した藤原定家、同家隆、同有家、同雅經、寂蓮の五人である。西行としては入寂後十五年目の事である。此の集における西行の入撰歌は、一躍、實に九十四首で、第一位を與へられてゐるのである。

勅撰和歌集における西行の歌の扱はれ方のこの推移、即ち時代が進むに從つて、飛躍的に重く扱はれて行つたといふ此の推移は、何によつての事であるか。ここに歌人西行の眞價がなくてはならない。

平安朝末期から鎌倉初期へかけての歌界、これを勅撰和歌集でいふと、「千載和歌集」から「新古今和歌集」へかけての時代は、藤原俊成によつて指導されてゐた歌界である。現に「新古今和歌集」の撰者は殆ど皆俊成の系統のものである。この二勅撰和歌集は、俊成の歌に對しての意見の具象化されたものともいへる。

俊成は歌の本質について、從來の「艶(えん)」のみを强調されてゐたのに對して、新たに「幽玄」を强調して來て、その二つを對當な、相並ぶべきものとしたのである。「幽玄」は新たに生まれ來たものではなく、從前もあつたものであるが、それは抑へつけられ、力弱いものとされてゐたのであるが、歌人的素質に富んだ、敏感な俊成によつて新たに取り上げられ、强調させられて來たものである。

「幽玄」とは何ぞといふことについては、現在では解釋が一定してゐないが、私見によれば、美しさを旨とする「艶」に對して、さみしさを旨としたものである。双方とも此の當時は、歌に微旨幽韻を求めるところから、從來の詠み口の、ともすれば說明に終らうとするのを描寫に代へて、それによつて謂はゆる「餘情」を持たせようとしてゐた、その「餘情」に包まれての上のことである。何故に「艶」にのみ安住することが出來ず、新たに「幽玄」を求めたかといふことは、理としては簡單である。政權を武家に奪はれて、その藤原氏の手にあつた時よりも一層無力となり終つた都の廷臣は、生活上の實感としてさみしさ、あはれさを感ぜざるを得なかつた。さみしさ、あはれさが彼等の生活實感だつたのである。今は從來の安住の地であつた「艶」はまさしくも過去の夢となりをはつて、心はおのづからにさみしさ、あはれさに向つて、それに善處するより外はなくなつたのである。そのさみしさ、あはれさの好んで住んでゐる所は自然の懷である。彼等は自然の懷の中に分け入り、「艶」を慕ひ、夢みる心をそこに移して、「幽玄」といふ姿においてさみしさとあはれさに浸らうとするのであつた。

鋭敏なる藤原俊成は、明らかにこれを意識し、これを說き、これを試みもした。しかし彼は都にあつて、廷臣に圍繞せられつつそれをしてゐたのである。思ふけれども行ひ難い所があつたのである。それを境遇と必要とに迫られて、殆ど無意識に、二十三にして出家するより七十三にして入寂するまでの五十年間の、その大部分の長い間を、獨り自然の懷の奧に抱かれて、そのさみしさとあはれさに浸つたのが西行である。西行は歌よりも先づその身が「幽玄」そのものであつたのである。

時代はその好まざるにも拘らず、廷臣に取つてはさみしくあはれにと移つて行つた。「艶」を高潮させたところの「妖艶」は、既に藤原俊成も慕つてゐ、子の定家に至つては、それを歌の本旨のやうにさへ說いたのであるが、その俊成父子も、また彼等の影響を蒙ること多かつた「新古今和歌集」の撰者達も、その心中には「幽玄」の儼として存して、その如何ともし難いことを思はざるを得なかつたと思はれる。これを具體的にいへば「千載和歌集」で西行の歌の十七首を取り、自身の歌はその倍數の三十六首を取つた俊成は、「新古今和歌集」に至ると、その子及び門

流によつて、西行の歌數の九十四首よりも少い七十三首を取られてゐるに過ぎないこととなつた。

撰者の誰が西行の歌をかくまで多く取つたかといふことは、「隱岐本」の「新古今和歌集」によつて知ることが出來る。それは最も「妖艶」を說いた定家を第一とし、俊成の影響を蒙ること最も深い家隆を第二とし、それに雅經が次いでゐるといふ有樣なのである。

「艶」も「幽玄」も、人間の心の本來に持つてゐるもので、それ以外のものではない。その上から「艶」から「幽玄」に移つたといふことは、歌人である廷臣に取つての時代の推移に過ぎないのであるが、これを歌人西行の上から見ると、その七十三年の生涯において、彼は他の何びとよりも早く、第一に時代の氣分を感じ、何びとよりもそれを徹底させたもので、彼はまさしくその點においては第一人者であつたのである。彼の徹底させたところの「幽玄」は、單に廷臣に取つての時代色といふやうなものではなく、本來、人間の本質として持つてゐる所のものであるところから、それに徹底した西行の歌は、時代を超えて今日に生き得てゐるのである。幼時より

好んだと思はれる歌を、最期の日までも重んじ、その結果としては、時代に先立ちつつも時代を超え得たところの西行は、一人の人間として見ても稀れに見る自由人で、自己に誠實な人だつたといへる。

五

西行法師といふ人を思ふ時は、二十三の若さをもつて、外部から見ればこれぞといふ差迫つた理由もなく出家したといふことである。出家といふのは、西行として具體的にいへば、左衛門尉として鳥羽上皇に北面の武士として仕へてゐたその官を棄てて、言ひかへれば上皇の臣下たることを辭して、代りに佛に仕へる身となつて、專念佛道を修行しようといふことである。更にいへば上皇の微臣となつてゐるよりも、佛に仕へる身の方をより多く價値あるものと認めて、そなたに轉じるといふことである。佛法が俗人に對して加持祈禱を主とするやうになつた當時の風習からいへば、出家といふことは、佛の特別の加護を蒙る方法となつてゐて、病氣平癒を祈る爲に出家する者が可なりまで多く、さして特別なことではなく、むしろ目馴れてゐた事柄であり、また無上の幸福を約束されることであるとして、その意味で一般から羨まれもしてゐた事なのである。上に引いた藤原賴長の「臺記」にも、「家富年若、心無欲、遂以遁世、人歎ニ美之一也。」といつてゐ

る。家が富んでゐれば享樂が出來る。年が若ければ、加へて立身の見込もある。然るに無欲で遁世したのである。それを見て世間の人は歎美したといふのである。これは賴長や、それ以下の身分の者の心持をいつたものである。家が富んでゐるが故に西行の享樂し得ることは何であつたらう。身分がやかましかつた時代である。西行が如何に富んでゐようとも、都に住んで豪奢な生活は營めなかつたであらう。許される所は、色に溺れるとか、好きな歌を詠む範圍のことである。年が若いから末に立身の見込があるとして、さて幾何のことが許されたであらう。子として親の官位を越えるといふことは異數であつた。これも限りのあるものである。心が無欲であつたといふが、その無欲は對世間のことで、現に西行自身は、「詞華和歌集」に入撰になつた一首の歌に見ても、「身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」といつてゐる。出家といふことは身を生かさうが爲で、それをしないのは却つて身を殺すことであるといつて、賴長や世間のいふ無欲は、結局身を殺すに過ぎない淺ましい生活で、西行自身からいふと、出家は身を生かす大欲だとしてゐるのである。これは理としては、此の當時の人は誰も知つてゐること

で、實行するとしては踏切りのつかないといふだけの事だつたのである。さればこそ「詞華和歌集」にただ一首しか取らなかつた歌として撰者顯輔も取つたので、此の事は、西行が踏切りを附けて出家したことに對しての世間の歎美を、代辯した形のものとも取れる。現に賴長は、人これを歎美すといつてゐるのである。卽ち當時の世間一般は、西行の出家に對して、あはれみの眼など向けないのはもとより、何故の出家であるかと、その理由などは尋ねようともせず、それは自明のことであるとして、ひたすらに歎美したのである。

しかし出家を思ひ立つには何か理由があつたに相違ないと思はれるが、その理由は大部分、彼自身の性格から來てゐるのではないかと思はれる。

西行といふ人はその歌を見ると直ぐ分るが、極めて純情な、纖細な神經をもつた、人思ひの人であるが、これは好い方面で、一方にはそれと共に、神經質な、氣むづかしい、人の好き嫌ひの烈しい、一口にいふと謂はゆるお天氣屋であつたらしい。從つて氣分が動搖して、ああも思ひ、續いてかうも思ふといふ風で、そしてその思ふことは皆眞實なものであつた。此の時代の人で、一つ

の境地から様々な歌を、今日でいふ連作風に詠んでゐる者は、ひとり西行だけで、これは彼の歌の一つの特色をなしてゐるものであるが、さうした歌を見渡すと、不思議なくらゐにまでも氣分に統一がない。例せば一つ物に對して同時に嬉しいともいひ悲しいともいつてゐるといふ風である。それではその何方(どちら)かが噓のやうに思はれるが、歌をよく見ると、何方も本當で、彼の眞實の現はれなのである。これは「山家集」に幾たびも繰返されてゐる事柄である。歌の上で見れば一つの興味ともなるのであるが、生きて西行に交つてゐた人から見れば、厄介なことだつたらうと思はれる。人はとにかく、西行自身としては、さぞ厄介至極のこととして、時には我と我が氣分を持て餘したことだらうと思はれる。「新古今和歌集」に取られてゐる歌で、次ぎのやうな端書の添つたものがある。「寂蓮法師、人に勸めて百首の歌よませ侍りけるに、いなびて、熊野へ詣でける道にて、夢に、何事も衰へゆけど、この道こそ世の末に變らぬものにはあれ、猶この歌詠むべき由、別當湛海、三位俊成に申すと見侍りて、驚きながらこの歌を急ぎよみ出して出しける」として、「末の世もこの情(なさけ)のみかはらずと見し夢なくばよそに聞かまし」といふのである。

長々しい端書きであるが、なるほど此れが添はないと歌の心がよく分らないので、無理のないものである。此の端書きを見ると西行が思はれて、ここでもといふ感がする。寂蓮は「新古今和歌集」の撰者の一人で、當時の代表的歌人である。百首の歌は當時としては重大なものにしてゐて生中の人には詠めないものとしてゐた。詠めと勸められたのは、西行としては面目としてもいいことである。況んや勸める者は寂蓮でもある。西行は斷つたといふ。何ういふ理由でとはいつてゐないが、下の文の續きから見ると、修行に忙しいのを理由としたらしく見える。しかしそれは口實で、西行は實際は修行と詠歌とを一つ事のやうにしてゐたのである。これで見ると寂蓮の方には少しも無理はなく、西行の方は無理ばかりである。隨分の氣むづかし屋といはざるを得ない。しかしさうはしたものの、西行はその事がよほど氣になつてゐたものと見えて、熊野の途中で夢を見た。それは熊野の別當湛海が、俊成に、世は末世となつてすべて惡くなつたが、ひとり歌だけは昔の通りである、やはり此の歌を詠み續けろと諭してゐると夢に見たのである。熊野の別當は、權現に代つてのものといへ、俊成は歌人の代表者といへる。即ち歌は神佛の御旨に叶ふ

ものだとの意を持つた夢である。これは夢としては念の入つたもので、多分西行の心に思つてゐることが、無意識に夢に具象されたのであらう。すると飜然と心を改めて、目が覺めると共に寂蓮に宛てての歌を詠み、前の斷りを取消し、いはれる通り詠まうとのことをいつたのである。いかに西行が神經質で、根が善良であつたかを示してゐる。これは一例に過ぎず、大體かうした風を繰返してゐたのが西行だと思はれる。

西行の性格には、今一つの重大なものがある。それは歌の上には直接には現はれてゐないが、鎌倉幕府の記錄である「吾妻鑑」の上には、多くの文字を費して書き留どめられてゐる。それは文治二年、西行六十九で、陸奥の藤原秀衡の許へ、奈良東大寺の爲に沙金の寄進を勸める目的をもつて奥州下りをした際のことである。「吾妻鑑」の中心は、

「十五日（文治二年八月）、巳丑、二品御ニ參詣鶴岡宮一。而老僧一人徘ニ徊鳥居邊一。恠レ之以ニ景季令問ニ其名字一給之處、佐藤兵衞尉憲淸法師也。今號ニ西行一。云々。仍奉幣以後、心靜遂ニ謁見一、可レ談ニ和歌事一之由被ニ仰遣一。西行令レ申ニ承之由一、廻ニ宮寺一奉ニ法施一。二品爲レ召ニ彼人一、早

速還御。則招二引營中一、及二御芳談一。此間就二哥道竝弓馬事一、條々有下被二尋仰一事上。西行申云、弓馬事者、在俗之當初、憖雖レ傳二家風一、保延三年八月遁世之時、秀鄕朝臣以來九代嫡家相承兵法燒失。依レ爲二罪業因一、其事曾不レ殘二留心底一、皆忘却了。詠哥者、對二花月一動感之折節、僅作二卅一字一許也、全不レ知二奥旨一。然者是彼無レ所レ欲二報申一。云々。然而恩問不二等閑一之間、於二弓馬事一者、具以申レ之。卽令下俊兼記中置其詞上給。緯被レ專二終夜一。云々。

十六日、庚寅、午尅、西行上人退出。頻雖二抑留一敢不レ拘レ之。二品以二銀作猫一被レ宛二贈物一。上人乍レ拜二領之一、於二門外一與二放遊兒一云々。

これによつて見ると、西行は途中鎌倉を過ぎたのであるが、總追補使となつてゐた源賴朝も尋ねようとはせず、默つて通り過ぎるつもりであつたが、鶴が岡の八幡宮にだけは信心の爲に參り、折柄參詣に來た賴朝に見附けられ、客として迎へられたのである。佐藤左衛門尉憲淸といふ名は、賴朝には輕からぬ名であつたことが分る。さて營中に招いて、弓馬の事と和歌の事を尋ねたといふが、何れもその道の先達として、敎を請ふ態度のものであつたことと察せられる。然るに西行

は、何れもにべもなく斷つてしまつてゐる。弓馬の事は、家に傳はる兵書を燒失してしまつたのみならず、出家後は罪業の因だと心得て、心に留めないので忘れてしまつたといへば、それまでのことである。又歌は、心が動けば詠むといふだけで、奥旨は知らないといへば、これもそれまでである。しかし賴朝が等閑ならざる態度で押して尋ねると、忘れてしまつたといふ弓馬の事について話し出し、それを終夜續けたといふのである。その話は貴重なものだつたと見えて、賴朝は俊兼なる者に聞書きを取らせたといふのである。話す西行は二十三にして出家した法師であるが聞く賴朝は直接間接に平氏一族を倒して來てゐる武家である。彼の側近にゐたであらう者も、同じく戰場を經て來てゐる武者である。これに對して終夜を話し、猶ほ翌日は、名殘り惜しさに頻りに留めさせたといふ西行は、その方面においても極めてすぐれた者でなくてはならない。武人としての彼の蘊蓄はとにかく、賴朝に對してゐるところの彼の態度を思ふと、心中いかに自信を持ち、矜持の高いものがあつたかが思ひやられる。しかしこれは心中のもので、表面に現はす粗野なものではない。それは招かれればすなほに應じたのでも分り、又翌日、贈物として銀作りの

猫を出されれば、一應は拜領してゐるのでも知られる。しかしこれとても、門外に出れば、そこに遊んでゐた童に與へてしまつたといふ。なるほど法師には銀作りの猫は要らず、又旅の身には迷惑な物でもあつたらうが、他に與へようと思つたならば、少し考へれば適當な所がなかつたでもあるまい。それを門外に出る一歩、第一に目に入つた童に與へてしまつたといふのは、捨てると異らないことである。當時の賴朝の贈物をあつかふ態度ではない。何と感じたかは分らないが、矜持の範圍のものだつたらうとは察しられる。

純情で、神經質の氣むづかし屋で、その時その時の刺戟で氣分が動搖して、恐らくは我と我が氣分を持て餘すやうな人が、一方には強い自信と高い矜持とを腹に藏してゐる、かういふ人は何所で暮したならばいいのか。恐らく何んな環境に置いても、周圍を惱まし、身を惱まし、惱んだはてが我と我が身を擦り減らして行くのが落ちであらう。西行は大體さうした肌合の人に見える。かういふ人が身を生かす道はただ一つある。それは周圍の刺戟を少くする爲に自由人となり、そして宗教とか文藝とかいふ、奥の知れない、涯のないものと取組むことである。それより外に

は法がない。その人が聰明であつたならば必ずさういふ道を擇ぶであらう。西行はその道を擇んだのである。年若くしてといふが、早熟な平安朝時代にあつては、二十三といふ年齢は、青年のはなやかな夢が覺めかかつて、それに次ぐところの青年に特有な陰鬱さに襲はれる頃である。まして院政の當初を鳥羽院に仕へ、眷顧を蒙つてゐる崇德天皇の御代の終りに遭遇してゐたのである。これといふ明らかな外的の理由はなくとも、西行は性格的にも、時代的にも世を捨てようと思ひ立つたのであらう。世を捨てるといふと言葉が强く響くが、此の當時の廷臣の出家は、それを今日に較べると、單に官職を辭して自由の身になるといふ程度のことであつたらう。西行自身その爲に失ふ所より得る所の方が多いと思つたのであるが、これはまさしくもあたつてゐた。それに彼は家が富んでゐて、生活の不安などは感じる要はなかつたのである。

六

二十三にして出家した西行は、七十三にして入寂するまでの五十年間を、謂はゆる一所不住の生活をして、旅より旅へと移つて歩いてゐる。川田順氏の考證によると、西行の生活は三期に分つべきで、第一期は三十まで。その間は出家はしたが、大體都を離れず、東山や西山に庵を結んで住んでゐた。第二期は四十九までで、高野山を中心とした時代である。久安年間の三四年間と保元乃至永暦年間の四五年間は、確かに高野に定住し、時々は上京もし、又嚴島詣で、吉野山閑居、大峰、熊野などの山修行をしたらしい。第三期はそれから入寂までで、四國へ渡つて讃岐院の御跡を弔ひ、安元の初から治承の末に亙る四五年間を高野に住み、ついで伊勢に約六年を過し、最後に奥州への旅行をし、歸り來つて河内の弘川寺で入寂したといふのである。この旅行は、いふまでもなく出家としてのそれであつて、修行の爲のものである。五十年の久しい間、これを社會的に見れば、相應の勢力のあり、又富をも持つてゐた西行が、つひに一寺を持つといふことも

せず、當時の出家には普通のことであつた經を說き、加持祈禱をするといふやうな記錄もとどめず、修行者の形に終始したといふことは、私にはよく分らぬが、異數のことではなかつたかと思はれる。

西行の屬してゐた宗派は眞言宗で、高野山であつたといふ。年久しく高野にとどまつてゐたのはその爲で、又入寂した河內の弘川寺も同じく眞言宗だといふ。

當時の僧は加持祈禱を專らとしてゐたといふが、これは僧の方からいへば、信者である衆生を救ふ爲の一方便で、佛者としては佛道を究めて信仰に入ることを旨としてゐたことと思はれる。佛道に入る爲めに官職をやめ、勇猛心を起して出家した西行は、當然のこととして、第一に師を擇んで佛道の研鑽をするべきである。佛道は第一に經典の硏究に始まるべきであらうが、その一わたりを學ばうとしても恐らくは生やさしいものではなからう。西行にして正式に佛道を究めようとしたならば、都の東山、西山などの庵に籠もつて、獨力で學ぶといふことは、その方面の事を知らぬ素人目に見ても、適當の法とは思はれぬ。まして地を變へ、處を變へて移つて步くなど

といふことは、恐らくは失ふ所があつても得る所のある法ではなからう。一わたりを學び得ての後ならば格別、發心の初めからさうした法を擇んでゐたかに見える西行は、何ういふ心を持つての事であらうかと素人目には疑へる。

しかし西行の、さうした山林の庵室生活における副産物ともいへる歌によつて、單なる人間としての彼の心境は如實に窺ひ得られる。

經典を離れた彼を圍繞してゐるのは、さみしい自然であつた。彼の對してゐるものは唯自然のさみしさのみであつた。その自然は、さみしさによつて彼を緊張させた。その緊張は、一たびは彼をして身世を顧みさせた。彼は今一度過去を思ひ返し、味ひ返す者となつた。その間の歌は極めて多く、後悔に似たもの、愚痴に類したものが限りなくある。さうした歌を詠むことは、彼としては心を掃除することで、しなくてはならないことであつたかと思はれる。この緊張を喜ぶ心から彼は、「訪ふ人も思ひ絶えたる山里のさびしさなくば住みうからまし」といつてゐる。彼はさびしさを契機として、緊張を得、その延長として過去の淸算をすることが出來たかと思はれ

る。

しかしこれは消極的の一面で、他に積極的の一面がある。それは此の緊張によつて心が統一され、統一された心は、眼前のさみしい自然に向つて流れて行き、それと一體となつて、廣く遠い物と交流する境に入つてゐる。「行く方なく月に心の澄み澄みて果はいかにかならむとすらむ」といふやうな歌はまさに此の境の心で、彼は少なからず此の經驗をしてゐる。

此の緊張も、時には弛まざるを得ない。弛んで來ると彼は人懷かしさを感じて來る。「もろともに影を並ぶる人もあれや月のもり來る笹の庵に」の類の歌は、恐らくさうした際のもので、彼の集中殆ど隨所に見えるものである。この心が彼を都へと誘ひ、或は新たなる場所へと移らしめたのであらう。

この心の最も濃厚に現はれてゐるのは櫻の歌である。これは可なりにまで多いが、今は一聯だけを引く。「咲きそむる花を一枝まづ折りて昔の人の爲と思はむ」、「あはれわが多くの春の花を見て染めおく心誰れに傳へむ」、「春を經て花の盛りに逢ひ來つつ思ひ出多き我が身なりけり」。

かうした歌を見ると、櫻の花は彼れ西行に取つて何であつたらうと怪しまれる。これは單に美しさによつて愛されるところの花ではない。又美しさに懷かしさの添ふところから、有情のものとの感を起して、擬人して見るといふ程度の花でもない。この花は世界の無上のもので、言語を絕したもので、まさに佛そのもののやうな花である。かうした花と持つ交流は、文字を通して經典の中より悟入する佛にもまして、西行には尊いものであつたかに思はれる。

西行の歌のすぐれたものを詠んで行くと、自然は卽佛であつて、その美しくあはれなものと合體し交流することは、彼に取つては心の淨化であり、飛躍であり、沒我であつて、まさに救ひの歡喜だつたのである。自然との交流を求めることこそ彼には修行であり、その交流は宗教の屆究地だつたのである。又その間から得る歌こそは、彼の唯一の說敎だつたのである。

西行について語るべくんば、此の間の消息を語るべきであるが、これは彼の說敎であるところの歌以上に出づることは出來ない。歌に讓るべきである。

「願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月の頃」と詠んで、西行はほぼその願ひの如

き往生を遂げ、時の人をして感嘆せしめてゐる。きさらぎの望月は、釋尊入滅の日である。我が往生もその日にと望むのは、たとひ佛者の西行とはいへ、矜持の高さを思はせられる。彼らしい願ひだといへる。しかしその釋尊入滅の日に、櫻の花をからませ來り、その櫻の下で往生しようと願ふのは、釋尊の思はくも憚らず、飽くまでも我を立てたことで、一層西行らしい願ひである。西行は釋尊と並べて櫻が尊かつたのであるが、その櫻とはやがて自然だつたのである。まことに稀有の歌人といふべきである。

後篇「山家集」選釋

一、春の歌

西行の四季の歌で、最も秀歌に富んでゐるは、春の櫻と秋の月の歌とである。古來、秀歌の得難いとされてゐる櫻の歌が、春の歌の中心をなしてゐる。

立春朝よみける

（一）年暮れぬ春來べしとは思ひ寢にまさしく見えてかなふ初夢

立春は陰暦では大抵元日である。「思ひ寢」は、本來は人を思つて寢ることで、それをすると人

も此方を思つて夢に入つて來ると信じられてゐた。「春」といへばすぐに花を聯想して、春と花と同意義にさへ使つた當時とて、今思ひ寢をしたのは、櫻である。櫻を擬人したのである。
年が暮れた、春が來ることだと、その花を思ひ寢すると、それに叶つて、まさしくも花が見えた初夢よと喜んだのである。主となつてゐる花をいはずに、餘情としてゐるのは、當時の世界ではそれで通つたが爲である。
すぐれた作ではないが、その時代と共にその人を思はせる歌である。

初春

1597 （二） 岩間とぢし氷も今朝は解けそめて苔の下水道もとむらむ

「東風解ク氷ヲ」といふことが詩情になつてゐて、立春と共に吹く風は東風となり、それと共に冬の氷は解けるといふことが概念となつてゐた。この歌もそれを心に置いて、山中を思ひやつて今まで岩間をとざしてゐた厚い氷が解けはじめて、たまる雫が、あたりの苔の下をくゞつて流れようとしてゐるだらうと、その狀態を思ひやつたのである。

心は概念であるが、いつてゐる所は眼の前にさうした光景を見てゐるやうに、はつきりと形にしてゐる。その味ひは、全體としては寂しく、しかし一脈の艶を含んだ、そして幽かな趣を持つたものである。これは千載集から新古今集時代へかけての風で、時代的な詠み方をしたものである。この歌は新古今集に取られてゐる。西行の神經の細かさを思はせられる。

1578 （三）降りつみし高嶺のみ雪解けにけり清瀧川の水の白浪

春の雪解で、俄に川の水嵩の增さつた心である。「清瀧川」は、大堰河に合流する支流。「高嶺」は、その水源の愛宕山、高雄山。

調べの強い、しつかりした歌である。この時代に、丈高き歌として重んじてゐた風のあるもので、その意味では時代風のものである。「けむ」と想像にすべきところを「けり」といひきり、「水の白浪」と「水の」といふ言葉を特に添へてゐる所など、調べの強さを求める所からのものである。西行の氣の勝つた、強い所を見せてゐる趣がある。

22（四） 來る春は嶺の霞を先立てて谷の筧を傳ふなりけり

春になつて、山の筧の水音の豐かに柔らかになつたのを、春を擬人して、春その物の相（すがた）だと感じたのである。纖細で、いや味がなく、神經の通つた歌である。

23（五） 若菜摘む野邊の霞ぞあはれなる昔を遠く隔つと思へば

春の行事としての若菜を摘みながら、その野を籠めてゐる霞を見て、その霞が昔を隔ててゐるものと思つて深い感を起したといふのである。

若菜といふので、その「昔」は若かつた日のことと思はれ、老いての心と思はれるが、西行は時代の轉換期に生きてゐる、衰へ去つた公卿時代に特別の愛着をつないでゐた所から、その昔戀しいといふのは、單に若かつた日といふだけではないものがあると思はせる。擴がりを持つた「昔」を、細く、しみじみといつてゐるので、さうした聯想も起させられる。

對梅待客

(六) とめ來かし梅盛りなるわが宿を疎きも人はをりにこそよれ

香をとめて來い、梅の花の盛りなわが宿を。疎くしてゐるのも人は、場合によつたものであるといふので、「をり」は、梅の緣語になつてゐる。

題詠ではあるが、實感味のある作である。新古今集に取られてゐる。

伊勢のにしふく山と申す所に侍りけるに、庵の梅かうばしくにほひけるを

(七) 柴の庵によるよる梅のにほひ來てやさしき方もある住まひかな

ありのままがいはれてゐる。自然に、ゆとりを持つて、ありのままにふさはしい言ひ方をしてゐる所に味がある。ありのままを丁度にいふといふことは、頭腦がはつきりしてゐないと出來るものではない。その人を思はせるところがある。かうした歌はいつの代に見ても古くはならない。

住みける谷に、鶯の聲せずなりにければ

（八）古巣うとく谷の鶯なりはてば我や代りてなかむとすらむ

「住みける谷」といふのは、修行の爲に庵を結んでゐた所と見える。「古巣」は、鶯は冬を谷に過して、春になると里へ出て行くものと思はれてゐた。「疎く」といふのは、古巣を棄てる意である。

古巣に疎く谷の鶯がなつてしまつたならば、自分が代りになつて泣かうとするのであらうかといふので、寂しい境での唯一の慰めであつた鶯に對して、名殘を惜しむ心である。

修行のために寂しい境を求めて住むが、時とすると人なつかしさを感じて來るといふので、この心の歌は西行には限りないまでにある。これもその一つである。

寄鶯述懷

（九）うき身にて聞くも惜しきは鶯の霞にむせぶ曙の聲

「うき身」は、憂き身で、今は物思ひのある身の意に取れる。「曙」は、當時、春に取つては一番よい時刻とされてゐた。

憂き身で聞くは惜しいと思はれるのは、曙の霞に咽んで鳴く鶯の聲であるよといふので、自然の美しさあはれさは、物思ひのある身に取つては、過ぎた、勿體ないものだといふのである。感傷的の心ではあるが、その感傷を廣い視野から扱つてゐるところ、宗教的な特殊な味があるといへる。

鶯

（一〇） 雨しのぐ身延の里のかき柴に巣立ちはじむる鶯の聲

「身延の里」は、何處か知らぬが、今作者のゐる所である。「かき柴」は、垣となつてゐる柴の意と思はれる。愛すべき鶯のゐるには似合はしくない、わびしい、そして丈の低いものとしていつてゐると取れる。

ふる雨を凌がうとして立寄つてゐる身延の里の垣柴の上に、巣立をはじめる幼い鶯の聲がするよといふのである。

愛らしく幼いものとしての鶯を憐れむ心であるが、それを寂しい里の垣柴といふわびしい物の

上に發見し、自身もそこに雨宿りしてゐてのこととしてゐるので、事は眞實になり、心は複雑したものになつてゐる。時代を超えた味がある。

山里の柳

55（二）山がつの片岡かけてしむる庵の境に立てる玉のを柳

「片岡」は、片方が岡となつてゐる地で、「しむる庵」は、さうした土地に立ててある小屋の意。これは山村にはよく見かける狀態である。「玉のを柳」は、「玉」は美稱。「を」は接頭語で、柳を愛づる所からの言ひ方であるが、西行が生前、妥當でないと評された形容である。

山賤の、片岡へかけて立ててある小屋の、その地境に立つてゐる愛でたき柳よの意である。

柳は春の木のうち、梅、櫻と並べて代表的に愛されてゐるものであるが、その在り場所は都の大路か、庭か、又は水邊のものとしてである。かうしたわびしい環境の柳は恐らく初めてで、まさに作者によつて發見された美しさである。それに又、環境のわびしさと愛でたい柳との對照は、おのづからに一種複雑に似た氣分を釀し出すところもあつて、それも此の歌の味ひとなつてゐ

る。これは新古今集に取られてゐる。

きぎすを

(三) 枯野うづむ雪に心をまかすればあたりの原に雉子（きぎす）鳴くなり

三句、山家集類題は、「しらすれば」とあり、夫木集は今のやうである。これに從ふ。「まかすれば」は、心をそれに托して、一つになつてゐる意と取れる。

枯野を埋づめてゐる雪に心を托して、それと一つになつてゐると、あたりの原に聲の高い雉子が鳴き出したことよの意。

いはゆる實境實感の歌で、永い遍歴中の或る時の心と思はれる。枯野をうづめつくしてゐる雪に心を托して、それと一つになつてゐると、ゆくりなくあたりの原から、けたたましく雉子が鳴き立つて、その心境が破られたといふのである。一説明語をもまじへず、心のすべてを餘情としたものであるが、御裳濯河歌合に取つてゐる所から見ると、作者には會心のものであつたらうと思はれる。淺きに似て心深い作である。幽玄の趣を持つてゐる。

霞中歸雁といふことを

47 (三) 何となくおぼつかなきは天の原かすみに消えて歸る雁がね

題詠の歌で、從つて多少の沈滯味は持つてゐるが、心は感じられる歌である。三句以下の歸雁の狀態も、一二句のそれに對しての心持も、自然に、むしろ安らかに感じられるものであるが、讀後の感は、歸雁だけにとどまらず、法師としての西行の心境を聯想させるものがある。恐らく歸雁に自身を感じ、同時に一脈のおぼつかなさをも脫し得なかつたのではないかと思はれる。この聯想で生きる歌である。

題しらず

1004 (四) 春になる櫻の枝は何となく花なけれどもむつまじきかな

老いての童心ともいふべき歌である。西行はよく何となくといふ言葉を用ゐるが、これは明徹な彼の心も、さういふより他はなく、それを最も適當な言葉として用ゐてゐるものと取れる。この歌でも「何となく」が讀者にそのままに傳はつて來るのである。單純の複雜さを代表的に持つ

た言葉である。

花の歌あまたよみけるに

69（一五）吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき

「心は身にも添はず」は、憧れのため心が身より離れる意で、この事は容易ならぬ、忌むべきこととしてゐたのである。「梢の花」は、花は梢より咲くものなので、咲き初めた花の意。吉野山の梢に咲き初めた花を見た日から、あくがれる心は、身にも添はずなつてゐたの意で、それに續く花盛りの幾日かの心は、全く餘情にした歌である。花を待つもの、思ひ出すものとしてゐるのは、古今集以來の傳統で、これもその趣のものである。しかし表現は素朴を極めてゐて、そこに特色を見せてゐる。

70（一六）あくがるる心はさても山櫻散りなむ後や身にかへるべき

前の歌の延長で、花盛りの頃の心である。花にあくがれる心の、忌むべくも身を離れてゐるが

それを如何ともすることが出來ず、花が散つたならば立ち歸るのであらうかと、歎きをもつていつてゐるので、作者としては花よりも身の方を問題としてゐる歌である。西行の人となりが思はれる。

（一七）　花見ればそのいはれとはなけれども心の中ぞ苦しかりける

「そのいはれ」は、何の故で、花を見ると、何の故といふことはないが、心の中が苦しいことではあるの意。

前の二首は、櫻に對する愛が強い本能となつてゐて、如何ともし難いものである歎きであるが、そこには花によつて受ける明るい心があつた。この歌はその苦しさを歎いたものである。愛が說明し難い苦痛となるといふことは、恐らく愛の極致である。一見不自然に見えて、實は極めて自然なことで、愛はそこまで到らなければ止まないものであらう。西行といふ人の純粹な、徹底させずにはおけない人柄を、端的に示してゐる歌といへる。

98（一八） 花にそむ心のいかで殘りけむ捨てはててきと思ふわが身に

「花にそむ」は、櫻に染み入るで、深く愛する心。「捨てはててき」は、世を捨てつくした意で出家しての現在をいつたもの。櫻を深く愛する心が、何ういふ譯で殘つてゐるのであらうか、世を捨てつくしたと思つてゐるこの我が身にの意。

感情と理智との矛盾を自省した心で、戀の歌には極めて多いものであるが、自然を對象としての歌には少いものである。そこに特色がある。理智といふうち此の歌は、世を捨てると共に、美しい自然に對する執着までも捨てなくてはならず、又捨て得られるものと信じて、その上に立つていつてゐるのであるから、大體が無理なもので、西行の氣性のはげしさを語つてゐるに外ならないものである。落着いて、意力を持つて、靜かにいつてゐるので、無理が通つて、力のあるものとなつてゐる。

（一九）　白河の春の梢の鶯は花の言葉を聞くここちする

櫻の花の中に鳴いてゐる鶯の聲を、櫻その物の言葉のやうな氣がするといふのである。甘い、むしろいや味になりやすい心であるが、落ちついた態度ではつきりといつてゐるので、淸新な感を持つたものとなつてゐる。「白河（京都）の」と地名をいつてゐるのが、第一にそれである。事としては必要ではないが、心としては必要である。「春の梢」が、第二にそれである。事としては、櫻の咲き滿ちてゐる所で、さう言ひ換へた爲に、鶯の花に籠もつて、姿を見せずにゐることも分る。又それによつて、下の花の言葉といふ直接な續きも生まれて來るのである。落ちついてはつきりしてゐることを思はせられる。

（二〇）　願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃

西行の辭世の歌のやうにいはれてゐるものである。「春死なむ」といつてゐる所から見ると、春に先立つ季節に詠んだものと見える。とにかく此の歌にある頃に入寂したのである。「願はくは」

は、願ふ事としてはの意。「花」は、櫻。「きさらぎの望月」は、二月の滿月で、これに「その」といふ言葉が添へてあるので、特定の時といふことが分る。當時としては、きさらぎの望月といへば直ちに釋迦入寂の時と感じられたと見える。これはその意味のものである。これと同じく、そのといふ言葉を用ゐた歌が、西行には他にもあつて、好んでゐた用法と見える。

一八の歌のやうに、出家の初めには、世を捨てたにも拘はらず、花に心が引かれるといつて嘆いてゐた西行であるが、心境が進むにつれて次第にそれを念としなくなり、今最後の願望としては、花の下にて春死なむとまでいつてゐるのである。もとより櫻を好む心がいはせてゐるのであるが、その好みを十分に是認していつてゐるので、初めの心とは格段の相違をもつてゐるものであることが分る。これはそれだけのものではない。釋迦入寂の時に死なうといふことは、佛者ならでは思はぬことで、又佛者としてもたやすくは思ひ得られることではなからう。西行は今それをも思つてゐるのである。さすがに望月の頃と、頃といふ言葉を添へて緩和させてゐるが、これはむしろ當然のこととすべきである。さうした佛者としての大望と並べて、同じく佛者としての

（一九）　白河の春の梢の鶯は花の言葉を聞くここちする

櫻の花の中に鳴いてゐる鶯の聲を、櫻その物の言葉のやうな氣がするといふのである。甘い、むしろいや味になりやすい心であるが、落ちついた態度ではつきりといつてゐるので、清新な感を持つたものとなつてゐる。「白河（京都）の」と地名をいつてゐるのが、第一にそれである。事としては必要ではないが、心としては必要である。「春の梢」が、第二にそれである。事としては、櫻の咲き滿ちてゐる所で、さう言ひ換へた爲に、鶯の花に籠もつて、姿を見せずにゐることも分る。又それによつて、下の花の言葉といふ直接な續きも生まれて來るのである。落ちついてはつきりしてゐることを思はせられる。

（二〇）　願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃

西行の辭世の歌のやうにいはれてゐるものである。「春死なむ」といつてゐる所から見ると、春に先立つ季節に詠んだものと見える。とにかく此の歌にある頃に入寂したのである。「願はくは」

は、願ふ事としてはの意。「花」は、櫻。「きさらぎの望月」は、二月の滿月で、これに「その」といふ言葉が添へてあるので、特定の時といふことが分る。當時としては、きさらぎの望月といへば直ちに釋迦入寂の時と感じられたと見える。これはその意味のものである。これと同じく、そのといふ言葉を用ゐた歌が、西行には他にもあつて、好んでゐた用法と見える。

一八の歌のやうに、出家の初めには、世を捨てたにも拘はらず、花に心が引かれるといつて嘆いてゐた西行であるが、心境が進むにつれて次第にそれを念としなくなり、今最後の願望としては、花の下にて春死なむとまでいつてゐるのである。もとより櫻を好む心がいはせてゐるのであるが、その好みを十分に是認していつてゐるので、初めの心とは格段の相違をもつてゐるものであることが分る。これはそれだけのものではない。釋迦入寂の時に死なうといふことは、佛者ならでは思はぬことで、又佛者としてもたやすくは思ひ得られることではなからう。西行は今それをも思つてゐるのである。さすがに望月の頃と、頃といふ言葉を添へて緩和させてゐるが、これはむしろ當然のこととすべきである。さうした佛者としての大望と並べて、同じく佛者としての

（一九）白河の春の梢の鶯は花の言葉を聞くここちする

櫻の花の中に鳴いてゐる鶯の聲を、櫻その物の言葉のやうな氣がするといふのである。甘(あま)い、むしろ、いや味になりやすい心であるが、落ちついた態度ではつきりといつてゐるので、淸新な感を持つたものとなつてゐる。「白河（京都）の」と地名をいつてゐるのが、第一にそれである。事としては必要ではないが、心としては必要である。「春の梢」が、第二にそれである。事としては、櫻の咲き滿ちてゐる所で、さう言ひ換へた爲に、鶯の花に籠もつて、姿を見せずにゐることも分る。又それによつて、下の花の言葉といふ直接な續きも生まれて來るのである。落ちついてはつきりしてゐることを思はせられる。

（二〇）願はくは花の下(もと)にて春死なむそのきさらぎの望月(もちづき)の頃

西行の辭世の歌のやうにいはれてゐるものである。「春死なむ」といつてゐる所から見ると、春に先立つ季節に詠んだものと見える。とにかく此の歌にある頃に入寂したのである。「願はくは」

は、願ふ事としてはの意。「花」は、櫻。「きさらぎの望月」は、二月の滿月で、これに「その」といふ言葉が添へてあるので、特定の時といふことが分る。當時としては、きさらぎの望月といへば直ちに釋迦入寂の時と感じられたと見える。これはその意味のものである。これと同じく、そのといふ言葉を用ゐた歌が、西行には他にもあつて、好んでゐた用法と見える。

一八の歌のやうに、出家の初めには、世を捨てたにも拘はらず、花に心が引かれるといつて嘆いてゐた西行であるが、心境が進むにつれて次第にそれを念としなくなり、今最後の願望としては、花の下にて春死なむとまでいつてゐるのである。もとより櫻を好む心がいはせてゐるのであるが、その好みを十分に是認していつてゐるので、初めの心とは格段の相違をもつてゐるものであることが分る。これはそれだけのものではない。釋迦入寂の時に死なうといふことは、佛者ならでは思はぬことで、又佛者としてもたやすくは思ひ得られることではなからう。西行は今それをも思つてゐるのである。さすがに望月の頃と、頃といふ言葉を添へて緩和させてゐるが、これはむしろ當然のこととすべきである。さうした佛者としての大望と並べて、同じく佛者としての

西行が「花の下にて春」といつてゐるので、櫻に對する態度の常凡のものでないことも思はれ、又全體としての西行の心境も窺はれる感がするのである。これを單に一首の歌として觀るとさしたるものには思はれないが、西行といふ人の最期に近い頃の願望を現はしたものとして見ると、旨深いものである。歌は文藝であるが、文藝として作者を離れて鑑賞し得る一面と、離しては見難い半面とがあつて、それが繰返し問題となつてゐるのである。西行の歌は大體としては作者を離しては見難いもので、そこに彼の立場と特色とがあるのである。

花の歌どもよみけるに

(三) 吉野やま去年(こぞ)のしをりの道かへてまだ見ぬ方(かた)の花を尋ねむ

「しをり」は、路のない山を歩く時、又來る時の目じるしに、そこの立木(たちき)の枝を折つておくもの。吉野山の、去年の春しをりをしておいた方面とは路を變へて、此の春は、まだ見ない方(はう)の櫻を尋ねて見ようといふのである。

櫻に對しての盡きぬあこがれを詠んだものであるが、それと共に廣い吉野山のすべてが櫻にな

つてゐることを聯想させる歌で、あこがれではあるが落着いた靜かさを持つてゐる所、おのづからに餘情のある所が、傳統的な歌の典型ともなつてゐる。西行が修行のため吉野山に籠もつてゐたこと、しみじみした味を持つてゐる所などから、さすがに獨自の味ひもある。

題しらず

(三) わび人の涙に似たる櫻かな風身にしめばまづこぼれつつ

「わび人」は、廣く世に侘びた人の意であるが、今は西行自身の意でいつてゐる。出家の身をさういつてゐるのは、世間が對照されるからであつて、それが西行の或る時の心であつたと分る。さうした心の時には、自然涙もろくもなつてゐたのである。わび人の涙にも似る櫻であることよ、風が身にしむとすぐにこぼれこぼれして、といふのである。

わび人と思ふ自分と美しい櫻とを一つとして、やや冷たく吹く風の中に立つてゐる作者の思はれる歌である。この比喩は常識を超えたものである。櫻に對しての深い愛が、おのづからに超えさせてゐるのである。しみじみとしてゐる。

（三三）吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ

「やがて」は、そのまゝにで、花を見に來たそのまゝに。「出でじ」は、留どまつて修行をする意。「人」は、都にゐる、西行の歸りを待つてゐる、親しい關係の人。吉野山を、このまゝに出まいと思つてゐるわが身を、花が散つたならば出て來ようと、都の人は待つてゐるだらうかの意。

同じ吉野山も、西行からいふと修行を主とした所、都の人からいふと櫻を主とした所で、そこに思はくの食ひちがひがある。これは極めて自然なことである。美しい吉野山、人や待つらむとはいふものの、西行自身の人戀しい暖かさを含んでゐるが、全體としては人の世のさみしさを漂はした歌で、いはゆる擴がりを持つたものである。西行の人柄も思はせる歌である。新古今集に取られてゐる。

（三四）人も來ず心もちらで山里は花を見るにもたよりありけり

「心もちらで」は、今も口語でいつてゐるもので、心を散亂させない意である。散亂を厭ふのは、その反對の集中を求めてゐるからで、集中は修行の上で必要とする意のものである。散亂の原因は人の來ることとしていつてゐる。

人も來ず、從つて心も散亂しなくて、山里といふものは、櫻を見る上でも便宜のある所であるよの意。

春の頃の山里の良さを、都と比較してたたへた心である。前の歌の連作とも見られる趣を持つてゐる。西行だけの歌である。

151（二五）　初花の開けはじむる梢よりそばへて風の渡るなるかな

「梢より」は、梢にの意。「そばへて」は、甘えてで、今も地方によつては殘つてゐる言葉である。櫻の初花の開きはじめた梢に、甘えて風が吹き渡つてゐることであるよの意。

梢に咲きはじめた櫻の花を、靜かに吹き䌨してゆく風をみて、風が甘えて吹いてゐると見たの

である。そばへては風を擬人した言葉であるが、櫻の初花の風に搖らぐ狀態の面白さを、むしろ感覺的に捉へて、その上でいつてゐる言葉なので、自然な、適切なものに聞えて面白い。櫻に吹く風も、その初花の頃は愛して見てゐる所に、西行の心の自由さが見られる。

152 (二六) おぼつかな春は心の花にのみいづれの年かうかれそめけむ

「おぼつかな」は、はつきりしないの意で、これで切れてゐる。「うかれ」は、心が身から離れる意で忌まれてゐたことである。はつきりしない、春には心が花にばかり、一體いつの年から浮かれはじめたのであらうか。

春、心が花にばかり奪はれて、何も身につかない狀態でゐる自分を嘆いて、それに反省を加へ一體いつの年からこんなになつたのだらう、はつきりしないことだと思つて、その始末の附けられないのに當惑してゐる心を餘情とした歌である。一句で切り、三句で言ひさしといふやうに、屈折を持つた言ひ方をしてゐるのも、餘情としての嘆きを助けてゐる。西行の理智的の一面の、

その一歩前(まへ)の歌である。

(二七) 花も散り人も都へ歸りなば山さびしくやならむとすらむ

「山」は吉野山で、西行は修業の爲に籠もつてゐる時である。櫻も散り、それを觀に來た人も都へ歸つたならば、この山はさみしくならうとすることであらうかの意。

二四の心とは全く反對のもので、修行の爲に籠もつてゐる吉野山ながら、櫻が咲き、都の人の來てゐるのを喜んで、時節が過ぎたら、寂しくなるであらうかと、前から思ひやつてゐる心である。時勢は厭ふが、人なつかしさは捨てられない心で、西行の心の一つの面を示してゐるものである。

(二八) 花よりは命をぞなほ惜しむべき待ちつぐべしと思ひやはせし

惜しい花よりも、命の方(はう)をこそ一層惜しむべきである。此の命は、我が願ひの成就するのを待

ち續けてゐるものだと思つたらうか、そんなことは思はなかつたといふのである。

花に心の浮かれてゐる頃、出家の我が身を顧みて、大切なのは我が修行であると思ひ、氣を引きしめての述懐である。二六の心を押進めたもので、惑溺と共に強かつた理智方面を示してゐる歌である。自身、宮河歌合に取つてゐる。

（二九）春毎の花に心を慰めて六十あまりの年を經にける

春、花の頃の述懐である。六十歳を越して我を顧みると、西行は、年々の春の櫻より外に、その身世に慰めはなかつたといつてゐるのである。これは耽美の心がいつてゐるといふやうな安價なものではなく、本來、身世に執着の強かつた西行が、その充たされない所から、顧みて花月に心を繫いだのとも見られる。西行自身がした生活價値の告白とも見られる。

（三〇）盛りなるこの山櫻思ひおきていづち心のまた浮かるらむ

「思ひおきて」は、思ひ殘してで、それと別れる意。「心のまたうかる」は、心が山櫻から離れて、他に憧れる意。盛りに咲いてゐるこの山櫻を思ひ殘して、何處へ我が心はまたも憧れてゆくのだらうかの意。

深くも愛す山櫻に奪はれてゐた心が、俄にさうしてはゐられない氣がして、それに驅られて、そこには留どまつてゐられない心となつて、何處ぞへ移り行かうとし出してゐる、その俄なる心の動搖を、そのままに現はした歌である。盛りの山櫻に別れてうかれゆくといふのは、他の山櫻を慕つてのことではなく、反對に、道心に目覺めて、修行の意で移らうとするのである。しかしそれは餘情となつてゐるのである。前の二九の歌とは別方面で、その前の二八の歌の心を進展させた趣のものである。動搖のはげしかつた西行の心をさながらに示してゐるもので、その意味で心を引かれる歌である。

花

(三一) 吉野やま櫻が枝に雪ちりて花遲げなる年にもあるかな

吉野山に籠もつてゐて、櫻の枝にちらちらと降る春の雪を見て、今年の花は遲さうなことであると思ひ入つた心である。

ただ見るまま、感じるままをいつたもので、他意のないものである。しかしさう思つてゐる西行と、吉野山の狀態とが、ほのかながら全體として浮び出て來る感がある。いはゆる餘情である。複雜を含んだ單純といふ意で、注意される歌である。新古今集に取られてゐる。

1592

（三）花を待つ心こそなほ昔なれ春には疎くなりにしものを

「春」はここでは、華やかに賑やかな世間の意でいつてゐる。花を待つ心だけが、やはり昔通りに殘つてゐる。今わが心は、春に似る世間には疎くなつて來たのにといふのである。

永い自身の過去を見とほして、靜かに述懷してゐるものである。作者自身としては心深いものであらうと思はれるが、餘りにも寂び過ぎて、追隨しかねる感がなくもない。自身、宮河歌合に取つてゐる。

（三三）咲き初むる花を一枝まづ折りて昔の人の爲と思はむ

咲きはじめの花の一枝を、我が見るよりも先に折つて、昔の人に捧げる爲のものと思はうの意。自身好んで見る櫻ではあるが、その櫻は昔の尊くなつかしい人達が見い見いして來たものであるとして、その人達の爲に、咲き初めの一枝を第一に折り取るといふので、極めて心深い歌である。眼前の花に對して、その花は代々の人の心の宿つてゐるものと觀るのは、いはゆる宗教的の態度であつて、花のあはれと宗教心とを一つにしてゐる心である。これは此の時代の心とも見られるが、それよりも佛者西行の心の方が餘分に働いてゐるものと思はれる。風流、風雅といふことを權威あるものとしてゐるのは、かうした心からと思へる。

（三四）あはれ我が多くの春の花を見て染めおく心誰れに傳へむ

ああ我の多年の間の春の花の美しくあはれなさまを見て、それによつて染めてゐるこの心を、

誰れに傳へようの意。

前の歌と同じ心のものである。我が心のただに亡びゆくのを惜しんで、誰れにか傳へたいと思ひ、その人の得難さを嘆く心を餘情としてゐる歌であるが、我が心を惜しむのは、花によつて尊いものにされてゐるが故に惜しむので、結局我よりも花の方を惜しんでゐるのである。前の歌は花ゆゑに昔の人を尊んでゐるのであるが、今は同じく花ゆゑに我が心を尊んでゐるのである。かうなると花はやがて佛者の觀る佛と異らないものなのである。

(三五) 春を經て花の盛りに逢ひきつつ思ひ出多き我が身なりけり

春を經て、花の盛りに逢ひ逢ひして、その思ひ出の多い我が身なのであるの意。

前の二首の歌と同じ系統のもので、それらの心を總括したやうな趣のあるものである。我が身に生き甲斐のあつたことを思ひ、ひいて我と我が身を尊ぶ心を餘情としてゐるもので、その餘情は一首の强く純粹な調べに漂はしてゐるが、この尊さは、一に、數多の春を、盛りの花に逢ひ逢

ひした思ひ出である爲として、その他の何事でもないとしてゐるのである。かうした花は、前の二首の歌と同じく、佛者の佛でなくてはならない。西行の到達した心境の少くとも一面をあからさまに示してゐるものである。

（三六）　散らばまた歎きや添はむ山ざくら盛りになるは嬉しけれども

盛りとならうとする山櫻の花に對して、その美しさを愛づるよりも先に、散り去つた後の歎きを思ひやつた心である。一切を推移の一點から見ようとする此の佛教的の觀方は、最も傳統的なもので、心としては少しの特色もないものであるが、その心をこれほど單純に又素朴に詠んだものは少い。この單純と素朴は、西行が深く思ひ詰めてゐた所から發したものと思はれて、その點で個性的なものがあるといへる。

（三七）　曉と思はまほしき音なれや花に暮れぬる入相の鐘

暮遲き春の、おだやかに靜かに暮れてゆく中に聞えて來る鐘の音に對して、曉の鐘の音だと思ひたいと思ひ入つていつてゐるのである。春の趣は曙にあるといふことは傳統的な心持になつてゐて、それが働きかけてゐる心持であるが、しかし意識的といふ程の强いものではなく、いはば何となくさう感じられるといふ程のものである。心としては何程のものでもないが、生きてゐる歌である。

（三八）　今の我も昔の人も花見てむ心の色は變らじものを

「心の色」は、心の樣といふに近い。今の我も、又昔の人も、花を見ようとする此の心の樣は變りがなからうにと、思ひ入つていつてゐるのである。自身の花を見る心を、不變の人間性の發露であると觀じ、又その人間性を尊くもなつかしいものと觀じての心である。三三、三四と同系統の心で、それらを總括したとも見られる心である。

2059
（三九）思ひかへす悟や今日はなからまし花に染めおく色なかりせば

「悟」は、佛教の上のそれ。「花に染めおく色」は、花によつて我が心を色に染ませておくで、言ひかへると、心の色即ち心の様を、花を見ることによつて一層深くし得た意。心の色といふ成語があるので、その縁で花に染めおくといつたのである。再び思ひ返す、即ち身についた悟が、今日は無いことであつたらう。花を見ることによつて染ませ得た此の心の色が無かつたならば、の意。

一日しみじみと花を見暮した後、心に忘れ難い或る物を感じ得て、それを喜ぶ心からいつてゐるものである。西行が花を觀ることによつて得た悟の何ういふものであるかは知り難い。しかし花を佛の如くに感じてゐる彼が、一日を山中に花と對してゐて、深い何物かを感得したとしても怪しむには足りないことである。とにかく西行に限られた歌である。

1615
（四〇）風もよし花をも散らせいかがせむ思ひはつればあらま憂き世ぞ

「よし」は、ままよ。「思ひはつれば」は、「思ひ極むれ」ば。宮河歌合には、「思ひいづれば」とある。風もままよ、花をも散らすならば散らせ。何としやうがあらう。思ひ極むれば、生きてゐることの憂い世の中であるぞの意。

惜しむべき花の風に散るのを見て、わが生死に思ひ及ぼした歌は多く、傳統的のものともなつてゐる。これもそれではあるが、一歩を進めて思ひ諦めてゐる所のあるもので、そこから來る强さのあるものである。三句「いかがせむ」は、大きな理法に隨つてゐる心を示してゐるもので、感傷を超えてゐるものである。强い氣性の見える歌で、調べもそれを示してゐる。

1617 (四二) 花も散り涙ももろき春なれや又やはと思ふ夕暮の空

「又やはと思ふ」は、又重ねて花を見ることがあらうか、無いと思ふの意。花も散り、涙もまた脆くこぼれる春であるよ。又花を見る春があらうか、ないと思ふ夕暮の空であるよの意。

類歌の多いものであるが、大きく捉へて、しみじみといつてゐるので、老後、終りと思ふ春の

花を見た時の作者の心の、おのづからに感じられるところがある。

1477 (四二) 吉野やま花の散りにし木の下にとめし心は我を待つらむ

「花の散りにし木の下」は、櫻が散つて積つてゐるその木下で、落花の趣を見せてゐる所。「とめし心は」は、落花の趣に心を殘して來た意で、心を身から離れたものとしていつたもの。「我を待つらむ」は、我が身の再びそこへ行くのを待つてゐるようの意であるが、單にそれだけではなく、身から離れた心の、身の行くのを待つてゐるといふのは、身も心と共に落花に埋もることを待つてゐるようの意である。その對手は、花は根に歸るといふ落花であるから、それとの關係で、自分の身も落花と同じく元へ還るべきで、成るべくはさうした所で死にたいといふ心を暗示してゐるものと取れる。一首としては、吉野山の花の散つた木の下に留めて來た心は、わが身の行くのを待つてゐるようの意である。

全體として、極めて幽玄な味ひを持つた歌である。かうした歌は自由に解せるもので、結句を

單に、再び行くのを待つてゐようといふだけの耽美の心のものと解すと、それでも、通る所がある。しかし作意は、さうした躍つた憧れではなく、靜かに思入つたもので、上の如く解すべきものに思へる。歌としては、上の歌に續く心のもので、二〇、「願はくは花の下にて春死なむ」といふ心にも續いて行くものと思はれる。

（四三）　眺めつる朝の雨の庭の面に花の雪しく春の夕暮

つれづれと眺めた朝の雨の降る庭の面に、落花が雪と敷いてゐる春の夕暮よの意。

庭の櫻の、まだ散らずにゐたのが、朝降つた雨で、夕暮には雪のやうに散つてゐるといふのでその雨に散ることはいはず、落花の白く目立つて見える夕暮の光景によつて、そのことを聯想させる詠み方をしてゐるのである。雨に散るあはれさをいはない所、夕暮によつて感覺的にしてゐる所など、淡い歌ではあるが快いものである。

(四四) 眺むとて花にもいたく馴れぬれば散る別こそ悲しかりけれ

眺めるとて、花にひどく馴れたので、その散りゆく別が、何うにも悲しいことだの意。落花を惜しむ心であるが、惜しむといふ程度のものではなく、別がひどくも悲しいと、心ある物を對手としたやうにいつてゐる。さうかといつて擬人してゐるのではなく、「眺むとて」、「馴れぬれば」と、原因は我にあるとしてゐる。卽ち花を花として、距離を置いて見ての上の愛着である。感傷ではあるが、それに理智がまじつて、單純ではないものとなつてゐる。そこに特色がある。

(四五) 惜しめども思ひげもなくあだに散る花は心ぞかしこかりける

「思ひげもなく」は、歎く樣子もなく。「あだ」は、浮き／＼しての意。我は惜しむけれども、歎く樣子もなく、浮き／＼と散る花は、その心が賢いことであるよの意。

前の歌の延長で、これは花の方を主として、その散るのを是認しての心である。その是認は、花の心を賢いとしてであるが、賢さは、散るに際して、未練げもなく、浮き／＼と散る意であ

る。言ひかへると世に執着をとどめず、理法に隨つて安らかに散つてゆくといふので、これは佛者西行の、自身の心境として願つてゐるものなのである。理智的な歌ではあるが、西行の身についてゐるもので、概念ではない。

蛙

(一四六) ま菅生ふる山田に水をまかすれば嬉し顔にも鳴く蛙かな

「ま菅」は、菅。山によく生える草。それの生ふる山田は、山中にある荒れた田である。「まかすれば」は、水を灑けることで、これから耕さうとしてのこと。

菅の生えてゐる山田に水を灑けるので嬉しい樣子をして鳴く蛙であるよの意。

蛙がかうした愛情をもつて見られ、そして和歌の對象とされたといふことは、多分彼等の長い歴史においても初めてのことであつたらう。歌としては、諸國を遍歴した西行によつて、初めて發見された所の美を盛つたものである。

題しらず

（四七）刈り殘すみづの眞菰にかくろひて蔭持ちがほに鳴く蛙かな

「みづの眞菰」の「眞菰」は、水草(みくさ)で、織つて蓆にするなど、日常生活に用途の多いものである。「みづの」は瑞(みづ)のとも取れなくはないが、今は蛙のゐる場所を、はかない所としていつてゐるのであるから、水のと取るべきであらう。「蔭持ちがほ」の「蔭」は、御蔭を蒙るなどいふ蔭で、保護する物の意。「持ちがほ」は、持つてゐる樣子をして。

たま〳〵刈り殘したいささかの水の中の眞菰にすがつて、保護する物を持つてゐる樣子をして鳴いてゐる蛙よ。といふので、鳴いてゐる蛙の樣子の得意げなのに興を催した心である。刈り殘すは、たま〳〵さうなつたので、聊かの眞菰といふことを餘情としたもの。水のは、事としてはいふにも及ばないことであるが、その境のはかなさを現はす爲のものと取れる。蔭持ちがほも、當時としては強力な者に庇護されない限りは安心してはゐられなかつたので、その庇護の意でいつてゐるのである。蛙に對しての興ではあるが、その興はあはれみを主としたもので、あはれな物が、それとも知らずに得意げにしてゐる所に興を感じたのである。しかし一讀した所では可笑(をか)

しみの勝つたものとなつてゐて、その外のことはちよつと思はせない所がある。單純で複雜な味を持つた歌といへる。

菫

1618 (四八) 古里の昔の庭を思ひ出でてすみれ摘みにと來る人もがな

「古里」といふのは、こゝは或る人の住み捨てた家で、「人」といふのは、その家の人で、今は他に移つてゐる人である。

古里の昔の庭を思ひ出して、今こゝに咲いてゐる菫を摘みに來る人をあらせたいの意。

住む人のない家の荒れた庭に、春の菫のあはれに咲いてゐるのを見て、第三者としてさみしさを感じて、この家に住んでゐた人で、昔なつかしさから、春の今頃を思ひ出して、この菫を摘みに來る人があれば、我が感じるあはれさにも增してあはれを感じて、この我があはれもその人に通ふことであらうと思つたので、主意とするあはれの方を餘情としたものである。あはれを深めることを慰めとしてゐるもので、當時の詩情であると共に、殊に西行に强かつた心持である。淡

くいつてゐる所に却つて趣がある。

かきつばた

（四九）　作り捨て荒らしはてたる澤小田に盛りに咲ける杜若かな

作り捨ては、稲を作ることを止めた意。「澤小田」は、澤田で、低地の、いつも水の淺く湛へてゐる田。

作り捨てゝ、荒らし切つてゐる澤田に、今を眞盛りに咲いてゐるかきつばたの花よの意。

この杜若は、おのづからに育つて咲いてゐるものと思はれる。紫の色は、色として貴ばれてゐたから、花としては野生の杜若であるが、その花は今とはちがつて、特別なゆかしさ、美しさを持つてゐたことであらうと思はれる。

荒らし切つた澤田に、紫深く咲いてゐる杜若の花は、感覺的に既に對照の際立つたものであるが、紫といふ點で、當時では一段と際立つてゐたことと思はれる。しかしそれは餘情である。實景を捉へたものと見えるが、單純で味ひのある歌である。

三月晦日に

（三〇）行く春をとどめかねぬる夕暮はあけぼのよりもあはれなりけり

「三月晦日」は、春の盡きる日で、行く春を惜しむ心である。「夕暮」は、春の盡きる日の、その盡きる時刻で、今盡きてしまつた間際(まぎは)である。耽美の心の強く、それをあはれと感じてゐた當時、代表的にあはれであつたのは戀と四季の風物で、四季の代表は花の咲く春と紅葉の秋とである。今はその春との別れを、時間にまで切り縮めていつてゐるものである。春の趣の第一は曙にあるといふことは、既に詩的常識となつてゐた。その趣をあはれといつてゐる。夕暮のあはれは、春と別れる悲しみであるが、それも同じくあはれといつてゐる。あはれといふ言葉の範圍を思はせられる。

行く春をとゞめようにもとゞめられなかつた夕暮は、曙にもまさつてあはれであることだの意。

春の別れを惜しむ歌は多く、言葉を盡していつてゐるのが普通である。今はそのあはれを曙と比較して、それにもましてゐるといつてゐるだけで、一見、心淺いもののやうに見える。しかし

春の別れの悲しさは既に常識となつてゐるので、そのあはれを曙にもまさつてゐるといへば、曙のあはれのいかに深いものであつたかを語ることゝなつて、それとの別れの悲しみとなつて、淺い言葉が深い餘情を持つて來ることゝもなる。それはとにかく、春のあはれを身に沁めて、別れの方は割合に輕くいつてゐることは明らかである。そこに西行の個性があるといへる。

二、夏の歌

卯花似雪

(五一) 雪分けて外山を出でし心地して卯の花しげき小野のほそ徑

「卯の花」は、いま空木といつてゐる灌木の花で、若葉の頃純白に咲く。「外山」は、平地から見て、奥山に對して近い山の稱。

雪を踏み分けて、外山から平地に出て來た氣持がして見る、卯の花の繁く咲いてゐる野の細みちをの意。

卯の花を雪と見るのは常識となつてゐたものである。この歌もそれであるが、その卯の花を、野の細みちを挾んで繁く咲いてゐるものとし、そして雪を、外山から里へ下りて來る際のものとしてゐる所に新意がある。この新意は實感から來てゐるもので、野のさうした路に立つた時、かつて雪の外山から里へ出たことのあつた時を聯想して、これとそれとを一つにしたものと思はれ

る。實感から來る鮮やかさと、しみ〴〵した所が、捨て難いものに思はせる。

雨中時鳥

（二〇三）五月雨の晴間も見えぬ雲路より山時鳥鳴きて過ぐなり

「雲路より」は、雲中の路をの意。「山時鳥」は、時鳥を山の物とし、その山から里へ出た當座の時鳥。五月雨の晴間も見えず雲の罩めてゐるその雲の中の路を、山時鳥が鳴いて通り過ぎることであるよ。

五月雨の靜かに降りつゞいてゐる空に、時鳥が鳴いて過ぎたといふので、極めてありふれた實境を、そのまゝ歌にしたものと取れる。事も平凡で、詠み方もそれにふさはしい單純なものであるが、一種の趣の捨て難いものがある。その趣は、天地がたゞ暗い雲となつて他に何物もない中に、時鳥の聲が聞えて消えて行つたといふ、その對照から生まれて來るものである。さみしくはあるが一點の艶（つや）があつて、それとも云ひきれない、捉へてはいひ難いものである。澄んだ、神經のとほつた所があつて、作者の色に染められてゐるものである。

（五三）　ほととぎす五月（さつき）の雨をわづらひて尾の上の隈の杉に鳴くなり

「尾の上」は、山の意のもの。「隈」は、物の隠れてゐる所の稱で、今は凹みと取れる。ほとゝぎすは、五月の雨に惱んで、山の凹みに生えてゐる杉の樹に鳴いてゐることであるよ。

實景を捉へての歌と取れる。時鳥の鳴き場所として、山の凹みに生えてゐる杉の木といふやうなことは、實景としてゞなくては捉へられないものだからである。これが一首の感を鮮やかにしてゐる。しかし時鳥が五月の雨に惱んでゐると取つたのは作者の心である。場所が場所とて、作者も同じく山中にあつて、五月雨に降られてゐる所から、かうした解をしたものと思はれる。それだと時鳥を擬人したといふ常套的なものではなく、作者の現に持つてゐる心を時鳥に寄せたものとなる。これは景の特殊なところから自然に感じさせるものである。

月前郭公

（五四）　五月雨の雲かさなれる空晴れて山ほとゝぎす月に鳴くなり

註を要さない明らかな歌である。五二の歌とまさしく逆になつてゐるもので、これは視覺を主としたものである。天地をたゞ月と時鳥のみにして、人間を挟まないところは少しも違つてゐない。初句より三句までは、五月雨の密雲が散つて、珍らしくも空の晴れたといふ、その變化をいつたもので、感の明らかさは、この對照から來てゐるのである。一首の調べの澄んでゐるところから、この對照は單なる技巧と思はせず、そこに作者の心があるものと思はせる。

時鳥を

（噩）語らひしその夜の聲はほとゝぎすいかなる世にも忘れむものか

「語らひし」は、語り合ひしで、時鳥と作者と語り合つたのである。「その夜」は、或る夜で、この言ひ方は西行のよく用ゐてゐるものである。「聲」は、時鳥の聲で、語らひしといふことの内容に觸れてゐるものである。卽ち語らつたのは、時鳥の聲と作者の持つた感應とを誇張していつたものだといふことが分る。時鳥は神祕性を持つた鳥で、冥途とも往復すると思はれてゐたのであるが、これは要するに、その聲の身に沁み入るものがあつて、悲哀を感じさせるといふことの

延長と思はれる。今も、一夜聞くと身に沁みた聲を、語らひしと時鳥を擬人していつたものである。「いかなる世にも」は、人間を三世卽ち過去、現在、未來に亘つて流轉して、永劫に亡びないものとする信仰から、永劫の意でいつてゐるもの。

我と語り合つたかの夜の身に沁みた聲は、時鳥よ、永劫に亘つて忘れられようかの意。

奥行(おくゆき)の深く、見とほせないやうな氣分である。時鳥の聲は身に沁みるものだといふが、それは大體さみしい聲だからである。しかし其のさみしさは、單なるさみしさではなく、美しさなつかしさを含んだものである。この美しくさみしいといふことは、いはゆるあはれで、當時時鳥の愛されたのはそのあはれさからである。西行のこの歌で示してゐる心は、あはれを愛するといふ程度のものではなく、あはれを通して、天地の心に參ずるともいふべきもので、言ひかへると天地の心をあはれとし、時鳥の聲がそれを具象してゐるともいふべきものである。大體としては宗教的な心である。この心は春の櫻の歌でも既に示してゐるもので、西行の個性を語つてゐるものである。

百首の歌の中に、郭公十首

（五六）所がら聞き難きかと時鳥里をかへても待たむとぞ思ふ

時鳥の初聲を慕つて、それを待つ歌は多い、あはれなる物に憧れる心で、當時の詩情の一半をなしてゐた、その範圍のものである。「里をかへても」といつてゐる所に、平凡ではあるが、同時に修行僧西行の心も見えて、自身に即してゐる意味で或る特色があるといへる。

（五七）烏羽玉のよる鳴く鳥はなきものを又たぐひなき山時鳥

時鳥の夜も鳴く點を、他に類のないことゝして讃へたものである。時鳥の愛でられるのはその聲のあはれさからで、あはれは晝よりも夜の方が深い所から、夜の聲を愛でることが常識となつてゐた。今はその常識を、批評的に見た心のもので、距離をもつて時鳥といふものを大觀した形のものである。言ひかへるとこれは理智的な歌で、それを正面からしてゐるものである。西行には此の種の、理智を理智として正面から扱つたものが多く、一つの特色となつてゐる。理智ではあるがいや味がないので、理智といふことを思はせない所がある。

1676（五八）　わが思ふ妹（いも）がり行きて時鳥寢ざめの袖のあはれ傳へよ

「寢覺め」はあはれなものとなつてゐた。そのあはれは、晝は紛れてゐる我が身のことを、靜かにしみじみと思はせられる所から來るものである。「袖のあはれ」は、袖は涙に濡れるものとして、涙をあはれと言ひかへたものである。

我が思ふ妹の所へ行つて、時鳥よ、我が寢覺めのあはれさから涙をこぼしてゐることを告げてくれよの意。

寢覺めをして、そのあはれさから涙をこぼし、傍らに妹が居たならば、そのあはれを話して慰めようものをと思つてゐる折柄、時鳥が鳴いて過ぎたので、あはれを傳言してもらふにはふさはしい使と思つての心である。

戀の歌に似てゐるが、妹が戀しいといふのではなく、妹は人の世のあはれを語つて慰め合ふものとしてゐるので、むしろ友に對しての心である。題詠風の趣を持つた歌であるが、實感味を濃

原に持つてゐる所に趣を感じさせられる。

（三九）　聞かずともここを瀬にせむほととぎす山田の原の杉の群立

「瀬」は場所。「山田の原」は、伊勢の地名。

たとひ待ち得ずとも、こゝを待つ場所としよう、ほととぎすを。山田の原の杉の群立つてゐるこゝを。

時鳥を聞かうとして山田の原へ出て行き、杉の群立つてゐる所を見かけて、とにかく此所で待たうと腹をきめた心である。時鳥を待つ場所を定めるには、何等かの意味でそれにふさはしい場所をと思ふのが普通であるのに、さうした分別を超えて、「聞かずともここを」と直覺的に定めてゐる所に特殊さがあり、又作者の人柄を思はせる所もあつて、それが味ひとなつてゐる。又普通からいふと、原の中の杉の群立の夜の様は、あはれな時鳥の聲を待つにふさはしい所とは思はれない點もある。それをさう直覺した西行の心には、夜見る原の中の杉の群立に心を引かれるもの

があつたと取るべきであらう。これは幽寂その物であつて、一時代後になると甚しく重んじられたものである。多分時鳥の聲に憧れて庵を出て來た西行は、此の幽寂な樣を見ると、新たにその方に心を引かれて、何方がなつかしいのか分らない程の狀態となつたものと見える。此の歌はその心をそのまゝに現はしたもので、聞かずともこゝを瀬にといつてゐるのは、その瞬間の全腹の眞實だつたのであらう。單純な形のものであるが、含む所の多い歌である。

（六三〇）ほととぎすいかなる聲の契にてかかる聲ある鳥となりけむ

「聲の契」の「契」は、宿命で、現世に於ける生物の狀態は、前世に於ける因の果としてのものの意。現世に良い聲を持つて生まれて來たものは、聲としての宿命の結果だといふのである。又人と生まれ鳥と生まれるのも、三世に亘つての流轉の爲だとするので、聲の宿命としては良い聲を立て得る物の鳥と生まれざるを得ないのである。これらは佛說の常識となつてゐたものと思はれる。

時鳥は、聲の上での何ういふ宿命によつて、かうした愛でたい聲を持つた鳥となつて生まれて

來たのであらうか。

　時鳥の聲の愛でたさを讃へた心で、その愛でたさを、前世の宿縁としてゆかしんだ心のものである。萬物を一大生命の流轉の姿と觀、又その萬物は眼前に流轉しつゝゐる物と觀る、當時としては信仰の上の常識となつてゐたもので、その心からいつてゐるものである。西行が櫻の色を通して宇宙の中心に觸れようとする心を見せ、時鳥の聲からも同じ心を捉へようとしてゐるのは、當時の詩情であるあはれを伴はせつつそれをしようとする所に特色があるが、單に自然の美を酷愛するといふことではなく、佛教の世界觀を中心として、それに當時の耽美氣分を伴はせてゐるものと見るべきであらう。卽ち大體は思想的で、名を附ければ佛教文學といふべきものと思はせられる。

(六一)　ほととぎす深き峰より出でにけり外山の裾に聲の落ち來る

　時鳥を山に住んでゐる鳥とし、自身は山の麓に住んでゐて、初めて山から里へ出て來る時鳥の

聲を聞いたのを、印象的にいつたものである。調べの強い歌である。山に籠つてゐた時鳥の、時來り緣熟して、初めて里へ出て來たその第一聲といふことは、佛者としての西行には感の深かつたものと思はれる。

(六二) つくづくと物思ひをれば時鳥こころに餘る聲聞ゆなり

「物思ひ」は、嘆き。「こころに餘る」は、心に保ち切れない、即ち怺へられない。

つく〴〵と嘆きをしてゐると、時鳥のあはれさ怺へきれない聲が聞えて來ることだ。

物を思へばの內容はいつてゐないが、時鳥のあはれさが怺へられないといふので、その關係で人の身のあはれさを感じてゐることと分る。又時鳥の聲をこころに餘るといふのも、我があはれさから迎へて感じる爲だと分る。双方のあはれさは餘情となつてゐて、そしてそれが一首の中心となつてゐるのである。他奇のないものであるが、實感の作と思はれる。

（二一七）ほととぎす谷のまにまに訪れてあはれに見ゆる藤躑躅かな

「谷のまにまに」は、谷の續いてゐるに連れてで、谷を何處までもの意。「訪れて」は、鳴いて行つて。時鳥が谷の續くに連れて鳴いて過ぎて、あはれに見られる藤と躑躅の花であるよ。

實景の歌と見える。山に藤が咲き、躑躅が咲いてゐる谷へ入つて行くと、折柄ほととぎすがその谷間を何處までも鳴いて過ぎて行くので、その爲に藤、躑躅があはれに見えるといふのである。作者からいふと、なつかしい物の藤、躑躅に加へて、なつかしい時鳥も鳴くので、一段となつかしさが深くなつたのであるが、それを、藤、躑躅の方を主として、それを時鳥がなつかしがつて訪れたやうに取り、その爲にあはれが增したやうにいつたのである。我が心を自然の方に移したのであるが、それをするに、時鳥も藤、躑躅も有情の物のやうに見る當時の心持によつてその事をしてゐるのである。細かい心持をもつた歌である。

五月雨

（二一八）五月雨に小田の早苗やいかならむ畦のうき土洗ひこされて

「うき土」の「うき」は、泥。「洗ひこされて」は、田に溢れる水で、畦の泥土が洗はれ、乘り越されて。

五月雨の爲に、田の早苗は何のやうになつたらうか。田に溢れる水で、畦の泥土は洗はれ乘り越されて。

五月雨の降りつづく頃、家の内にあつて、田の早苗を思ひやつて危ぶんだ心であるが、畦の泥土の狀態まで細かく思ひやつてゐるので、實感味のあるものとなつてゐる。早苗を思ひやつたのは、弱く、美しいものに對する心づかひで、それ以外のものとは思はれない。田園に親しんでゐる心の現はれたものである。

旅行野草深といふことを

（六五）旅びとの分くる夏野の草しげみ葉末に菅の小笠はづれて

「小笠はづれて」は、笠だけが夏草の上に浮んでゐるのを、感覺的にいつたもの。

旅びとが踏み分けてゆく夏野の草が繁さに、その葉の上に、かぶつてゐる菅の笠が浮んでゐる

の意。

題詠であるが、嘗て目撃して印象となつてゐるものをいつたと見える。夏草の高い野を行く笠をかぶつた旅人(たびびと)が、距離を持つて見ると、人の姿は見えず、笠だけが草の上に浮んだやうに見えるといふので、印象の鮮明な歌である。全體としては、眼に見る興味を主としたもので、はづれてといふ言葉もその心のあるものと取れるが、しかし輕い所のないものである。言葉の續きが自然な爲である。結句のいひさしも、此の感を強めるものとなつてゐる。

題不知

(六六) 道のべの清水流るる柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ

四五句は、「こそ」は、それだけを取立てる意、「つれ」は、過去。

道のほとりの、清水の流れてゐる柳の木蔭、ほんのしばらくの間と思つて、歩みをとめたのであつた。

夏の旅をしてゐて、道ばたの柳の蔭で、清水も流れてゐる所の涼しさうなので、急ぐ心から、

ほんの暫しと思つて立ちどまつたのであるが、つい時を過してしまつたといふので、その時を過したのは、「こそ」と「つれ」とで餘情として現はしてゐるのである。この時を過したのは、そこの涼しさの快さから、張つた心の思はずも弛んだといふ意で、これが餘情の内容である。單純を極めた言葉に、複雜した内容を、さりげなく、併ししみ〴〵とした趣を持たせて盛つてゐるのである。西行の詩才の程を思はせる詠み振りである。

（二七）　よられつる野もせ　の草のかぎろひて涼しく曇る夕立の空

「よられつる」は、草の葉が夏の烈しい光の爲に乾いて、縒れた意。「野もせ」は、野一面。

「かぎろひて」は、陽炎を立てて。

縒られた野一面の草が陽炎を立てゝ、涼しくも曇る夕立の空であるよ。

夏のはげしい光線を、直射し續けてゐた野の空が、俄かに夕立模樣となつて來た時の光景である。上三句は野の樣、下二句は空の樣で、對照をさせてゐる。廣い野の涯もなく續いてゐる樣を現

はすに、縒られた草の葉、それから立つ陽炎といふやうな、細かい具象をし、空を現はすにも、涼しく曇るといふ、一見矛盾したやうで、しかも事の眞を捉へたことをいつて、その細かい事相の二群を對照させることによつて、大景と、その持つ氣分とをあり〳〵と現はし來つてゐる。細く、しみじみした心と同時に、大きくのびやかな心を持つてゐるその心の傾向、それを同時に用ゐて破綻を見せない表現の才は、歌人西行を思はせるものである。

（六八）　底澄みて浪こまかなるさざれ水渡りやられぬ山川のかげ

「さざれ水」は、小さい川。「山川のかげ」は、山を流れてゐる川の光。

水の底が澄んで透きとほり、立つ浪の細かな細い水、渡らうとするが渡れない山川の光よ。

山川の細い流れの美しさに、勿體ない氣がし、渡らうにも渡れない心である。底の澄んでゐること、浪の細かなこと、流れの光つてゐること、細かく描き出して、美しさも勿體なさもいはず、それは餘情としてゐるのである。實景を詠んだ作で、愛すべきものである。

三、秋の歌

秋風

1633

（六九）おしなべて物を思はぬ人にさへ心をつくる秋の初風

「おしなべて」は、すべて一樣に。「心をつくる」はの「心」は、秋のあはれ。「つくる」は、附くるで、あはれを感じさせる。「秋の初風」は、立秋と共に吹く風で、秋風はさみしいものとする詩的常識の上に立つてのもの。

すべて一樣に、嘆きを知らない人にまでも、あはれを感じさせる秋の初風であるよ。

立秋と共に吹きかはる秋風のさみしさを身に感じつゝ、その秋風を距離をもつて大觀した心で心としては理智的な所のあるものであるが、併し調べはしみ〲としてゐて、感そのものをいつたやうに聞えるものである。おしなべてといつて、更にそれに註を附ける態度で、物を思はぬ人にさへといつてゐる所、心の細かく、むしろ神經質にさへ感じられる。しかし目立たぬものとな

つてゐる。

（七〇）　あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原

「宮城野」は、陸奥で、萩をもつて聞えた歌枕。

あはれ、何のやうに草の葉の露がこぼれるであらうか。秋風が吹き立つた。あの宮城野の原は何のやうであらう。

秋風の爲に、草葉に宿つてゐる露の玉の散るのに、例のあはれを感じる心から、宮城野では何のやうに散るだらうかと、憧れの心から思ひやつたのである。この露の散るのは、美しくあはれだといふ以外のものではない。調べが躍つてゐるが、これは憧れの強い心の現はれで、そこに西行の心が現はれてゐる。

七夕

（七一）　いそぎ起きて庭の小草の露踏まむやさしき數に人や思ふと

「小草」は、草。「露」は、涙の比喩に使はれてゐるもので、當時は直ちに涙を聯想するものともなつてゐた。又しののめに置くものともなつてゐたので、七夕の二星が別れを惜しんでこぼす涙の、草葉に宿るものとも聯想されてゐたのである。「やさしき」は、七夕の別れの悲しみに同感する人の意。「數」は、さうした人の中。

急いで起きて、庭の草の露を踏まう。我もあはれを知る者の中に入れられる者と人が思ふかも知れぬので。

戀のあはれを解し得る者と、第三者から見られたいといふ心をいつたものである。言ひ方は餘情的で、いそぎ起きては、七夕の別れを思ひやつてあはれに堪へない意のもの。露を踏むのは、七夕のあはれを身に沁ませる仕ぐさである。かうした心を抱くのは、自身としては戀のあはれに遠くなつてゐるのであるが、他人からはさうは思はれたくなく、戀のあはれを解してゐると思はれたいのである。卽ち僞裝である。この心は當時の、あはれを知るといはれてゐる階級に一般に抱かれてゐた心持で、戀にも此の心が伴つてゐたのである。卽ち純粹の心からの戀ではなく、あは

れを知ると他から思はれようが爲に、戀をしてゐる如く僞裝するといふ一面があつたのである。西行の時代を超えると共に、時代の兒であつたことを示してゐる歌といへる。彼としては本心をいつた歌と思はれる。

秋の歌に露をよむとて

301（七三） 大方の露には何のなるならむ袂に置くは涙なりけり

おしなべての露には、何が變つてあゝなるのであらうか。袂に置く露は、我がこぼす涙なのである。

秋のさびしさからこぼす涙を、袂の上の露と見て、袂以外の、このおしなべての露は何があゝなつたのだらうと怪しんだ心である。涙と露とは、それに依つてこれをと、互に聯想させるものとなつてゐたので、大方の露を見て、同じく涙を聯想するのであるが、その餘りにも多いので、何物の涙とも見當が附けられず、怪しみをもつて見てゐるのである。「何のなるならむ」は、一見誇張したもののゝ如く見えるのであるが、現に我が涙は袂の露となつてをり、又一切のものは止ます

流轉してゐると見る世界觀もあるので、當時にあつては誇張とは感じられなかつたものと思はれる。世界を一色に、あはれなものに感じてゐた心が、いかにも單純に具象されてゐて、詩才の程を思はせられる歌である。

題しらず

（一〇四三）石の上古き住みかへ分け入れば庭の淺茅に露ぞこぼるる

「石の上」は、古の枕詞。「古き住みか」は、自身の住み捨てた家。「淺茅」は、丈の低い茅で、荒れた所に生えるものとされてゐた。

古い我が住み家へ草を分けて入つて行くと、荒れた庭に生えてゐる淺茅の露がこぼれることである。

我が昔戀しさからこぼれる涙を、庭の淺茅からおのづからにこぼれる露に讓つて現はしてゐるといふだけで、他奇のない歌である。しかし細く、しみ〳〵として、品も持つてゐて、やはり西行ならではと思はせるものである。

（七四）小笹原葉すゑの露の玉に似てはしなき山を行く心地する

「はしなき山」は、附き穗のない山で、思ひ設けぬ懸け離れた山の意。今は玉をもつて飾つた貴い山の意でいつてゐる。

笹原の笹の葉末に宿つてゐる露が玉に似てゐて、懸け離れた山を歩いてゐる心地がする。

修行の爲に山に籠つてゐた或る時の實感と思はれる。笹の葉に置く露は光の强いもので、玉を聯想させる所がある。「はしなき山」は玉をもつて飾つた山で、多分は佛の淨土を聯想して、憚つて態と婉曲にいつたものと思はれる。感のある歌である。

荻

（七五）思ふにも過ぎてあはれに聞ゆるは荻の葉みだる秋の夕風

「思ふにも過ぎて」は、思つてゐたにも增してで、荻を吹く秋風の音は極めてさみしいものとされてゐて、それと承知してゐたのにもまさつて。「荻」は、野生のものも多いが、當時庭に植

ゐる風習となつてゐた。これは庭のものと思はれる。

思つてゐたにもまさつてあはれに聞えるものは、荻の葉を亂して吹く秋の夕風であるよ。荻の葉に鳴る秋の夕風のさみしさで、極めて常套なものであるが、思ふにも過ぎてといつてゐるので、味ひのあるものとなつてゐる。それと承知してゐながら、親しく耳にすると、記憶してゐるものよりもまさつてあはれだといふのは、古いものを感じによつて新しくすることで、西行の感性を語つてゐるものといへる。事は單純なものであるが、表現が純粹で、素朴な爲に、奥行（おくゆき）のあるものとなつて、捨て難くなつてゐる。

秋のうたに

(七六)　都疎くなりにけりとも見ゆるかな葎しげれる道のけしきに

「葎しげれる道」は、葎は人の踏まない地に生えるものとされてゐるので、それの生えてゐる道は邊鄙な所と取れる。修行の爲に籠もつてゐた土地であらう。

都が疎いものになつてしまつたと見えることであるよ。葎が繁つてゐる道の樣子によつて。

修行の爲に靜かな場所を求めてそこに籠もつてゐると、都の空が戀しく、人なつかしい心の起ることをいつてゐる歌が可なりに多い。これもその中のものである。都を對立的に見、「葎しげれる道」といつてゐるから、都を離れた邊鄙な所と取れる。例の修行の折のことであらう。都戀しい心を内に持ちながら、それとは云はずに、眼の前に見る物に托して、微かな心ゆらぎとして現はしてゐる所に、却つて味ひを感じる。

薄當路繁

(二八一) 花すすき心あてにぞ分けて行くほの見し道の跡しなければ

「ほの見し道」は、以前に見た道で、この前來た時には、ほのかながら殘つてゐた道の意。その道は何所へ行くものとも云つてゐないが、西行にはなつかしい道で、他の人は來ないものと見えるから、西行に取つての故里といふ範圍の道であらうと取れる。

尾花の中を、見當を附けては分けて行く。以前はほのかながら殘つてゐた道が、今は跡かたもないので。

思ひ出すとなつかしく、稀々ながら立寄つてゐる所の道が、他には來る人もない所から、全く荒れ果てゝしまつたさみしさを、比較によつて現はしてゐる歌である。このさみしさは、時の推移から來るもので、此の時代の物の見方の基調となつてゐたものである。推移の上から見ると、一切があはれに見えるもので、詩情としてのあはれもその意のものである。そしてこれはやがて佛教の世界觀なのである。此の歌の味ひは、四五句の言ひ方のかすかさにある。何所への道ともいはず、又此の前に來た時に較べて一層荒れたといふのを、極めてほのかな方法でいつてゐる。此のかすかさ、ほのかさが、あはれを漂はすに最も適したものとなつてゐる。これは此の歌に限つたことではなく、廣く此の時代に通じてのことで、この歌もそれに從つてゐるに過ぎないのであるが、表現のほのかさが、單に趣味といふやうなものではなく、世界觀の延長としての詩情と、必然的の關係を持つたものであることを思はせられる。又この歌は題詠であるが、題詠といふものも、作者次第でいかやうにも扱へたものであることを思はせられる。

人々秋の歌十首よみけるに

（七八）庵にもる月の影こそさびしけれ山田は引板の音ばかりして

「引板」は、いま鳴子といつてゐるもので、熟した稻を荒らしに來る鳥・獸などををどかす爲に、音を立てる仕掛をした板を田の上へ懸け、繩を引くと高く鳴るやうにしたもの。

庵のうちに、屋根を漏つてさして來る月光が、分けてもさみしい。あたりの山田には、引板の音ばかりしてゐて。

山裾の、里近いあたりの庵に、修行の爲に籠もつてゐた時の心である。單純にいつてゐるが、人間としての作者と、周圍の自然とが、一色のさみしさに塗りつぶされて現はれてゐる。そのさみしさが、澄んだものである點が注意される。人戀しきの心が動いてゐるが、かすかに見せてゐるだけである。それは「引板の音ばかり」といふ、「ばかり」で現はしてゐるのである。引板は風が鳴らすのではなく、田の番をしてゐる人が鳴らすものと取れる。それは訪つて來る人と對照する意で「ばかり」といつてゐるのだと取れるからである。その點は幽さを持つてゐる。

秋の歌よみける中に

297 (十九) 覺束な秋はいかなる故のあればすずろに物の悲しかるらむ

「覺束な」は、よくは分らないで、こゝで句が切れてゐる。「すゞろに」は、何といふこともなく。

よくは分らない。秋は何ういふ理由があるので、何といふこともなく悲しいのであらうか。

秋の風物に浸つて、一切を物悲しく感じながら、さうしてゐる自身に批評の目を向けて、秋はこのやうに物悲しいといふのは何ういふ理由であらうかと疑ひ、その譯はよくは分らないがと思つた心である。秋は悲しいといふことは古來の常識になつてゐることで、さうしたものときめて問題としないところのものである。それに疑の目を向け、悲しいにはそれに相當する理由がなくてはならないとして、その故を求めようとしてゐるのである。西行には理智的な歌が可なりにあるが、これはそれで、理智的といふよりもむしろ理智そのもので、一つの存在には必ず理由のあるものとして、その理由を探らうとする所は、佛教の物の考へ方といへよう。歌は理智ではないといふやうな常識は超えて、理智も生活内容だとし、生活内容は歌であるとしてゐた態度を、端

的に思はせる歌である。表現が純粋で、その純粋が内容の理智を忘れさせる所のある歌である。

（八〇）　何事をいかに思ふとなけれども袂かわかぬ秋の夕暮

何ういふ事を何う思ふといふ譯ではないけれども、袂の乾かないまでに涙のこぼれる秋の夕暮であるよ。

さみしい秋の中、最もさみしいのは夕暮であるといふのは常識で、四五句はそのさみしさをいつたものである。その常識であるさみしさに、前の歌と同じく理智の目を向けて、さみしさにはそれに相當する原因があるとして、何事をいかに思ふと、原因を探した心である。前の歌のすずろに物の悲しといふのに、内容を盛つた趣のある歌である。前の歌と同じく個性的なものである。

（八一）　何となく物悲しくぞ見え渡る鳥羽田の面の秋の夕暮

「見え渡る」は、見え續く。「鳥羽田」は、京都の近郊の鳥羽の田。

何といふ理由もなく、悲しいものに見え續いてゐる。鳥羽田の面の秋の夕暮の様は。

廣い秋田の面が、夕暮の色に包まれて行くのを見渡して、悲しさに限の吸ひ寄せられる心をいつたものである。廣い天地を、悲しいものと感じた心が漂つてゐる。見え渡るといつて、その限りなさを暗示し、「面の夕暮」といつて、田の面に迫つて來る暮色(ぼしよく)の微妙さを暗示してゐるなど、廣い景と細かい心とを一つに見せたものである。「見え渡る」は、廣さを現はした言葉であるが、一二句からの續きで、廣さだけではなく、深さも暗示してゐるものに感じられる。心の張つた歌である。

（八三）　誰れ住みてあはれ知るらむ山里の雨ふりそゝぐ夕暮の空

何ういふ人がそこに住んで、あはれを感じてゐることであらうか。あの山里の、雨の降りそゝぐ夕暮の空を眺めて。

秋の夕暮のさみしい時の、雨がはげしく降つて一層さみしさの深い時に、山里の方(はう)を望んで、

そこに住んでゐる人で、その深いさみしさを身に沁ませてゐる人を思ひやつて、その人になつかしみの心を寄せてゐる歌である。秋の夕暮のさみしさを悲しみとして涙をこぼしてゐるが、その悲しみはこの歌に見るやうに、「あはれ」と言ひ換へられるべきもので、そのあはれは悲しくはあるが快いものなのである。そして又そのあはれは、天地を貫いてゐるものでもあるのである。時は秋の夕暮の雨のはげしく降る時、所は山里といふと、あはれの極まつたものである。さうしたあはれを身に沁ませてゐる人を思ひやつてなつかしんでゐる西行に取つては、あはれは單に詩情といふだけのものではなく、宗教的なもので、我が身を歸依せしむべきものだつたのである。その意味で山里人をなつかしんでゐるのである。個性のきはやかな歌である。

(全) 雲かかる遠山ばたの秋されば思ひやるだに悲しきものを

「遠山ばた」は、遠山の畑で、そこに住んでゐる人を餘情とした言ひ方と取れる。「秋されば」は、秋來れば。

雲の懸かつてゐる遠山の畑は、秋が來ると、そこの樣を思ひやつたゞけでも悲しいのに、住んでゐる人は何(ど)のやうであらう。

秋、雲の懸かつてゐる山を望み、そこの山畑と、それを作つて暮してゐる人を思ひやつて、そのさみしさを憐んだ心である。こゝでは秋の山里は單に悲しいものとなつて、憐まれるものとなつてゐる。前の歌の心とは明らかに矛盾してゐる。天性敏感な西行は、秋をさみしく感じ、又悲しくも感じるのである。これが平生の心である。そのさみしさ悲しさをあはれとして捉へ直し、そのあはれを宗教的のものとして、これに徹し切らうとする一面がある。徹することは努力によつてなされるものである。前の歌はその緊張した心の現はれ、この歌はその平生の心と解される。遠山ばたといつて、そこに侘びしく暮してゐる人を暗示してゐるところは、心細かいといふべきである。

(合) 松に這ふ正木(まさき)のかづら散りにけり外山(とやま)の秋は風すさぶらむ

「正木のかづら」は、葛の一種で、美しく紅葉する、そして強い葛。「風すさぶ」は、風が強く吹く。

松の木に這ひまつはつてゐる正木のかづらが散つたことである。外山の秋は、風が荒いことであらう。

外山に入つた日に、正木のかづらの紅葉の美しいものゝ散つたのを見て、それを惜しみ、又たやすくは散らないものであることを思つて、そこの風の荒さを思ひやつた心である。紅葉の散つたのを惜しむ心も、正木のかづらのたやすくは散らないものであることなどはすべて餘情とし、又、「外山の秋」といふ新しい言ひ方をしてゐるなど技巧のある歌である。

山里に人々まかりて秋の歌よみけるに

（八五）　山里の外面（そとも）の岡の高き木にそぞろがましき秋の蟬かな

「外面（そとも）」は、後（うしろ）の方（はう）。「そぞろがましき」は、何といふ當（あて）もない様子で、蟬の鳴き聲を形容したもの。

山里の後の方に連つてゐる岡の高い木の上で、何といふ當もない様子で鳴いてゐる秋の蟬ではあるよ。

詞書のやうに、眼前に見たものをそのまゝいつたのである。「そぞろがましき」は、蟬の鳴き聲を感じとして受取つていつたもので、間もなく死ぬべき蟬の、落着いた様もない鳴き聲を、憐みをもつていつてゐるもので、憐みは餘情としてゐる。一方、蟬の鳴いてゐる場所は、精細にいつてゐるので、餘情を主とした言葉が、おのづから限定を持つたものとなつてゐる。手腕を思はせられる歌である。

蟲の歌よみ侍りけるに

(八六)　野べに鳴く蟲もや物は悲しきとこたへましかば問ひて聞かまし

野べに鳴いてゐる蟲もまた、悲しいのであるかと、もし答へるものであるならば、問つて答を聞かう。

蟲の鳴くのを悲しいと聞いての心で、この心は詩的常識となつてゐるもので、いふまでもない

ものである。今はその上に立ちながら、さう思ふだけでは滿足ができず、一方では蟲は物をいへぬものと承知しながら、もし云へるものならば尋ねて聞かうといふのである。西行のひとゝほりでは濟ませない、しつこい心を持つてゐたことが思はれる。

（八七）きりぎりす夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠ざかり行く

「きりぎりす」は、今のこほろぎ。「遠ざかり行く」は、少くなつて行くのを、遠くなると聞えなくなる意で、印象的にいつたもの。

きりぎりすは、夜寒に秋が移つて行くのにつれて、寒さに身が弱るのだらうか、聲が遠ざかつて次第に聞えなくなつて行く。

繁かつたこほろぎの聲が少くなつたのに心を留めて、折柄の夜寒を思ひ、この寒さの爲に身の弱つたのかと、憐んだ心である。憐れみは時間的に見るところから來るものであるが、それを眼前に綜合させ、又理由も求めて、鮮やかにいつたもので、何方(どちら)かといふと技巧の勝つた歌であ

る。上手といふべきである。

（八八）蟲の音にさのみ濡るべき袂かはあやしや心もの思ふらし

「さのみ」は、これ程までに。「かは」は、反語。「もの思ふ」は、嘆き。

蟲の音の爲に、これ程までに涙に濡れる袂であらうか、ない。不思議なことよ、それとは氣附かないが、心は嘆きをしてゐるやうだ。

蟲の音に聞き入つて涙をこぼしてゐたが、ふと心附いて、そんな事をしてゐるべきではないと思ひ、又さうした意味の涙などこぼすべきではないとも思ひ、更に又、そんな涙などこぼしもしなかつたとも思つたが、現に袂は涙で濡れてゐるので、他に原因を求めて、氣附かずにゐるが、心は嘆きをしてゐるやうだと思つたのである。緊張した心を持つて修行をしてゐた際の心持と見える。西行といふ人の面目の見える歌である。敏感な、傷みやすい心と、求道の勇猛心とを同時に持つて、その矛盾に惱まされてゐた心的狀態がまざまざと現はれてゐる。「あやしや」と我を

訝つてゐるところ、その矛盾の程度を、自身では意識してゐなかつたことを示してゐて、そこに眞實が見える。

もの心細う哀れなる折しも、庵の枕近う蟲の音聞えければ

792（八九）　その折の蓬がもとの枕にもかくこそ蟲の音にはむつれめ

「その折」は、下の續きで死んだ折と分る。「蓬がもとの枕」は、野の蓬が下でする枕で、死んで地下に葬られた狀態。「音にはむつれめ」は、蟲の音が入りまじつて、睦れ合つてゐるやうに聞える意。

死んだ折の、野の蓬の下に葬られての枕にも亦、このやうに蟲が、その音をむつれ合はすであらう。

心がひどく衰へてゐる時、死を思つて、死後にも今のやうに、蟲の音が睦れ合つてゐるだらうと思ひやつた心である。さうした際の歌とすると、平坦なものに見える。平生の感傷もなく、又感傷を通しての緊張もなく、たゞ環境に隨順してゐるのみである。表現もまた平生に較べると、

何方かといふと華やかに、圓みを持つてゐる。この柔順に、穩かなのが西行の生來の生地で、今はそれが現はれてゐるのではないかと思はれる。歌としてはさしてすぐれてゐるものではないがこの意味で注意を引くものである。

蛬の聲のわづかにしければよめる

(五〇) 霜うづむ葎が下のきりぎりすあるかなきかの聲聞ゆなり

霜が埋づめてゐる葎の下にゐるこほろぎの、有るか無いかのかすかな聲が聞えることであるよ。

こほろぎは秋深く霜の置く頃まで生き殘つて、かすかに鳴く蟲で、此の歌は實際をいつたものであらう。しかし心を寄せてゐるのは、霜の置いてゐる草むらから、極めてかすかに起るこほろぎの聲のあはれさで、景と心と融け合つたものである。靜かではあるが緊張を持つた歌である。

朝聞初雁

(五一) 横雲の風に別るるしののめに山飛び越ゆる初雁の聲

「横雲の風に別るる」は、下の「山」に續いてゐて、夜下つて來て山に懸かつて横雲の狀態に

なつてゐる雲が、朝吹き立つ風の爲に、山から別れる意。「初雁」は、春、寒地へ去つた渡鳥の、秋、寒さを慕つて歸つて來る、その最初の雁。

横雲が風の爲に山から別れる東明に、その山を飛び越えて來る初雁の聲よ。

山に近い所にゐての印象としていつたものである。靜寂な夜の山が東明と共に働きを現はして來て、さわやかな光景を呈する時に、遠く去つてゐた雁が立ち歸つて來て、そのはげしく哀れな聲を立てつゝ、峰を飛び越えて、初めて姿を見せるといふ、動的な光景である。此の光景が、強い調べによつて貫かれて、一面沈靜な趣を持つてゐるところ、まさに手腕を示し得てゐる歌である。

雁聲遠近

431（九二）　白雲を翅にかけて行く雁の門田の面の友慕ふなり

「白雲を翅にかけて」は、雲に近く、高い所を飛んでゐることを、雲を翅に懸けてと感覺的にいつたもの。「白雲」は、秋の雲の特色としていつたもの。「門田の面の友」は、人の家の門にある田に下りてゐる仲間で、「友」といふのは雁は群をなして渡る所から、異つた群の雁も、その

友と見ていつたもの。「慕ふ」は、慕つて空から下りて來る意を餘情としていつたもの。

空の白雲をその翅に懸けて飛んで行く雁の、人の門田の面に下りてゐる友を慕つて、下りて來ることであるよ。

田の中の家の、その門田に、來る雁が下りて憩つてゐる折柄、高く空を飛んで來る雁が、同じやうにその門田に下りて來たのを見ての感で、その下りて來たのを、友を慕ふと見たのである。雁は群をなして遠い旅をするものであるから、雁の類を友と見、慕ふと見るのも妥當なところがあつて、さうした狀態に、あはれの寄せられる所がある。場所としては白雲の空と門田とで廣く、ある物としては空の雁と田の雁とだけで、そしてあはれな樣を見せてゐるので、味ひの深い歌である。修行者西行から見たら、その雁は自身の聯想されるものでもあつたらうと思はれる。

秋、ものへ罷りける道にて

(四三) 心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮

「心なき身」は、物に執着なく、從つて感傷はしなくなつた身の意で、佛道修行者としての白

身を言ひかへたもの。「あはれ」は、さみしさを通してのあはれ。「鴫立つ澤」は、鴫の飛び立つ澤で、「鴫」は小さな田鳥、「澤」は淺く水の湛へてゐる所で、鳥からいへば、飮み水や餌などを得やすい場所。「秋の夕暮」は、さみしい時。

世の常の感傷はしない身も、さすがにあはれを感じさせられたことであるよ。鴫の飛び立つ澤の、この秋の夕暮には。

修行者の西行が、ものへ罷りける道といつてゐるので、多分、寺へでもまゐる途中であつたらう。所は田や澤の續いた所で、時は最もさみしい秋の夕暮である。折柄、近い澤から小さな鴫が飛び立つて、微光の中にその姿を漂はすのを見ると、西行はしみじみとあはれを感じさせられたのであるが、ものへ罷るといふ場合柄とて、我に復つて、我はかうしたあはれなどを感じるべき身ではないと思つたが、やはりそのあはれを感じずにはゐられなかつたといふのである。なぜ西行はそのやうにあはれに感じたのか。あはれを感じさせた中心は、結句の秋の夕暮で、これは詩的常識となつてゐるもので、今もそれに過ぎないのである。しかしその秋の夕暮は、今は特殊な

もので、澤から飛び立つた鴫を含んだものである。さうした時刻に、塒もなくてさまよふやうに見える小さな鳥は、西行には人の身を聯想させられる、いぢらしくあはれな物に感じられて、秋の夕暮のあはれを甚しく深めるものとなつたのであらう。一方西行自身は、「心なき身」と、いつてゐるが、場合柄緊張した心持からさう思つてゐるので、實際はさうした境涯を慕つてゐるに止どまつて、緊張した心持は無意識の中に感傷的氣分をも刺戟してゐたのではなかつたか。さうした自身と、特別な鴫とが、秋の夕暮に綜合されて、しみ〴〵とした哀感に引入れられたものと思はれる。

田庵鹿

（四四九）　小山田の庵近く鳴く鹿の音におどろかされておどろかすかな

「小山田の庵」は、題の田庵で、秋、鳥や山の獸などの田を荒らしに來るのを見張る爲の番小屋。「おどろかされて」は、目を覺まされて。「おどろかす」は、鳴く音を立てて來た鹿をおどろかす意。

山田の番小屋に、近く鳴く鹿の聲で目を覺まさせられて、その鹿をおどろかして追つたことであるよ。

題詠で、秋田の番小屋に夜をゐる番人の心となつて詠んだものと取れる。四五句は同音の繰返しであるが、意味はちがつてゐて、事と言葉の双方から來る可笑しみがある。强ひたものではなく、筋の立つたものなので、その可笑しみに品の惡くないものがある。

小倉の麓に住み侍りけるに、鹿の鳴きけるを聞きて

(六五)　雄鹿鳴く小倉の山の裾近みただひとり住むわが心かな

「雄鹿鳴く」は、雄鹿の鳴くのは、妻戀ひをしてのものとなつてゐる。「小倉の山」は、京都嵯峨。

雄鹿の妻戀ひをして鳴く小倉の山のその裾の近さに、たゞ一人で住んでゐるといふことを思ふわが心であるよ。

妻戀ひをして鳴く雄鹿の聲は、あはれなものとされてゐる。今はそのあはれを捉へてゐる。小

倉の山は低い山で、そこに鳴く聲を山裾にゐて聞くのであるから、かすかなものと分る。それだと一層あはれである。四五句は、その聲のあはれさを耳にすると、それに刺戟されて、たゞ一人で住んでゐる身だといふことを、今更に意識させられるといふので、意識すればさみしい、そのさみしさを餘情とした歌である。しみ〴〵した、味ひのある歌である。

鹿

(六六) 何となく住ままほしくぞ思ほゆる鹿あはれなる秋の山里

何といふわけもなく、こゝに住みたいものだと思はれる。鹿の鳴く聲のあはれな、秋のこの山里に。

秋は鹿の妻戀ひをする時で、鳴くのは雄鹿である。「あはれ」といふのはその聲である。鹿の聲のあはれな秋の山里へ來て、そのあはれをなつかしみ、なほ樣々のあはれもあるやうに思はれて、かうした所に住みたいと思つた心である。「何となく」といふのは、豫想されるあはれを指示したものである。此の歌はあはれに對して憧れてゐる心をいつたもので、鳴立つ澤の歌とは正

反對な、前の歌とも距離を持つたものである。

松の絶間よりわづかに月のかげろひて見えけるを見て

（九七）　影薄み松の絶間をもり來つつ心ぼそしや三日月の空

「影薄み」は、光が少なさに。

光が少なさに、松の群立ちの絶間を洩つてさして來つてゐるが、心細いことであるよ、三日月の空は。

類想の少くない歌であるが、しみ〴〵した味ひを持つてゐる點で特色のあるものである。心細しやといつてゐるが、その心細いのがあはれで、やがて快さなのである。「三日月の空」といつてゐるが、三日月が主で、空はそれと一つにしたものと取れる。

八月十五日夜

（九八）　うちつけに又來む秋の今宵まで月ゆゑ惜しくなる命かな

「うちつけに」は、出しぬけに。「又來む秋の今宵」は、題で、來年の秋の今夜で、來年の名

月の夜。

出しぬけに、來年の秋の今夜まで生きてゐたいと、月の故に惜しいものに思はれて來たわが命であるよ。

佛者として生死を超えて、いつ死が到來してもいゝと思つてゐた西行が、名月を眺めた快さから生命に執着を持ち、來年の今夜までは生きてゐたいと思つたのである。さうした執着が、彼自身としては唐突な、又思ひ懸けないものに感じられたので、それを中心として詠んだものである。躍つた、強い心の現はれた歌である。

名所月

332 (九九) 清見潟おきの岩越す白波に光をかはす秋の夜の月

「清見潟」は、駿河の名所。「光をかはす」は、光を取り交すで、それとこれとたがひに照らし合ふ。

清見潟の、沖の岩を越して寄せる白波に、光を取り交して相照らし合ふ秋の夜の月よ。

「光をかはす」といふ言葉が一首の眼目である。岩を越して白く砕ける波を、月は照らして光としその光る波がまた月を照らして、月に一段の清輝をあらしめるといふのである。白波を沖の物とし、距離を置いて見ることにしてゐるので、この誇張が妥當性を持つたものとなつてゐる。

題しらず

(一〇〇) わづらはで月には夜も通ひけり隣へつたふ畦の細道

面倒もなく、月のある頃には夜も通へた。隣の家へ傳つて行く畦の細道を。

修行の爲に邊鄙な地に住んでゐた時の實際と取れる。出家として下層民と同じ生活をした關係から、下層民の歌となつてゐる。當時としては珍らしいものである。小味な、しみ〴〵とした歌で、愛すべきものである。

旅宿月

(一〇一) 都にて月をあはれと思ひしは數にもあらぬすさびなりけり

「あはれ」は、さみしさを通してのそれで、身に沁むものといふ程の意。「數にもあらぬ」は、

物の數に入(はひ)らないで、いふにも足らぬの意。「すさび」は、慰み。

都にゐて月をあはれだと思つたのは、今旅にあつて見る月に較べると、いふにも足りない慰みに過ぎなかつたことだ。

旅の月のあはれ深さを發見して、顧みて都で見た月を比較し、都の月をあはれだと思つたなどは、單なる慰みに過ぎなかつたといふので、修行の爲に旅へ出た當座に見た月かと思はれる。說明的のものではあるが、云はんとするところはあはれの比較で、さうするより外には法のないもので、又それとしては心を籠めていつてゐるものである。

菩提院の前の齋院にて月の歌よみ侍りしに

(一〇三) 隈もなき月の光に誘はれて幾雲ゐまで行く心ぞも

「幾雲ゐ」は、「雲ゐ」は空で、それに「幾」が添つて、空の何のやうな涯までもと疑を含んだ意となつたもの。

隈もなく澄んでゐる月の光に誘はれて、空の何(ど)のやうな涯(はて)までも行く我が心であらうぞ。月に

對つてゐると、心が澄んで遠くが思はれ、いよ〳〵澄むといよ〳〵遠くなつて、一種の恍惚境に入らうとするその一歩前の心である。この心的狀態を、「光に誘はれて」と具象化したものである。月に對しての此の心的狀態は共通の人情であるが、西行は殊に強く、そして甚だ愛してゐたものである。あはれを愛す本來の傾向にも依らうが、佛者としての修行も手傳つてゐたものかと思はれる。

月前に友に逢ふといふことを

（一〇三）　嬉しきは君に逢ふべき契ありて月に心の誘はれにけり

「君に逢ふべき契」は、「君に逢ふ」は題の友に逢ふで、「契」は佛教でいふ因緣、約束ごとの意。友に行き逢ふといふ程のことも、自分には分らないが、さうなるべき筋道があつてのことで偶然ではないといふのである。「月に心の誘はれ」は、月を見ようとする心を起させられたで、題の月前のことをいつてゐるのであるが、これも、上にいふ因緣を果す爲に、さうした心となつたとするので、一切を宿命と見る佛者の心からのもの。

嬉しいことは、君に行き逢ふべき因緣があつて、それを果す爲に、月に心が誘はれてこゝまで來たのであつた。

佛教の盛行してゐた當時には、かうした事が常識となつて、一般に認められてゐたと見える。釋敎の歌は多いが、殆ど經文に依つた改まつたものであるのに、この歌は同じ心が日常の些末事にしみとほつてゐるものなので、珍らしく、又心を引かれるものとなつてゐる。

遙かなる所に籠もりて、都なりける人の許へ月の頃つかはしける

(一〇四) 月のみやうはの空なる形見にて思ひも出でば心通はむ

「うはの空」は、今は空しいの意のもの。形見は、その人を思ひ出させる品物で、今は月を見ると昔關係のあつた人を思ひ出す意で、形見といつたもの。「思ひも出でば」は、人が若し、昔關係のあつた意味で、我を思ひ出したならば。「心通はむ」は、我もまた月を見て昔の關係を思ひ出してゐるので、同じことを思ひ合ふ双方の心は、相通ふであらうの意。

月だけが、今は空しい形見となつてゐるので、この月に對して、人が我との昔の關係を思ひ出

すならば、我も昔を思ひ出してゐるので、その相思ふ心は通ひ合ふであらうか。

詞書にあるやうに、遠い境に修行の爲に行つてゐて、秋の月を見て、昔關係のあつた人を思ひ出して、なつかしく思ふところから、都にゐるその人の許へ寄せたものである。昔關係のあつた人といふだけで、今は思ひ出のうちの人となつてゐることは、月のみやうはの空なる形見といふ言葉で、幽かながらはつきりと現はしてゐる。うはの空は、空にあるといふ意も絡ませてあるが、空しいといふ意が主で、その空しいのは、今は實際のかゝはりのない、卽ち過去のといふ意でいつてゐるものである。我も昔なつかしく思ひ出してゐるといふのは、「思ひも出でば心通はむ」で暗示してゐる。これはなつかしく思つてゐることを、極めて幽かに、しかし十分に現はしてゐるものである。歌としては戀の範圍のものであるが、心としては戀ではなく、單に昔なつかしく思ふといふ、普通の人情となつてゐるので、昔の知合ひといふだけのものとなつてゐる。遠い境に修行をしてゐて、都戀しさを覺えたといふ、西行にはよくある心持のものであるが、心はしみじみとさみしく、詠み方は極めて幽かであつて、當時唱へられはじめてゐた幽玄の趣を持つたも

のである。

(一〇五)　厭ふ世も月澄む秋になりぬれば長らへずばと思ふなるかな

厭つて捨てゝ、今は死生も問題としてゐないこの世であるが、月の澄む秋と移つて來ると、その愛でたさに執着が持たされて、生きながらへてゐなければ、かうしたものも見られないと思ふことであるよ。

かうした耽美氣分は西行には本能となつてしまつてゐて、最後まで捨てられなかつたものである。結局西行は、美しいあはれ、さみしいあはれを通じて、大悟の境に入らうとし、又それを成し得たものと思はれる。西行の歌としては捨てられないものである。

(一〇六)　捨てて出でし憂き世に月の澄までであれなさらば心のとまらざらまし

我が捨てゝ出て來た憂き世に、月がこのやうに澄まずにあれよ、それだつたならば、心が月に

留まるまい。

前の歌と恰も連作の形になつてゐる。淸く澄んだ月を見ると、心がそれに溺れてしまひ、長生きをしたことの仕合せを思ふが、それと殆ど同時に、出家の身として世の中の物に執着する心を憎み、そしてそれを月の罪に歸して、月よ澄むな、それだつたら心が留まるまいといふので、我儘至極な心である。一見いはゆる詩的誇張に似てゐるが、さうした手加減の加はつたものではなく、本心からいつてゐるものと取れる。月に溺れる心の方には自然があるが、この反省の方には無理がある。そして無理でも遂げなくてはならないとして、本氣になつて無理をいひ通してゐるのである。子供のだゞを捏ねるのと同じ心理である。連作として見ると、西行の人となりと、心の境涯と、その性分とを語つてゐるものと見られる。

月

(一〇七)　なかなかに心盡すも苦しきに曇らば入りね秋の夜の月

「なかなかに」は、却つて。「心盡す」は、氣を揉むで、曇つた月の晴れるのを待つ意。

却つて、氣を揉むのも苦しいので、曇るならば、山に入つてしまへよ、秋の夜の月よ。月を愛づる心である。秋の夜の澄んだ月が、愛で惜しんでゐる中に雲に入つたので、その雲を出るのを待つてゐるが、なかなか出ないので焦れてしまつて、これくらゐならば一そ山に入つてしまへ、それなら諦めて待ちもしまいといふのである。月を愛ではゐるもの丶、中心になつてゐる物は月ではなく我である。思ふやうにならないくらゐならば無い方がましだといつてゐるので、それが他の物ではなくて、天上の月なのである。溺愛の心からのものには相違ないが、これを詩的誇張といふのは迎へての解で、西行の我儘な心の現はれといふ方が當つてゐよう。言葉が靜かで、むしろしめやかでさへあるので、あはれのある歌となつてゐるが、この言葉は心にしつくりしないものである。西行のしめやかな心と、我儘な心とが、同時に働いてゐるものといふべきであらう。

〔一〇八〕　慕はるる心や行くと山の端にしばしな入りそ秋の夜の月

「慕はるる」は、山に隱れる月が殘り惜しくて慕はれる意。「心や行くと」は、我が心が月に附いて行くかと思はれるので。

落ちゆく月を慕はれる我が心が、その月に附いて行くかと思はれるので、山の端に、暫くの間落ち入らずにゐるよ、秋の夜の月よ。

落ち入らんとする月を見送つてゐると、心がやゝ恍惚とするのを覺えた、その瞬間の心を捉へていつたものである。「心や行くと」はその恍惚の心境を、月を慕つて追ひ行くといふ、月を擬人するに近い心に言ひかへたものである。しかし此の歌はそれだけではない、續けて「しばしな入りそ」といひ、その方を重くしてゐる。これは「心や行くと」と疑をもつて云つてゐるのを承けて、果してさうなるか何うかを試みようとする心から云つてゐるものである。卽ち心がやゝ恍惚としてはゐるが、恍惚とし切つてゐるのではない、それを試さうといふので、心の程度を捉へてのものである。言ひかへれば一方では恍惚に近い感を持ち、同時に一方では、さうした心とは全く別な、銳く强い自意識を持つた心なのである。月を愛でてはゐるが、そのあはれに浸るといふ單純

な心ではなく、飽くまでも自身に執しつゝ、そのあはれに對してゐる心である。あはれは王朝のものであるが、態度は近代的のものである。表現はしめやかで、單なるあはれを思はせようとしてゐるものである。

（一〇九）　いづくとてあはれならずはなけれども荒れたる宿ぞ月は寂しき

何處（どこ）といつて月があはれでもない所とてはないけれども、荒れた家で見ると格別に寂しいことであるよ。

天地をたゞ、月によつて釀し出される寂しくあはれなものと見、その最も寂しくあはれな月を今荒れた家において發見して、快さを感じてゐる心である。月を自然の中の最もあはれなものと見、人の住み棄てゝ荒れた家を、人間の最もさみしい樣と見、それとこれと一つになつた境を、さみしくあはれな極まりと見て、それを身に沁めることを無上の快さとした心である。これは天地一切の相（すがた）を寂しいものと見て、それに沒入する所から來る快さで、佛教の旨にも通るものであら

うが、それを身に沁めるに、歌の上のあはれを通してゐる所に、西行がゐるといへる。歌の上のあはれの方が主になつてゐるものである。表現の極めて單純で、一切をいさぎよく餘情に讓つてゐる所、まさに實感であると思はせる。

（二〇）蓬分けて荒れたる宿の月見ればむかし住みけむ人ぞ戀しき

「蓬」は、荒れた家の庭に生えるものとされてゐる。

蓬を踏み分けて荒れた宿に入つて月を見ると、昔この宿に住んでゐたであらう人が、格別に戀しいことだ。

前の歌と連作になつてゐるもので、前の歌は月の方を主としてゐるのに、これは荒れたる宿の方を主としてゐるのである。「むかし住みけむ人」は、昔知つてゐた人であつても通る言葉であるが、今は知らない人としていつてゐるものと取れる。即ち單に人といふほどの意である。それに「ぞ」を添へて「戀しき」といつてゐる。即ち某といふ人と思はれるだけで、全く取りとめのな

い人で、それである故に、格別に戀しく思はれるといふのである。これはその方が、人間のあはれさといふものが深いからである。一切をさみしくあはれに感じるとはいふものゝ、枯淡そのものではなく、潤ひを持つた、一脈の色氣のあるものといふことを示してゐるものである。

352（二）人も見ぬよしなき山の末までも澄むらむ月の影をこそ思へ

「人も見ぬ」は、「も」は感歎で、誰も見ないといふ程の意。「よしなき山」は由緒のない山でありふれた山。「影をこそ思へ」は、光の樣が取り分け思はれる意。

誰も見る人のない、つまらない山の涯までも、澄んで照らしてゐるだらうところの月の光が、取り分け思はれる。

よしなき山の末は、荒れ果てた所の意であるが、荒れたといふのは、人から見ての心である。人も見ぬはその意のものである。上三句は、人を土臺としての荒れ果てた所で、前の歌の「荒れたる宿」といふと同じ心のものである。下の句は、澄んだ月の光のさみしさのなつかしさである

が、さうした感は、人と對照することによつて一層さみしい感のする、全く人げ離れた境において、殊に際やかに感じられるといふのである。一首、圓味を持ちながらもすつきりとしてゐて、それが魅力となつてゐる歌である。

（二三）　いかにせむ影をば袖に宿せども心の澄めば月の曇るを

「影をば袖に宿せ」は、「袖」は涙のかかる所として、月の光を、袖の上の涙に宿させる意。「涙」は、月のあはれさからこぼれるもの。「心の澄めば」は、心がさみしい月の爲に純粋にされ、統一を附けられた意で、涙はさうした境でこぼれるもの。「月の曇る」は、涙の目に映る月が曇つて見える意。

何うしよう、月の光をば我が袖の上の涙に宿したけれども、心が澄んで來ると、涙の目にその月が曇つて見えなくなるのを。

月に對つてゐると、その月のあはれさの爲に心が澄んで來て、月を見る甲斐を感じ、その狀態

を持續させたいと思ふが、同時に涙が出て來て、月が曇つて見えなくなるのに當惑を感じた心である。「いかにせむ」は、その當惑をいつたものである。月に對つてゐて、心の高潮して來た瞬間だけを捉へていつたもので、實情と思はせられるものである。言葉づかひの細か過ぎる感があるが、限られた瞬間の心をいはうとする所から、自然さうなつたものと取れる。「影をば袖に宿せども」は、「涙」を暗示させる爲のもので、成句になつてゐるものである。此の成句を取つた爲に、それに引かれて、他も暗示的なものとなり、結果から見て細か過ぎるものとなつたのだらうと思はれる。しかしその爲に厭味に感じさせるまでにはなつてゐない。

（二三）　月を見て心うかれし古への秋にも更にめぐり逢ひぬる

「心うかれし」は、心がうかれたで、うかれるは現在も口語に用ゐてゐるが、當時のものは現在よりも意味が重く、餘りにも物に憧れると、魂が身を離れてさまよふ意のもので、當時は身に取つて忌むべきこととしてゐた。「いにしへの秋」は、「秋」を月を見る時として、月を言ひかへ

たもの。「いにしへ」は昔であるが、月によつて今のやうに心のうかれたその昔の意のもの。「めぐり逢ひ」は、別れた者の、めぐりめぐつて再び逢ふ意。

月を見て、心が身を離れるまでに憧れた、昔のとほりの秋に、新たに再びめぐり逢つたことであるよ。

秋の月に對つて、心がうかれるまでの歡びを感じた時、過去の永い間を顧みて、初めは今のやうであつたが、その後、佛道に志してからは、久しくかうした歡びは味はなかつたのに、今又、昔のやうな心に立ちかへつたことであると、今の心に喜びを感じていつてゐるものである。歌は昂奮をもつて詠んでゐるものであることが、一首の調べで感じられる。これを月の歌として見ると、格別のものではないが、西行といふ人の上から見れば、注意に値するものである。それは西行の出家したのは、もとより佛道修行の爲で、又その所志に精進した爲に、秋の月の愛でたさも感じずに、永い間を過したことが、この歌によつてわかる。さうした西行が、今また新たに、昔の通りの歡びを月に感じるといつて、喜びをもつていつてゐるのである。これは謂はゆる大悟徹

底したが爲に、昔とは全然異つた心境に住しつつ、同じ愛でたさを感じるとも取れ、或は又、佛道修行に年は費したが、花月など自然に對しての心は、昔と少しも異らずにゐたので、月を感じなかつたのは、單に佛道に心が奪はれてゐたが爲とも取れるからである。穿鑿に過ぎるやうであるが、西行といふ人は、この點がはつきりしてゐなかつた人のやうに思はれるのである。結局は西行は、佛心と風雅と渾融して一つにした人と思はれるが、今の歌はその道程の中の何の邊のものであるか、わかりかねる感がするのである。

(二四) 何事も變りのみゆく世の中に同じかげにて澄める月かな

「何事も變りのみゆく世の中」は、一切は流轉を相としてゐるといふ佛教の觀方のものではなく、普通の人情として、永久を慕ふにも拘らず、世間の移りかはつて行くのを怨しく感じる心のものと取れる。「同じかげにて」は、同じ光をしての意。

何事も皆、變つてばかりゆく此の世の中に、同じ光をして澄んでゐる月ではあるよ。

自然の變らないのと、人事の變りやすいのとを對照して、人事を嘆くのは、歌の上では常識の常識ともなつてゐるもので、これもそれである。しかし變らない自然といつても、月は花などとは違つて、さみしく瞑想を誘ふところがある。月に對してゐると、我が見て來た世を大觀させられるといふのも自然で、又世を大觀すると必ず哀愁が湧くのであるが、哀愁と月とは調和するところがあるので、これ亦自然である。西行の痛感してゐる世は、保元・平治の亂を經て沒落して來た宮廷を繞つての世である。彼の思つたのはそれであらう。さう思はれるのは、一首の心の餘りに常套的であるのに滿足してゐる點と、その常套をいふに、しみ〲と思ひ入つた調べをもつてしてゐる點からである。そして又、これは實感の伴ふものがなくては出來ないことだと思はれるからである。これを秀歌といふのは無理であらうが、西行の歌として見ると、調べに魅力があつて、平凡に似てはゐるが捨て難いものと思はせられる。

（一五）　行方（ゆくへ）なく月に心の澄み澄みて果はいかにかならむとすらむ

「行方なく」は、行方知らずで、下の「月に心の澄み」の狀態をいつたもの。我を忘れて、恍惚とすることを、心が身を離れて遠く行くと感じていつたもの。「澄み澄みて」は、澄みを力強くいふ爲の繰返しで、澄むは、月の淸らかな爲に雜念が消されて、純粹なものとなるのを、濁つた水の澄むのに譬へていつたもの。「澄む」は、月にも緣のある詞である。「いかにかならむ」は、心は何のやうになるだらうかで、恍惚の狀態に不安を感じての詞。これは心が身を離れることを不吉なこととする意に關係を持つたものと取れる。

行方も知られぬまでに、月によつて心が澄みに澄んで身を離れて、最後には心が何うなつてしまふのであらうか。

月に對してゐると、心が恍惚として來る、その恍惚の狀態を、さながらに言ひ現はしたものである。謂はゆる氣分の表現である。大體、恍惚そのものには思念は伴はないもので、此の歌もそれであるが、しかし表現は思念がなくては出來ないものである。此の歌も思念によつて出來たものであるが、それを最少限度に食ひとめてゐるものである。此の歌の魅力はそこにあり、又その

事が西行の詩才を示してもゐるのである。

✓

313 (二一六) 眺むるもまことしからぬ心地して世に餘りたる月の影かな

「眺むる」は、見る意のもの。「まことしからぬ心地」は、眞の物ではない氣持で、平たくいへば、嘘のやうな氣である。月の光が餘りにも淸らかなので、實在の物ではないやうな氣がする意。「世に餘りたる」は、世に過ぎた意。「影」は、光。

眺めてゐると、眞の物ではないやうな氣持がして、世に過ぎたものである月の光ではあるよ。

月に對してゐての或る時の心で、前の歌の一歩手前の心とも取れる。自然は、平生はそれ程でもないものが、或る時には言ひ難く美しいものにも、又は神祕なものにも見えるものであるが、これは一に此方の心持によつてのことである。此の歌の「まことしからぬ心地」も、それだけでは足らずとして、「世に餘りたる」と言ひ足してゐるのも、西行の或る時の心で、それは又、他にも領き得られる心持なのである。月を說明してゐるものではあるが、根本は感激で、その感激が

調べとなつてもゐるので、一讀、說明といふことを思はせられず、感激そのものの端的のやうに感じられる歌である。

369 (二七) なかなかに時々雲のかかるこそ月をもてなす限なりけれ

「なかなかに」は、却つてで、下の「もてなす」に續く意のもの。「月をもてなす」は、今も口語で、客をもてなすなどいふそれで、雲が月に趣あらすする仕ぐさとしてする意である。雲も月も擬人するに近い心を持つところから出てゐる詞である。

却つて、時々に雲の懸かるといふそのことは、月を惱ますのではなく、反對に月をもてなす頂上のことである。

落着いた心で、謂はゆる翫ぶ心で月に對つてゐての心である。秋の月の面に、折々雲の懸かるのを見て、それを風情と感じての心であるが、背後には、月の爲には雲を厭ふといふ平生の心があつて、それと對照させてゐるところのあるものである。趣味が廣く、心が細かで、それに詠み

方も餘情を持つた、靜かなものである。味のある歌である。

（一一八）　雲晴るる嵐の音は松にあれや月も綠の色に映えつつ

「嵐の音は松にあれや」は、嵐の音の方(はう)は、月には關係のない松の木にある意で、「や」は感歎。「月も綠の色に映え」は、松の木には關係のない月もまた、松の色の綠に映えて、綠の光を含んでゐるで、雲の晴れた瞬間の秋の月が、空の綠の鮮やかな爲に、その關係で綠に感じられるのを、松の木の方に絡(から)ませていつたもの。

雲の晴れる嵐の音は、松の木にある。だが月もまた松の綠に映え〲して、靑くも見える。

松の木の多く、空の廣く見渡されるところで、多分は村雨(むらさめ)の後(あと)、嵐が立つて、雲は吹き拂はれ空が隈なく晴れた時の月の感じをいつたものである。題詠の趣を帶びた歌であるが、景その物をいはず、それは餘情として、景から起る氣分の方を主としていつてゐるところは、當時の風なのである。所は山居としてゐるらしいが、それはいはず、又、空の綠に濡れて月の靑んで見えるの

を、聞えてゐる松風の關係から、松の緑の映じてゐる爲として、そこに氣分の統一を附け、同時に松の如何に多いかを暗示してゐるなど、技巧の多い作である。新古今集の準備時代には、既に出家して都にはゐず、又撰集時代には故人となつてゐた西行であるが、その歌は新古今風をも持つてゐて、集中に第一の歌數を持つてゐるのは、一面かうした技巧も持つてゐたからである。秀歌とはいへない迄も、餘情が多く、美しさを含んだ寂びを持つてゐる所、まさに新古今時代のものである。

（一二九）　影冴えてまことに月の明き(あか)には心も空にうかれてぞすむ

「うかれてぞすむ」は、心が身を離れて空に行き、そこで澄んでゐる意で、「澄む」は、月と共に澄んでゐる意のもの。

光が冴えて、まことに月の明らかなのに對つてゐれば、我が心もまた、空にうかれ出て、月と共に澄んでゐる。

一一五の、「果はいかにか」と昂奮した心に續く心ともいふべきもので、同じく昂奮した心なが

らに、自身を意識して落着いた心をも持つてゐるものである。西行の歌の中には、
風の沒我の昂奮と、この歌のやうな、それに續く自意識の歌とが並び存してゐて、そしてその移り變りは、可なり速かなものではなかつたかと思はせられる所がある。秀歌ではないが、連作的の意味で、その人を計算に入れると捨て難い味ひのあるものである。

（三〇）　眺むれば否や心の苦しきにいたくな澄みそ秋の夜の月

「否や」は、今も文語として用ゐるもので、直ちにの意。「心の苦しき」は、月によつて催される苦しさで、古へを思ひ出させられる爲のものといふことが常識となつてゐた。今もそれで、說明がなくても通つたからである。

眺めると、直ちに心が苦しくなるのに、そのやうに甚しくは澄んでくれるな、秋の夜の月よ。

月に對つてゐると、或る時は沒我の境に入り得る西行であつたが、或る時には反對に、「眺むれば否や心の苦しき」と云ふ、間髮（かんはつ）も入れずに世間の事が思ひ出されて、思ひ出がすべて苦しさに

もなる西行だつたことが、此の歌でも知られる。本來此の心から脫れようとしての出家であつたところが、出家の後も中々離れることが出來ず、その爲に苦しめられてゐたと見える。佛者の西行であるにも拘らず、感激に驅られて赤裸々の心情を一氣にいひ、しかも月に哀訴する調べをもつていつてゐる。いかに純粹で、嘘のいへなかつた人であるかがわかる。此の純粹さが歌人たらしめたのである。

（三）　諸共に影を並ぶる人もあれや月の漏り來る笹の庵に

「人もあれや」は、「も」も「や」も感嘆で、人即ち仲間がほしいの意。「笹の庵」は、笹をもつて作つた庵で、邊鄙な、人里離れたやうな所に修行の爲に、かりそめに營んだ庵。

一しよに居て、影を並べる仲間のほしいことよ。月の光の漏れてさし込むこの笹の庵の中に。

世を避けて靜かに修行をしてゐる時、をり／＼起つた心持と見えて、他にも類似の歌のあるものである。心が澄んで、澄み極まつて行くまでの途中に、一方には澄んだ心の快さがあり、同時

に一方には、寂しさに似た人なつかしい心が起るものと見える。快い悲しさともいふべきものである。これもそれである。抒情的に、極めて單純に詠んでゐるのであるが、その感を發した境がはつきりと、しかし捉へ切れない奥行をもつて聯想されて來て、心と境と一つになつて味ひを醸し出してゐる。庵の篠の上に映る我が影をかへり見、漏り來る月の光を見て、それによつて起る感を靜かに詠んで心をやつた西行の姿の思ひやられる歌である。

月の歌の中に

（一三）山里の月待つ秋の夕暮は門田の風の音のみぞする

「月待つ」は、月を鑑賞する心があると共に、一方では、月光を燈火の代用としようとする意のあつたものと思はれる。燈火の貴いものであつた時代であり、所は「山里」であるから、今はむしろ燈火の代用の意と解すべきであらう。

山里の、月の出を待つ秋の夕暮は、門田の稻葉を渡る風の音ばかりしてゐることである。
秋の夕暮は、一年中の最もあはれの深い時とされてゐ、又その時刻は、風の吹き立つ時ともさ

れてゐた。右は、さみしい山里で、その二つのあはれに包まれてゐる心持をいつてゐるのである。題材は極めて平凡なもので、又抒情の詞も入つてゐないものである。しかし一首の調べが眞率で、しみじみとしたものがあつて、捨て難いものとなつてゐる。これは、調べが抒情の役を十分に果してゐる爲である。「秋の夕暮」、「門田の風の音」は、その物が既に抒情味を持つてゐるもので、それだけで十分だとして、抒情味の方は調べによつて現はさうとしたが爲と取れる。「月」を燈火の代用のものと見るのも、眞率にいつてゐる侘びしさを中心としてゐる歌といふ意味においてゞある。實感をいつたものと取れる。

月

1640

(一三)　月見ばと契りておきしふる里の人もや今宵袖ぬらすらむ

「契りておきし」は、約束をしておいたで、約束は、思ひ出さうといふこと。「ふる里の人もや」は、ふる里の人も亦わが如くに、「や」の疑の添つたもの。「ふる里の人」は、旅にあつていつてゐるのであるが、都といふやうな廣い意味のものではなく、以前住んでゐた狹い里の、親し

んで暮して來た人で、妻といふことを心に置いての詞と思はれる。極めて親しい人の意でも通るが、「契りておきし」、「袖ぬらす」などいふのは、普通の關係の中のものではない。

月を見たならば思ひ出さうと約束をしておいたふる里の人も亦、今宵の月を見て我を思ひ出して、我が如く袖を涙に濡らしてゐるであらうか。

月を見ると心が澄んで來て、おのづから遠くが思はれ、昔が思はれるといふことは常識となつてゐた。月を見たらば思ひ出さうといふのはそれである。それに又、月は月々に間違なく出るので、必ず思ひ出すといふことが伴つて來て、忘れぬ約束の上には適當なものである。これも常識となつてゐた。この歌はそれらの上に立つてゐるものであるが、「袖ぬらす」で生かしてゐる。「人」を妻とすれば、袖ぬらす涙は戀の上のものとも取れるが、しかし此の涙は、月のあはれさに催されて、その月によつて約束した人を思ひ出しての涙で、月のあはれさの延長としてのあはれみの涙である。更にいへばその人を過去の人として思ひ出して、大觀する所から來るあはれさの涙で人生に對しての涙と異らないものである。此の事は自然に感じられることで、そして餘情となつ

てゐるものである。幽かなる味ひの、新しいものがある歌である。

（二四）世の憂さに一方ならずうかれゆく心さだめよ秋の夜の月

「一方ならず」は、今も文語に、口語に使つてゐる詞で、甚しくの意。「心さだめよ」は、上の「うかれゆく」心を「さだめよ」と命じるので、「うかれ」の反對である。甚しい憧れをし、又は嘆きをすると、その爲に心が身から離れてさまよふを「うかれ」といひ、これを甚だ不吉のこととし、さうした心を再び身に歸らせるのを、古くから鎭魂即魂鎭めといつてゐる。「さだめ」は、その鎭めと同じ意でいつてゐると取れる。月に對してゐると、或る時には心がうかれもするが、多くの場合、心が落着いて、統一を持つた狀態となる。それを「さだまる」といつたのである。

世の中の憂さに亂されて、甚しくもうかれてゆく心を、鎭めてくれよ秋の夜の月よ。

武家の身ではあるが、世に關心を持たされることが多く、その爲に放心狀態に陷つてしまつた時、折柄の月に對して、月の齎してくれるそれとは反對の心持を經驗によつて思ひ出して、月に

哀訴した心である。單に耽美の心持から月に對してゐる時には、うかれといふことを歡びとして誇を持つていつてゐる西行であるが、世事の爲にうかれる時には、それを定めることを月に哀訴してゐるのである。鎭魂は神事(じんじ)としての法があるのに、月に向つてそれを願つてゐる所に、個性的なものがある。實感を吐いたものと思はれる。

(一二五) 捨つとならばうき世を厭ふしるしあらむ我には曇れ秋の夜の月

「うき世を厭ふしるし」の「しるし」は、驗(げん)で、功驗といふに當る。うき世を厭ふ功驗は、うき世を厭ふ結果として、うき世の事は思はなくなる意。「我には曇れ」は、我が爲には曇れよで、月を見ると世の中の事が思はれるので、その刺戟となる月は曇つて、我が爲には見えるなの意で、その思はれるのは、卽ち執着だとしていつてゐるもの。

世を捨てたといふならば、憂き世を厭つて捨てたといふその功驗があらう。月を見ると世の中が思はれて、執着を感ずる身となる。我が爲には曇つて、見えずにゐてくれよ秋の夜の月よ。

思ひ切つて飛躍を持つた歌である。上の句と下の句の間には、説明を添へないとわかりにくいまでゞある。又上の句、下の句も、それ〴〵餘情的な言ひ方をしたもので、同じく註のいるものに思へる。しかし一首とすると激情の披瀝で、技巧などの餘地のないものに取れる。前の歌とつながりを持つてゐるともいへるもので、此方（こちら）が先で、前の歌はこれに次いで、やゝ落着いての心のものと取れる。西行の一本氣（ほんぎ）の激しい所を示してゐる歌である。

（二六）　月の色に心を深く染めましや都を出でぬわが身なりせば

「月の色」の「色」は、趣といふ程の意。漢語を譯したもので、當時の流行語。「心を深く染め」の「染め」は、上の「色」と照應させたもので、沁ませる意。

月の趣を心に深く沁ませようか、もし都を離れないわが身であつたならば。

都を離れた、山里ともいふべきさみしい所で、都では見なかつたさみしい月に對して、そのさみしさを初めての發見とし、それを貴いものとしての述懐である。このさみしさは謂はゆるあは

れで、當時最も重んじられたものである。歌としては、さみしさのあはれを餘情としてゐて、新たなるものとしてしみ〴〵感じるといふことによつて、それを暗示してゐるのである。述懐とはいへ結論的のものであるが、感激をもつていつてゐるもので、西行としてはいはずにはゐられなかつた心と思へる。大體西行の都を離れたのは、佛道修行の爲で、觀光の爲ではない。しかし此の歌など、さながら觀光といふことを目的としてゐたかのやうな感のするものである。西行といふ人の思はれる歌である。

2082
（三七）ながらへて誰かはさらに住み遂げむ月隱れにし浮世なりけり

「ながらへて」は、長命して。「さらに」は、一向に。「月隱れにし」の「月」は、月の闇を照らすのを、世を照らす光である尊いものに譬へてゐる。

長命をして、一向に此の世に住み遂げる誰があらうか、誰もない。闇を照らす月とも仰ぐ尊い方の隱れてしまつた、憂い此の世なのである。

世の光と仰いでゐる尊い人に別れて、生き甲斐もなく思ふ心を、述懐としていつたものである。いつてゐる事は、絶望しての弱い心であるが、しかしそれをいふに、人間世界を大観した心と絡ませて、理智的にいつてゐるものである。即ち弱くはあるが同時に強く、涙にくれてはゐるが同時に理智も働かせてゐる。複雑した色合ひを持つた歌である。しかもその複雑は統一されて、尖るといふよりもむしろ柔かみをさへ持つたものとなつてゐる。際やかには示してはゐないが、西行といふ人の人物を示してゐる歌だといへる。

2085
（二二八）　月の行く山に心を送り入れて闇なるあとの身をいかにせむ

「月の行く山」は、月の入つて行く山、即ち西方の山で、それによつて西方淨土を聯想させるもの。「心を送り入れて」は、心と身とを別な物として、心だけは既に西方淨土へ遣つての意。「闇なるあとの身」は、「闇」を憂世を聯想させる詞とし、そこに留どまつてゐる、心の脱け去つた身の意。

月の落ちる西方の山の、その西方淨土に我が心は遣りをはつて、五慾の爭のみの、この闇の世にある、心の脫けたあとの身の方を何うしようか。

月に對して佛道の旨を思つてゐると、折柄月が山に入つたので、それに寄せて、憂世の厭はしさを述懷した心のものである。「いかにせむ」は、身も心と共に西方淨土に行きたい、即ち寂滅したいといふことを餘情としたものである。技巧を持ち、しかもそれを目立たなくさせた、詩才の見える歌ではあるが、西行の歌としては圓みの勝つた、やゝ題詠風の趣を持つたものである。宮廷風の優雅な中にも、さすがに、しみじみした西行の匂は持つてゐる。

（一二九）　來む世には心のうちにあらはさむ飽かでやみぬる月の光を

「來む世」は、來世で、佛教では生命を、過去、現在、未來に亘る不滅のものとしてゐるその來世。「心のうちにあらはさむ」は、下の「月の光」で、「心のうち」といふのは、佛教では大悟の狀態を月に譬へて、「心月輪」といつてゐるので、大悟を得ようの意。「飽かでやみぬる」は、

十分ならずして終つた所ので、大悟の程度をいつたもの。

來世では、我が心の中にそれを現さう。現世では十分ならずして終つた所の月の光、即ち心月輪の大悟を。

大悟を得ようとして、現世だけでは十分に得られないことを感じ、來世において得ようと思ふ心を述べたものである。來世は佛教では無限に生きる建前の上からいつてゐるのであるから、遠い未來ではなく、いはば今日に續く明日といふ程の心のものである。しかし西行の求めて止まない勇猛心を語つてゐるものといへる。此の歌は千載集に取られてゐるもので、又御裳濯河歌合にも加へてゐるものである。いつの作かはわからないが、佛道に入つて相應の年月を送つた後の心で、そして晩年になつても會心の一首としてゐたものとはわかる。大體大悟といふやうなものは、程度に限りのないもので、何所を至極ともいへないものであらうが、これを西行からいふと、出家をし精進もしたが、志す所の大悟の境は容易に得られず、衷心においてはかうした嘆きをしてゐたのではなからうかと思はれる。とにかく、晩年に至つても忘れかねた實感の吐露だつたとは思へる。

（三二）　あらはさぬ我が心をぞうらむべき月やは疎きをばすての山

「あらはさぬ我が心」は、下の「月」で、その「月」は前の歌と同じく、大悟の譬としての心月輪である。大悟を開き得ない我が心の意。「月やは疎きをばすての山」は、「をばすての山」は信濃にある月の名所で、歌枕となつてゐる所。「月やは疎き」は、月がをばすて山を疎くして現はれずにゐようか居ないで、月はそこを親しくしてゐる意を強くいつたもの。その「月」は心月輪で、悟るべき理法は、いつも露はになつてゐるの意。

あらはす、卽ち悟の開けぬ我が心の方をこそ恨むべきである。月卽ち大法は、疎く隔てを附けてゐようか、歌枕のをばすて山に照るやうに常に親しんでゐるのである。

前の歌と心のつながりを持つたもので、前の歌の一歩手前のものといふ關係のものである。悟を月に譬へる延長として、古今集以來の歌枕姨捨山を捉へて來る所など、技巧を持つたものである。しかし述懷の此の歌にあつては、それが幾何の效果を收めえてゐるかは疑はしい。

題しらず

963 (三一) 鶉臥す苅田のひつぢ思ひ出でてほのかに照らす三日月の影

「ひつぢ」は、秋、稲を苅つた後の切株から出る新芽で、幾らも伸びずに霜に枯らされるもの。

鶉が寢てゐる苅田のひつぢを思ひ出して、それをほのかに照らしてゐる三日月の光よ。さみしい、幽かな光景を捉へた歌である。さみしくはあるが、艶を含んだものである。「苅田」をいふに「鶉臥す」といふ形容を添へ、又、「三日月」をいふに、「思ひ出でて」と擬人した言ひ方をしてゐるのは卽ちそれである。當時言ひはじめられてゐた幽玄の趣を持つた歌である。西行の詩情を思はせられる歌である。

969 (三二) 雲にただ今宵の月を任せてむ厭ふとてしも晴れぬもの故

「厭ふとてしも」の「しも」は强めたもの。「晴れぬもの故」は、晴れないから。

82

雲に全く今夜の月は任せておかう。いかに厭つたとて、晴れないから。

穩やかな氣分で、事の成行きに任せてゐる心と、それに適はしい靜かな調べとが、渾然と一つになつてゐる歌である。西行の歌は大體、強く昂奮した心と、弱く思ひ入つた心のものが多いが極めて稀れに、素直な、穩やかな心を見せることがある。これはその終りのものである。他人の歌とすればとにかく、西行のものとすれば注意されるべきものである。かうした氣分が、多分は西行の生得のもので、そして久しい修行の後に到達した氣分も、やはりかうしたものではなかつたかと思はれる。此の歌は恐らくは晩年のものである。素直で穩やかといふだけではなく、寂びを帶びてゐて、中に不動の心を藏してゐると感じられるからである。平凡には見えるが優れた作と思はれる。

（一四三）　離れたるしらの濱の沖の石を碎かで洗ふ月の白浪

「離れたる」は、陸から離れてゐるで、下の「沖の石」の位置をいつたもの。「しらの濱」は、

紀伊にある歌枕。「碎かで洗ふ」は、下の「白浪」が、「沖の石」を乘り越す狀態で、白浪が岩にぶつかり、碎けつつ乘り越すのが、月光に耀いて、一見、沖の石が碎けたがやうに見えるが、乘り越してしまふと、石は依然としてゐるので、單に洗つたのだとわかる意。

陸からははなれてゐるしららの濱の沖にある岩を、碎きはせずにたゞ洗つてゐる、月に照る白浪よ。

印象のいかにも鮮明な歌である。「離れたる」といつて、作者と「沖の石」との距離を示してゐるので、「碎かで洗ふ」といふ突飛に似た詞が、自然な、妥當なものとなつて來る。「碎かで洗ふ」は、極めて壓搾した詞で、岩を覆ひつくして、白く耀く浪の、さながら岩を碎いたかと感じられる狀態と、浪が去つてしまふと、黑い岩が依然として殘つてゐるといふ動的な變化を、はつきりと感じさせるものである。「月の白浪」もまた、月光に耀いてゐる白浪を感じさせるもので、壓搾を持つたものである。この壓搾は新古今集で愛された風であるが、一時代前の西行は、先んじて十分に試みてゐたのである。西行の一面である才人としての面影を窺はせてゐる作である。

1505 (一四)　憂きことも思ひとほさじ押しかへし月の澄みける久方の空

「思ひとほさじ」は、嘆き切るまいで、程よく諦めて、餘りには嘆くまいの意。「おしかへし」は、押退けて、又は立ち越えてといふ意で、今は下の「空」の狀態をいつたもの。空を地に對させて、地を離れて靜かにゐる狀態をいつたもの。

世の憂いことも、嘆き切るやうなことはしまい。地を立ち越えて、月の澄んでゐたことであるよ、久方の空は。

何等かの嘆に捉へられて、久しく惱んでゐた後に、外を見ると、秋の夜の空の月が澄んで、靜かに、何物にもかかはりのない樣をしてゐるのを見て、我もああした心であるべきだと思つた際の心と取れる。事に卽してのものではあるが、氣分を主としていつたものなので、おのづから婉曲のものとなり、淡然とした感のあるものとなつてゐる。しかし根が實感なので、いはうとしてゐる心はわかり、又その淡然としてゐるのも、氣分の眞であると思へて、一種の魅力となつてゐる

のである。西行の心らしく、又歌らしい感のするものである。

（一三五）月の夜や友とをなりていづくにも人知らざらむ栖教へよ

「月の夜や」は、「月」を主としたもので、「や」は「よ」と同じく呼懸けたもの。「友とをなりて」の「を」は感嘆。

月よ、我が友となつて、何處でも、人の知らないやうな我が栖を教へてくれよ。

月に對して靜かに幽懷を樂しんでゐると、周圍に人のゐるのがうるさくなり、人に妨げられず心ゆくまで此の幽懷をつづけたいと思ふ心からの呟きである。これを月に對つて訴へてゐるのは場合柄としても自然であり、又月の光の到らぬ隈もない上からも自然である。調べが靜かに穩やかで、その際の氣分を具象してゐるものに思はれる。

賤しかりける家に、蔦のもみぢ面白かりけるを見て

（一三六）思はずよよしある賤のすみかかな蔦の紅葉を軒に這はせて

「思はずよ」は、案外であるよ。「よしある賤のすみか」の、「よしある」は由緒あるで、普通は身分のあるといふ意に用ゐるが、今は、物の趣を解するといふ意で用ゐてゐる。物の趣のわかるのは、教養のある者のこととなつてゐたので、轉じて用ゐてゐるのである。

案外なことよ、物の趣を解してゐる賤の住家ではあるよ、蔦の紅葉を軒に這はせてゐて。

山里ともいふべき所で發見した光景と思はれる。蔦の紅葉が軒に這つてゐるのは趣のあるもので、又態とらしくもないので、いはば心憎さのあるものである。趣の爲に態と這はせたものか、荒れるに任せてゐる成行きのものであるかはわからないが、それを「思はずよ」と驚嘆し「よしある」と感心してゐるのは西行の心である。かうした歌で見ると、風雅を解し、歌を詠むといふことに對して、西行が相應に誇を感じてゐたのが窺はれる。同時にさうした心を持つたものが、世間にいかに少なかつたかといふことも思はせられる。ちよつとした歌ではあるが、西行の面目のあらはれてゐるものである。

秋の末に法輪寺に籠りてよめる

499（一三七）山里は秋の末にぞ思ひ知る悲しかりけり木枯の風

「山里は」は、木立の多いことを餘情とした詞。木枯の風は木の葉を吹き散らす風。木立の多い山里は、秋の末には、今更のやうに思ひ知ることである。悲しいものであるよ、その木の葉を吹き散らす木枯の風は。

他奇のない歌ではあるが、西行といふ人の人柄に觸れてゐる所の歌である。秋の末の木枯の風が木の葉を吹き散らすなどといふことは、年々に繰返されてゐる平凡極まることであるのに、その樣を見ると、今初めて見るかのやうに「思ひ知る」といひ、そして「悲しかりけり」と感嘆を添へていつてゐるのである。これは迎へて解せば、日々の心が新しく、過去に捉はれてゐない爲に、眼前の一切に驚きを持ち得るのだともいへるが、事實はさうしたことよりも、本性が感傷的であつて、悲しみに對しては極めて傷みやすい心を持つた人で、そこから來てゐる感傷と思はれる。抒情的に强くいつて、木の葉の亂れ散る、「悲しかりけり」といふ狀態は全く餘情に讓つたものである。それが此の歌の味ひとなつてゐる。

四、冬の歌

時雨

（一三八）月を待つ高根の雲は晴れにけり心ありける初時雨かな

「時雨」は、冬の雨で、一しきり降つて止(や)む雨。「月を待つ高根」は、月の出て來る所として待つてゐる高い山で、東の方の山。作者は山の此方(こちら)の方に、相應の距離をもつてゐると取れる。「心ありける」は、下の「初時雨」卽ち冬に入つての初めての時雨を褒めての詞で、物の趣を解してゐるの意。趣といふのは、月を待つてゐる間を、待つ月には妨とならず、それに趣を添へる役廻りとして降つた時雨を、初時雨その物が趣を解してゐるとして、擬人したごとき心でいつたもの。

月の出を待つてゐる高根の上に懸つて、その妨になりはしないかと危ぶませた雲は、初時雨を降らすと共に晴れたことであるよ。物の趣を解してゐる初時雨であることよ。

月を待つてゐる山の上に、雲が懸かり、初時雨を降らすと共に晴れて行つたのを見て、今はその初時雨の方をたたへた心のものである。心の細かい、又複雑したものであるが、それも實際に即してゐるが故に、自然にさうなつたのである。「心ありける」といふ立ち入つたことをいつてゐるのも、實境であるが故に、そこまで云はないと心がをさまらないからのものである。餘情のあり、飛躍を持つた言ひ方をしてゐるが、これも技巧からのものではなく、實境がさういはなければいへないので云つてゐる。その自然の成行きのものである。落着いた、靜かな、しみじみと物を愛してゐる氣分が、一首の調べの上に現はれてゐる。

1946 (一三九) 秋篠や外山の里やしぐるらむ生駒の岳に雲のかかれる

「秋篠や」は、秋篠のの意。「外山の里や」は、「や」は疑。何れも大和平群郡の地名で、名所。

「生駒が岳」は、河内で、同じく名所。

秋篠の外山の里がしぐれるであらうか。生駒が岳にそれらしい雲がかかつてゐることだ。

生駒が岳に一むら懸つてゐる時雨雲を望んで、それに近い、なつかしい所としてゐる秋篠の外山の里に、時雨が降るのだらうかと思ひやつた心である。

時雨の降りさうなことを思ひやつた心であるが、時雨は一しきりだけひそかに降るその樣も、枯葉などの上に立てる音も、幽寂を極めた、あはれな物として愛されてゐた。今はその時雨は、生駒が岳の雲に孕まれ、降る所は秋篠の外山の里だらうと思ふので、その關係してゐる地は、ことごとく懷かしみのある名所なのである。時雨のあはれさと、その地の懷かしさと一つになつて、一種の情趣をなしてゐる歌である。

題しらず

（一四〇）　津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり

「津の國の難波」は、攝津の難波の浦で、今の大阪。平安朝以前から、そこの海と、浦に多い蘆によつて名所とされてゐた。「春」は、蘆の若葉する時としていつてゐる。「夢なれや」の「や」は感歎で、夢であるよ。「蘆の枯葉」は、冬の物。

津の國の難波の浦の、蘆の若葉をする春は、今より思へば夢であるよ。今見れば、その蘆の枯葉に風が吹き渡つてゐることであるよ。

難波の浦の蘆の枯葉に風が吹き渡つてゐるさみしい光景を目にして、それに較べて思へば、春の若葉する頃の豐かさは夢であると感じたので、見る目のさみしさをいつたものである。表現は春と冬の今とを對照したもので、傳統の法ではあるが理智的なものである。又言葉は、心とはちがつて華やかなものである。「春」といつて、「蘆の枯葉」との對照によつて春の若葉の樣を暗示し「難波」をいふに「津の國の」を冠して大きくいひ、その對照としては、「枯葉に風渡る」といふ細かいものをもつてするなど、才の勝つたものである。西行の技倆方面を示してゐる歌といへる。

水邊寒草

327 (一四一) 霜に逢ひて色あらたむる蘆の穗のさみしく見ゆる難波江の浦

霜に逢つて、色の變つてゆく蘆の穗の、さみしく見えるところの難波江の浦よ。

これも前の歌と同じやうに、難波江の浦といふ廣い所に、そこの名物としての蘆ではあるが

その穗の色が、霜に逢つて變るといふ微細なものを捉へて對照させ、その變つた色がさみしく感じられるといふことを中心としたものである。感としては極めて實際で、實感以外には得られないと思はれるものであるが、調べの上に餘裕があつて、實感の記憶を述べたものといふ趣がある。題詠であつたかと思はれる。しかし感その物の細かく、生きてゐる所は、西行でなくては持てないものと思はせるものである。

枯野草

522 (一四二) 霜枯れてもろく碎くる荻の葉を荒く分くなる風の色かな

「もろく碎くる荻の葉」は、大體荻の葉は强いもので、枯れても、散りも裂けもしない。傷つくとすると折れるだけである。その强くて折れる狀態を、「もろく碎くる」といつてゐるのである。見た目の感としては適切な詞である。「風の色」は、單に風といふとちがはない意の詞で、「色」は强ひていへば趣である。

霜枯れして、脆く碎けてゐる荻の葉を、荒く吹き分けて行く風ではあるよ。

荻の葉をあはれんで、既に霜にいためられて碎けてゐるのを、更に冬の風が荒く吹き分けて行つて、更にも碎かうとするのかと思つて、その碎けるのは餘情としたものである。この荻は實景と思はれるが、荻は一方では、秋風のあはれを第一に傳へるものとして、限りなく歌に詠まれてゐるので、そこから來るあはれみも手傳つてゐるものと思はれる。卽ち風雅の心も手傳つてゐるのである。

冬月

1614（一四三）　小倉山ふもとの里に木の葉散れば梢に晴るる月を見るかな

「小倉山」は、京都嵯峨野。歌枕となつてゐる山。「ふもとの里」は、西行が一時そこに住んでゐたと見えて、他にもそこを捉へた歌がある。さみしいが、なつかしさを持つた地といふ意があらう。「梢に晴るる月」は、冬木の葉のない梢で、そこに晴れた月の見られるのは、冬に限つたことである。

小倉山の麓の里に木の葉が散ると、隱す葉のない梢に、晴れた月を見ることであるよ。

葉のない冬木の梢に、晴れた月のあらはれてゐるのを發見した興である。冬のさみしい月ではあるが、小倉山の麓の里と思ふことによつて、なつかしさの感じられるさみしさである。細かい味ひを持つた、しみ〴〵した歌である。調べが主となつてゐるといへる。

閑夜冬月

(一四) 霜冴ゆる庭の木の葉を踏みわけて月は見るやと訪ふ人もがな

「霜冴ゆる庭の木の葉」の「木の葉」は、庭に落葉したもの。その上に霜が置いて、折柄の月に冴えてゐる意。「踏み分けて」は、下の「訪ふ人」のすること。

置く霜の月に冴えてゐる庭の落葉を踏み分けて、今宵の月は見てゐるかといつて、訪つて來る人のあつてほしいものだ。

宵の中から霜の置いてゐる寒夜の月のあはれをしみじみと見てゐての心で、かうした折柄、同じく寒夜の月のあはれを解す人が訪つて來て、共にあはれを味つたら、いかに心ゆくことだらうとの意である。寒月の様をくはしくいつて、感傷の詞を着けてゐないところが快い。

山家冬月

530
（一四五） 冬枯のすさまじげなる山里に月の澄むこそあはれなりけれ

「すさまじげなる」は、すさまじ卽ち荒涼の意をやや柔らげたもので、荒涼に近いさまをしてゐるの意。

冬枯の、荒涼に近いさまをしてゐる山里に、月の澄んでゐるのは、格別にもあはれなものである。

「すさまじげなる山里」と、「澄む月」との一つになつて醸しいだす「あはれ」を讃へたものである。「冬枯」の山里はさみしさの極みで、すさまじといふべきものであるが、それが「あはれ」なのである。又冬の「澄む月」も同じくあはれである。その一つになつた「あはれ」が「こそ」の強めによつて現はさるべきあはれなのである。「あはれ」は身に染めて味ふべき詩情で、その深くなる程味ひが深くなるのである。今は味ひの深い「あはれ」を發見して、會心のものとして讃へてゐるのである。歌は距離を持つて說明的にいつてゐるものであるが、さうするよりほか云ひ

やうのないものかも知れぬ。それはとにかく、調べが澄んで、しんみりとしてゐるので、それによつて心持の感じられるものとなつてゐる。

櫻木に霰のたばしるを見て

(一四六) ただは落ちで枝を傳へる霰かな蕾める花の散る心地して

一とほりには落ちずに、枝を傳ふところの霰であるよ。見ると、蕾んでゐる櫻の散るのかといふ心持がして。

何處(どこ)へといふきまりもなく降る霰が、たま／＼櫻の木に降つて、枝を傳つて落ちたのに興を持ち、その目で見ると櫻の蕾のやうな氣もするといふのである。櫻の花を思ふ心が背景となつてゐる歌ではあるが、それは無意識のもので、又その瞬間の興でもあるのである。歌は眼前に卽してのものとはいふが、實際からいふと、眼前に卽するといふことは困難である。それは、さうした詠み方では一首の歌とならないといふ不安があるからである。その點から見ると此の歌など、作歌に際しての西行の度胸の程を思はせるものである。極めていささかな子供ででもなければ面白

がらないやうなことを捉へて、氣乘りして詠んでゐるものである。

題しらず

981(一四四七) 霰にぞ物めかしくは聞えける枯れたる楢の柴の落葉は

「物めかしく」は、物の數でもない物が、一つの物らしい樣子をする意。「楢の柴」は、楢の木の、薪とする程の枝又は小さいものの意。

霰の降るので、一つの物らしい音を立てることである。冬枯をした楢の柴の、その落葉は。

楢の葉は本來が剛いものである上に、枯れた葉は乾いてもゐるので、一層剛くなつてゐて、霰に叩かれると割合に高い音を立てる。この事は、大きな楢の木の葉でも、楢の柴であつても同じことである。「楢の柴」としていつてゐるのは、見る目のみすぼらしさに似ず高い音を立てるのに興を覺えて、それをいふ爲に「物めかしく」ともいつてゐるのである。西行の物を面白がる本性から、かうしたつまらないことも發見し、發見するままに興がるので、この歌も前の歌と同じくそれである。

（二四八）　竹の音のわきて枕に冴ゆるかな風に霰の具せられにけり

「竹の音」は、竹を霰の打つ音で、下の「霰」と照應させてある。「わきて」は、取分けて、「具せられ」は、伴はれで、當時の流行語。

竹の鳴る音の、取り分けて枕に高く聞えることである。風に霰が伴はれて來て、それが立てるのである。

寢てゐる所に近く竹があつて、風のある夜、その竹に鳴る高い音を聞いて、霰が風に伴はれて來て、その竹にあたるのだらうと想像したのである。これも前の二首の歌と同じやうに、いささかの事であるが、實感としての興からいつてゐるもので、西行のその時の樣子の想像される、親しみの起る歌である。事としては、霰の風に伴はれて來るのであらうと、寢てゐて思ひやるのであるが、それを「具せられにけり」と、見て確めたやうな言ひ方をしてゐる。誇張であつて、當時行はれてゐたものである。

雪の歌どもよみけるに

（一九九）何となくくぐる雫の音までも雪あはれなる深草の里

「何となく」は、何といふ理由もなくで、下の「あはれなる」に續くもの。西行の好んで使ふ詞。「くぐる雫の音」は、雪が下解けをして、雫となつて、雪の中をくぐる音。「深草の里」は、當時は京都の近郊で、歌枕となつてゐた所。

何といふ理由もなく、雪の中を潜る、その下解けをした雫の音までも、雪があはれに感じられる深草の里であるよ。

深草の里の雪の中にゐて、雪をさみしくあはれなものに感じてゐると、その雪の中に、下解けの雫の雪を潜る極めて微かな音を聞きとめて、それまでもあはれに感じた心である。雪のあはれがその雫の音に高められて、その爲に歌となつたものと思はれる。

西行の細い神經の、弱い、又は微かなものに觸れて、それに引かれて行くのを、あり〳〵と感じさせる歌である。「何となく」といつてゐるのは、一面は理智的である西行の、何等かの說明を

欲してゐるが、捉へてはいへないことを示してゐるもので、しかも西行には割合に多いものである。かういふ言ひ方をせざるを得なかつた所に、西行の詩情が窺へるといへる。

558 (一四〇) 訪へな君夕ぐれになる庭の雪を跡なきよりはあはれならまし

「訪へな君」は、訪つてくれよ君で、その「君」は知合ひの男である。「夕ぐれになる」は、夕暮に近いで、その時刻は最もさみしい時としていつてゐる。「跡なきよりはあはれ」の「跡」は人が訪へば足跡がつく、その跡で、足跡のないよりは、あつた方があはれがある意。

訪つてくれよ君よ、夕暮になる我が庭の雪を踏んで。もし訪つて足跡をつけてくれたならば、足跡のないよりもその方があはれが多からう。

雪にとざされて、あはれを感じてゐると、夕暮のさみしい時になつて人戀しくなると共に、人が訪つて來て、庭の雪に足跡をつけたならば、雪のあはれを共に身にしめて味つたことになつてその方があはれが深いだらうと思つたのである。あはれは深い程趣があるとする心から、一人で

見る雪よりも二人(ふたり)で見た方(はう)があはれが深くなるとして、それを願つてゐる心である。「訪へな君」と、人に呼び懸けてゐる形になつてゐるが、下の續きから見ると事は風雅ではあるが、餘程會心の友にでなければいひにくいものである。實際に即しての心であるが、果して友に贈つたものであるか、或は友を空想しただけのものであるかわからない。或は空想のものかも知れぬ。心の細かい、そして複雜したものである。

冬の歌十首

(五一) 宿毎にさびしからじとはげむべし煙籠めたる小野の山里

「はげむべし」は、勵んでゐるであらうで、その勵むのは、火を焚くこと。「煙籠めたる」は、焚き火の煙を家に籠もらせてゐるで、家中を煙にしてゐる意。「小野の山里」は、比叡山の山續きの山村で、炭燒をもつて聞えてゐる、歌枕となつてゐる所。

宿毎に、さみしくはしまいと思つて、勵んで火を焚いてゐることであらう。家中に煙を籠もらせてゐる小野の山里よ。

冬のさみしい時、さみしい小野の里を見ての實感と思はれる。そこの小さい家々(いへ/\)が、家中を煙にしてゐるのを見て、季節と場所とから來るさみしさを紛らさうとして、意識して勵んで火を焚いてゐるのだらうと想像したのである。それは、火を焚くのは賑やかな氣のすることで、それによつてさみしさが紛らせるとする心からである。事實はさうした心での焚火ではなく、寒さを凌ぐ爲のものであつたらうが、それを此のやうに解したのは、西行自身のさみしさと、焚火のなつかしさからの心と取れる。しかし西行はさうは思はず、自身の想像を事實としていつてゐるのであるが、思ひ入つてさういふと、讀む者にはその方が事實と感じられ、又尤ものこととも思はれるのである。西行の詩情と、思ひ入つての詞との魅力である。優れた歌といへる。

冬の歌よみける中に

（一四二）　さびしさに堪へたる人の又もあれな庵(いほり)並べむ冬の山里

「さびしさに堪へたる人」は、さびしさを怺へ得てゐる人で、その「人」は西行自身である。「さびしさ」は、下の、「冬の山里」に「庵(いほり)」を結んで修行してゐる間の心。「又もあれな」は

我より外にもあつてほしいの意。「庵並べむ」は、修行の爲の庵を並べ結ばうで、それによつてさびしさを慰めようが爲。

さびしさを怺へ得てゐる者が、我が外にもあつてほしい。それだと、庵を並べて修行をして慰め合はう、此の冬の山里で。

一人で冬の山里に庵を結んで修行をしてゐる際、さみしさに襲はれて、それを怺へてゐたが、願はくは同心の友をほしい、そしたら隣り合つて住むことによつて慰めようの意で、その境も、その心もよく感じられるものである。修行の爲に冬の山里に一人で籠もれば、さみしさは當然のもので、初めから覺悟してゐるべきものである。そこに西行の勇猛心が見える。「堪へたる人」と自身をいつてゐるのは、その勇猛心を語つてゐるものである。しかし「さびしさ」はいつてゐる。修行の勇猛心と共に、人間としてのさみしさが並んであつたのである。この「さみしさ」は、修行心の弛みの爲のものではないとわかる。修行によつて心が澄み來るに伴つて、さみしさが必然的に現はれて來るものかも知れぬ。しかし此れは特殊のもので、誰にでもわかるといふものではな

い。誰にもわかる事としては、佛道の修行といふことが、西行に取つては自然な、いひ難く樂しいものといふではなく、强ひてする不自然なものであつて、そこに罅隙が出來、その罅隙がさみしさとなつたのではないかといふことである。これを平たくいふと、西行に取つては佛道は、性に合はないもので、それを修めることによつて氣分が分裂させられる場合があり、そこから「さみしさ」が湧き出したのではないかといふことである。さう取ると西行のかうした「さみしさ」は無理のないものになつて來る。西行には此の種の歌が可なり多くあつて、ひとり此の歌ばかりではない。この歌はその種の中では、秀歌とされてゐるものなので、特にいふのである。

題しらず

982（一二三）　柴圍ふ庵のうちは旅立ちてすどほる風もとまらざりけり

「柴圍ふ庵」は、柴をもつて周圍を圍つてゐる庵で、庵としても粗末なもの。「旅立ちて」は、庵の主人卽ち法師、修行者などが、そこを捨てて、何所かへ旅立ちをして。「すどほる風」は、素通りをする風で、風が吹き止まるべき何物もないので、素通り卽ち、眞直に吹き拔けになる意。

柴をもつて周圍を圍つてある庵は、その主人(あるじ)が旅立ちをして庵のうちを素通りする風までも、何物にも障らないことである。

西行が何處ぞで、住む者のない庵を見懸けて、感激をもつて詠んだ歌と思はれる。出家の身は、物に執着をしてはならないとするところから、一所不住を旨としてゐる。同じ心から、身邊にも必要以外の物は置くまいともしてゐる。今見る庵は、その作り樣も、その物のない樣も、まさに教旨の通りなので、その樣によつて、そこを住み捨てて去つた、見ない主人をゆかしんだ心である。實感の歌で、實感から自然に來る餘情も持つたものである。

(一五四) 身にしみし荻の音には變れども柴吹く風もあはれなりけり

「荻」は、軒端に近く植ゑるのが都での風となつてゐた。秋風の荻に立てる音は、なつかしいものとされ、その歌も多い。これもさうした荻である。「柴吹く風」の「柴」は、野生のものであるが、それを吹く風は、荻との對照で、家の内で聞くものであることを暗示してゐる。さうした

風の音の聞かれるのは、野山に假に結んだ庵でなければならない。その心のものと取れる。
身に沁みて聞いた昔の荻の音とは變つてゐるけれども、柴を吹く風の音も、やはりあはれなものであるよ。

山野の庵にあつて、庵近い柴の風に立てるあはれな音を聞いて、昔、風雅の心から身にしみて聞いた荻の音と比較した心のものである。實感の歌で、これも實感に伴ふ自然なる餘情を持つたものである。謂はゆるあはれが、おのづからに寂びとなつてゐるものである。

古郷歳暮

(一四四) 昔思ふ庭にうき木を積みおきて見し世にも似ぬ年の暮かな

「昔思ふ庭にうき木」は、下の「年の暮」の行事として、昔からの風習で、庭に年木を積んだ。年木は、神事關係のものである。今はその代りに「うき木」を積んでゐるといふのであるが「うき木」は佛法の比喩で、法華經にある盲龜の浮木といふその浮木である。「見し世にも似ぬ」は以前に見た我が生活には似ないで、在俗の頃、年木を積んだのには似ないの意。

昔のことを思ひ出す我が庭に、その年木ではないうき木を積んでおいて、在俗の時には似ない年の暮であるよ。

題のやうに「故郷」即ち在俗の頃住んでゐた家へ行つて、そこで歳暮にあつての感である。歳暮といふやうな時は、昔を思ひ出しがちなもので、西行もそれをしたのであるが、在俗の時には庭に積んだ年木の今はないのを思ひ、しかし今は代りにうき木即ち佛者としての救を得てゐるのであると思つた心である。西行としては感の深いことであつたらうと思はれるが、その感が靜かな、思ひ入つた調べとなつてゐるといへる。

歳暮に人のもとへ遣しける

（一五六）　おのづからいはぬを慕ふ人やあるとやすらふ程に年の暮れぬる

「おのづから」は、此方（こちら）からいはずとも自然にで、「慕ふ」につづく。「いはぬを慕ふ」は、我が來よといはぬに、慕つて來る意。「やすらふ程」は、躊躇をしてゐる中。

自然に、我が來よといはぬに、慕つて來るかと人を思つて、躊躇してゐる中に、年が暮れたこ

とであるよ。

人なつかしく思ふ西行の本性から、その訪つて來るのを待ちかねるやうにしてゐたのを、年の終りといふことを機會として、恨みをいふ心持をもつて、いつたものである。來るを待つといふので、目下(めした)の人であることが察しられる。詞も調べも粘りを持つてゐて、西行の濃情の程を思はせるものである。

五、離別の歌

相知りたる人の、みちのくに へ罷りけるに、別の歌よむとて

(一五七) 君いなば月待つとても眺めやらむあづまの方の夕暮の空

「月待つとても眺めやらむ」は、月を待つとしても遠く眺めようで、月は東から出るもの、その東は君の行く陸奥の方の意。「眺め」は、單に見る意と、嘆きをもつて見る意とある。今は後のもの。「あづまの方」は、東方の國で、陸奥を主に、月が出る方を絡ませたもの。「夕暮の空」は、一日のうち最もさみしい時で、從つて人の思はれる時でもあるので、今はそれを主に、月の出る時を絡ませてのもの。

君がそちらへ往つたならば、月の出を待つとしても遠く眺めよう、その東の方の夕暮の空を。

詞書に、「別の歌よむとて」とあるのは、別の時に挨拶の心をもつて歌をよむのが禮となつてゐたからの詞である。心は、君はしげしげと思はうといふので、それを月の出に絡ませて、「東」と

「夕暮」とに懸けてゐる所、謂はゆるあはれを持つた心細かさのある歌である。調べもしみじみしてゐる。しかし大體とすると、儀禮的な所があり、此の當時のかうした際に詠む歌の型を離れないものなのである。

遠く修行に思ひ立ち侍りけるに、遠行別といふことを、人々まで來てよみ侍りしに

（一四八）　程經れば同じ都のうちだにも覺束なさは訪はまほしきに

「遠行別といふこと」は、歌の題で、遠く行く別れといふ題をの意。「人々まで來て」は、懇意の人々が、參出來て、即ち自分の所へ來ての意。「よみ侍りしに」は、詠んだのにつけて、その返歌としての意の省かれたもの。「程經れば」は、間が久しくなればで、「間」は逢はない間の意であることを、下で現はしてゐる。「同じ都のうちだにも」は、同じ都の中に住んでゐてさへも。「覺束なさ」は、不安を感ずる人はで、樣子のわからないの意。「訪はまほし」は、訪ひたい。

程が久しくなると、同じ都の中に住んでゐてさへも、不安を感じる人は、訪ひたくおもふものを。

別を惜しまれるのに對して、我も別を惜しむ心である。心は遠く行く別の、一たび別れれば、いかに思ふとも逢ひ難い嘆きであるが、それはすべて餘情に讓つてしまつたものである。挨拶を題詠により、しかも返歌として詠んでゐるのであるが、飽くまでも實際に即して、無條件で詠んだがやうにし、しかも心のすべてを餘情としてゐるなど、西行の力量の思はれるものである。それと共に西行が、いかに濃情であつたかも思はせられる所がある。

遠き所に修行せむとて出で立ちけるに、人々別を惜しみて詠み侍りける

1703 (一一九九) 頼めおかむ君も心やなぐさむと歸らむことはいつとなけれど

「頼めおかむ」は、頼ませて、即ちあてにさせて置かうで、本當はあてにならないことであるがの心を持たせたもの。「君も心やなぐさむと」は、君も亦、我と同じく、心が慰むだらうかと思つて。

君にあてにさせておかう。その方が君も亦心が慰むだらうかと思はれるので。實は、歸る時はいつといふあてもないことであるけれども。

一方には修行の爲に遠い境へ行かうとする勇猛心があるが、同時に一方には、本性としての心弱さがあつて、決心としては「歸らむ時はいつとなけれど」と思ひつつ、本性としては「頼めおかむ君もや心なぐさむと」と、我をも人をも歎かずにはゐられない心があつたのである。そこには詩的誇張もまじつてはゐたらうが、大體としては何れも本當で、明らかに矛盾、相剋があつたものと思はれる。挨拶の歌ではあるが、西行の面目をあらはした歌と思はれる。

六、羇旅の歌

旅へまかりけるに入相をききて

（一〇〇）　思へただ暮れぬと聞きし鐘の音は都にてだに悲しきものを

「思へただ」の「思へ」は思へよで、人にいふもの。「ただ」は專らで、强めるもの。「都にてだに」は、都にゐて聞くのさへも。

思へよただ、今日も暮れたと思つて聞いた入相の鐘の音は都にゐて聞いてさへも悲しいのに。

夕暮は悲しい時であるのに、それを明らかに意識させて聞える鐘の音は、一段と悲しい。都にゐてでさへ悲しいのに、まして旅の空ではといふのである。その旅は何所であつたかわからないが、同行のものともいふべき、都と今ゐる所との比較の出來る、そして心置きない者へ、口頭でいふ代りに歌をもつていつたものと取れる。傷みやすい西行の心の實際であつたことは、思ひ入つた調べでわかる。

攝津のやまとと申す所にて人を待ちて日數へにけるに

（一六一）　何となく都の方と聞く空はむつまじくてぞ眺められぬる

「何となく」は、「むつまじく」へ續く。「眺め」は、嘆きをもつて見る意のもの。

何といふ譯もなく、そちらが都の方角だと聞く方の空は、ひたすら睦まじくて、眺められることである。

歌を詠んだ場所や、その時の事情が詞書となつてゐるが、これは旅といふことさへわかれば、その他のことは何うでもよい歌である。これだと紀行を主としたもののやうに見えるが、しかしその爲、實感の作であることは明らかになる。事としては誰にでもあることであるが、そのままに忘れ去られるものである。一首の歌とし、しみじみした味ひのあるものとしてゐるのは、西行に特有の感傷の爲である。人を思はせられる方の歌である。

人を見おきて歸りまかりなむずるこそあはれに、いつか都へは歸るべきなど申しければ

（一六二）　柴の庵のしばし都へ歸らじと思はむだにもあはれなるべし

「人を見おきて歸りなむ」以下「都へは歸るべき」までは、他人が西行に向つていつてゐる詞で、「人」は西行である。貴方を見殘しておいて、都へ歸るといふことは、いかにも悲しいことでそして貴方はいつ都へ歸るでせうの意。玉葉集にはこの詞書が、西行が四國に修行してゐた時、同行の者の先に都へ歸る時の詞となつてゐる。「柴の庵の」は、下の「しばし」の「しば」へ同音の繰返しで懸かる枕詞であるが、その「柴の庵」は眼前のものと取れる。「思はむだにも」は、西行がさう思ふ、その思ふことだけでも。「あはれなるべし」の「あはれ」は、今は悲しい意。「べし」は、推量。

暫くの間は都へ歸るまいと思ふが、さう思ふだけでも、悲しい氣がするやうである。

「思はむだにもあはれなるべし」は、細かい心のものである。思ふだけでも旣に悲しいのに、まして事實となつたらば、いかに悲しからうといふ餘情を持たせ、さすがにそれをいふに、「べし」といふ推量をもつてしてゐるのである。「柴の庵の」枕詞も、眼前を捉へたもので、同音の繰返しといふ上では單に音樂的のものであるが、眼前といふ上では、自分の現在の狀態の敍述とな

つてゐて、ここにも細かい心がある。これらの細かい心は、感傷と、それをおさへようとする理智との一つになつた所から來てゐるものと取れる。修行をしつゝもさみしい心から離れられなかつた西行と、さみしさの極まつて感傷的となつた時にも、さすがに理智をもつてこれをおさへようとした、複雜したといふよりも、むしろ分裂させられた、しかし取亂すやうなことはなく、それに統一を附けて行つた西行の面目の、躍如としたもののある歌である。

世をそむきて後、修行し侍りけるに、海路にて月を見てよめる

1122（一豆）　わたの原はるかに波を隔て來て都に出でし月を見るかな

「都に出でし月」は、都は東にと思つてゐる、その東に出た月を「都に出でし」と言ひかへたもの。西海で詠んだものとわかる。

わたの原を、遙かに波の上を隔てて來て、都に出た月を見ることであるよ。

四國へ渡つて行つた時の歌と取れる。海上での作とも、上陸しての作とも取れるが、上陸してのものと取る方が自然であらう。都を心に懸けつつ遙かに海を越えて來たといふことがあはれ深

く、東の空に上つた月を直ちに都の月といつて、あはれを深めたものである。全體としておほらかで、專のあはれに較べて美しさの勝つてゐるところは、若い西行を思はせる歌である。

讃岐の國へまかりて、みの津と申す津につきて、月のあかくて、ひびの手も、かよはぬ程に遠く見え渡りけるに、水鳥のひびのてにつきて飛び渡りけるを

(一六四)　月にはぢてさし出でられぬ心かな詠むる袖に影の宿れば

「ひびのてもかよはぬ程に遠く見え渡り」は、「ひび」は枝付の竹を海中に立てて、魚の入るのを待つて捕るもので、海苔を附ける爲にも用ゐる物。その「て」といふのは、何ういふ物かわからない。多分は陸にゐてそのひびを扱へるやうに取着けた綱のやうなものではなからうか。その「て」が「見えぬ程に」といふのは、月光の明るさに紛れて、その「て」が見えない程にの意で明るさを具體的に現はす爲の詞である。「遠く見え渡り」は、月光の明るさで、海上が何處までも見える意。「詠むる袖に影の宿れば」は、月を詠めると、涙がこぼれて袖が濡れ、その袖に月の光が宿るので。

月に對して我が心がはづかしくて、その光のさす所へは出られない我が心であるよ。詠めるにこぼれる袖の涙に、月の光が宿るので。

詞書は紀行の趣を持つたものである。此の詞書のもとに十首の歌があるが、心の上の聯絡を持つてゐるもので、謂はゆる連作となつてゐる。連作は平安朝時代の歌にも或る程度まではあつて必ずしも珍らしいものではない。しかし十首といふ多數の連作は珍らしいのである。今はその中の三首だけを拔くにとどめる。此の歌は、月に對つてゐると心弱くなつて涙がこぼれる、さうした心でゐるからは、月は眺めるなといふ意の歌に續いたもので、それを一歩進めた心のものである。「月にはぢて」は、月に對して我が心弱さが恥づかしくての意であるが、單に澄み渡つた月に對つてゐると、恥づかしさを感じてといふ意に見ても通るものである。連作ではあるが、一首の獨立性のさして弱いものではない。感激してゐる心の搖らぎが、さながらに調べの上に現はれてゐて、その意味で魅力を持つた歌である。

（一六五）　心をば見る人毎に苦しめて何かは月のとりどころなる

その心をば、見る人毎にそれぞれに苦しませて、何が月の取柄であらうか、取柄はない。

「心をば見る人毎に苦しめて」は、月に對ふ程の人は、すべて一樣に物を思はせられるときめていつてゐるのである。物を思はせられるのは、月によつて心が鎮められ、統一をつけられるが爲で、その思ふことは必ずしも苦しみとは限つてゐない。たとひ苦しみであつても、その苦しみは一種の快さに變じ得るものである。現に西行はさうした歌の多くをも詠んでゐる。今は單に「苦しめて」といひ、又「見る人毎に」と獨斷してもゐる。これが、若い頃の西行であつたと思はれる。「何かは月」のと月を罵つてゐるのは、若い西行のいかに一本氣であつたかを語る以外のものではない。

（一六六）　いつかわれこの世の空を隔たらむあはれあはれと月を思ひて

「この世の空」の「空」は、下の「月」の照應として添へたもので、「この世」と同じ。「隔た

らむ」は、「この世を」に續けたもので、他界する卽ち死ぬ意。「あはれあはれと」は、感歎する意の「あはれ」を、强めの意で重ねたもの。月を、心を苦しめるものとは反對に、極めて歎美すべきものとしての意。

いつの時に我は、この世を去つて他界することであらうか。あゝ美しい美しいと月を思つて。他界をする時には、月が心から歎美されることだらうと思ひ、それを希つた心である。言ひかへると、月に對ふと此の世の事が思ひ出されて、苦しくなるまで胸を刺して、生きてゐる限りそれから脫れられさうもない心をいつたものである。激情をそのままにいつたものと見えるから、眞情と取れる。その身の上に何のやうな事があらうとも、かうした心は一時の激情であつて、俗人としても稀れにあることである。西行は今は出家して修行に出てゐる身である。その人にしてかうした心を抱いてゐるといふは、むしろ珍らしいことである。これ程までに世を厭ふ心が何所から出たものであるかは疑問となることである。保元平治の亂を契機として、西行の從來住んでゐた世界が顚落したが爲といふことも、一つの原因とはならうが、少壯の一北面の武士が、時代

的關心によつてこれ程までの心を起したといふことは、常識では想像し難いことである。深く傷んで、生涯癒し難いものに感じるといふやうなことは、私生活の上のことと思はれる。しかしそこには、これといつて目に立つものも見えない。祕して第三者には窺はせない爲とも取れるが、しかし歌においては內心の機微を云ひつくして餘す所のない西行である、あれば何等かの形において現はしさうなものに思へるが、それらしいものを發見するに困難である。最もよく見せてゐるのは、西行の多感な、生一本な性分である。氣が弱く、感じ易く、我と持て惱んでゐる性分である。同時に一方には、剛情な理智的なところがあつて、何うにも妥協の出來ない所がある。そしてそれとこれと相剋し合つて、極めて氣むづかしい、動搖の多い心は、歌の上にありありと見えてゐる。西行の歌はそれを樞軸としてゐるかの觀がある。西行の世を厭ふのは、此の性格の爲ではないかと思はれる。かうした性格の人は、時代や一身上の事情のいかんに拘らず、その周圍に對して不滿と憤怒を持たずにはゐられない。「西行の厭世の理由の大部分は、その性格にあつた」のではないかと思はれる。以上三首の歌は、出家西行の如何に我執と執着の多い人であつたかを示し

てゐるもので、本來悲劇の主人公であるべき面目を無意識に語つてゐるものと見られる。

讃岐にまうでて、松山と申す所に、院おはしましけむ御跡尋ねけれども、かたもなかりければ

1378（一三七八）松山の波のけしきは變らじをかたなく君はなりましにけり

「院」は、崇德院で、讃岐の松山に御遷幸、そこで崩御になつたことは、史上に名高いことである。「かたなく」は、殘す形見もなくで、全く空しくの意。

松山の、波の様子は昔と變らなからうものを、跡かたもなく、君はお變りになられたことであるよ。

しみじみとした、强さを含んだ調べに、西行の心は感じられるが、いつてゐる所は、變らない自然と對照することによつて、變りやすい人間の世界を嘆いてゐるといふ傳統的のもので、何方（どちら）かといふと理智の勝つた、儀禮の趣を帶びたものである。

白峰と申す所に御墓の侍りけるにまゐりて

1379
（一六八）　よしや君昔の玉の床とてもかからむ後は何にかはせむ

「よしや」は、是非もなし。「玉の床」は、玉をもつて飾つた床で、極めて尊い御殿の意。「かからむ後」は、かく崩御になられた後。

是非もないことである、君よ。昔のままの玉の床があらうとも、かく崩御になられた後は、それが何にならうか、何の役にも立たない。

佛教の說く所の、現世の榮耀のはかなさをいつたものである。院の御墓に佛者として詣うでたので、かうしたことをいふのは當然とも思へるが、西行が崇德院に申上げる詞としては一般性の勝ち過ぎたものに思へもする。君臣の隔たりの遠いものがあるにもせよ、自身の述懷をする場合の熱意に較べると、平靜に過ぎる感を持たずにはゐられないものである。

同じ國に大師のおはしましける御あたりの山に庵結びて住みけるに、月いと明くて、海のかた曇りなく見え侍りけるに

1380
（一六九）　くもりなき山にて海の月見れば島ぞ氷の絕間なりける

「大師」は、弘法大師。「氷の絶間」の「氷」は、月光に照つてゐる海の面の比喩。「絶間」は解けた所で、色がちがつて黑く見える所の意。

曇りのない山にゐて海の上の月を見ると、島だけが、氷の絶間になつてゐることである。

詞書は、例の紀行の趣のあるもので、歌は單に風景に對しての愛である。「島ぞ氷の絶間」といふ厭搾した詞は、恐らくは西行は、さうした景色を初めて眼にして、發見の喜びから昂奮していつたものと思はれる。單なる風景で、「あはれ」などといふ心に捉はれてゐないことを思はせられる。

庵の前に松の立てりけるを見て

（一七〇）　谷の戸にひとりぞ松は立てりける我のみ友はなきかと思へば

「谷の戸」は、詞書の「庵の前」を言ひかへたもの。「戸」は入口の意で、庵のあつた所が、谷の入口になつてゐた爲かと思はれる。「松」を主としての言ひかへである。

谷の戸にただ獨り松は立つてゐることである。自分ばかりが友がないのかと思ふと。

庵の生活がさみしく、話相手のないのを佗びしんでゐる折、松がただ一本だけ立つてゐるのを見て、松も我と同じく獨りであると思つて、その佗びしさを慰めた心である。松を擬人するのは傳說となつてゐたが、今はむしろ實感としていつてゐるものと取れる。いはゆる寂びのある歌ではあるが、冴えを持つてゐるとまではいへない。若い頃の作といふことを思はせられる。

土佐のかたへや罷らましと思ひ立つこと侍りしに

（一七）　ここを又わが住み憂くてうかれなば松はひとりにならむとすらむ

「住み憂くて」は、さみしさに住み憂い意と取れる。「うかれなば」は、離れて出たならば。この庵を、我が住み憂くして、離れて出たならば、松の木は獨りとなることであらう。

「松」は前の歌のそれで、西行はさみしさから友だち扱ひをするやうになり、いつか松もさう思つてゐるやうな氣になつて、そこを出懸けようかと思ふにつけ、殘される松のさみしさを思ひやつて憐んだ心である。一見、感傷に感じられさうでさうは思はせない所のあるのは、さみしさによつて繋がれた合理的な關係のものだからである。調べがしみじみしてゐて、西行の濃情を思

はせる。

雪のふりけるに

（一七三）花と見る梢の雪に月さえてたとへむ方もなき心地する

「花と見る」は、花の如くに見る。「月冴えて」は、月光が寒く冴えてさして。「たとへむ方」は、喩へていひやうもなくて、その愛でたさをいつたもの。

花の如くに見る梢に置いた雪の上に、月光が寒く冴えてさして、喩へていひやうもない心持がするよ。

「たとへむ方もなき」が西行の心である。梢の雪に月光がさして白く輝くのを「花」と見るといふのは、櫻花を聯想してである。これは春を代表する艶なものである。しかしその月光は、「冴え」たものである。櫻と共にある朧ろの月ではなく、冬に見る寒く冴えた、謂はゆるあはれなものである。この艶とあはれとの二つが思ひ懸けずも眼前に現はれたのである。當時の詩情を心において見ると、まさに「たとへむ方なき」ものに感じられたらうと思はれる。この感は、今も感じ

られないものではない。

(一七三)　折しもあれ嬉しく雪の埋むかなかき籠もりなむと思ふ山路を

「折しもあれ」は、丁度その時にの意。

丁度その時に、嬉しくも雪の降りうづめることであるよ。ここに籠らうと思ふその山路を。この山に籠らうと思つてゐる折柄、雪が深く積つて、動けなくなつたので、その爲に心の落着くことを喜んだ心である。誰にもわかる心であるが、「嬉しく」といつて昂奮してゐるのは、やや特殊に感じられもする。これは西行の、落着き難く、動搖する心からの喜びで、そこに西行の見えるものである。調べが靜かに躍つてゐて、西行のその時の氣分を思はせる。

まうで着きて(安藝の一の宮)、月いと明くてあはれに覺えければよみける

(一七四)　諸共に旅なる空に月も出でて澄めばや影のあはれなるらむ

「諸共に旅なる空」の「諸共」は、西行と月と共に。「旅なる空」は、西行は旅の空の身。月は

空を旅するものとしていつてゐる。「影のあはれ」は、月の光の身にしむ意。

我と同じく旅である空に月も出て、澄んでゐるのでその光が身に沁みるのであらうか。

月の光がいたく身に沁む感がしたのをいつたものであるが、その身に沁む理由を思つて、我も月と同じく旅の空の身で、さみしさに心が澄んでゐるので、月の澄んだ光がこのやうに身に沁むのだらうと思ひ、月の方を主とし、我の方は從とし、餘情とした形でいつてゐるのである。この歌では月と我とあはれをとほして心が通ふものとしていつてあつて、一六四以下三首の歌に見える歌とは趣の異つたものとなつてゐる。調べも細く、しみじみとして、その際の氣分を傳へるものとなつてゐる。西行の持ち味の出てゐる歌といへる。

世をのがれて伊勢の方へ罷りけるに、鈴鹿山にて

（一七五）　鈴鹿山うき世を餘所にふりすてていかになりゆく我が身なるらむ

「鈴鹿山」は、歌の上では、三句の「ふり」へ、鈴を振るの意でかかつてゐる枕詞となつてゐる。「うき世を餘所にふりすてて」は、憂き世を、關係のないものとして捨てて、出家の意。「いか

になりゆく」は、末は何のやうになつて行くで、「なり」は「鳴り」の意で、「鈴」の緣語。「なるらむ」の「なる」も同樣。

うき世を關係のないものと、鈴鹿山の鈴のふり捨てて、この末、何のやうになつてゆく我が身であらうか。

出家をして、これまでとは生活も世界も一變したところから來る心細さをいつたものである。心は眞實なものである。詠み方は、今越えようとする鈴鹿山を捉へて枕詞とし、更に「なり」、「なる」なる緣語をも捉へて組立てた、可なりまで技巧的のものである。それにしては調べがしめやかなので、技巧のいや味をそれ程までには思はせないものにしてゐる。

內宮にまうでて、月を見てよみ侍りける

(一七三五) 神路山月さやかなるちかひありて天の下をば照らすなりけり

「神路山」は、內宮のある所の山で、それによつて內宮を暗示したもの。「月さやかなるちかひありて」の「月」は、眼前に見てゐるそれによつて、神の稜威を現はしたもの。「ちかひありて」

は誓があつて。誓は、佛が衆生を救ふ誓を立ててゐるといつてゐる、その延長の心ととれるものである。「天の下」は、天下を譯した詞。

神路山の月が、さやかに耀く誓、があつて、あまねく天の下を照らしてゐるのであるよ。

神路山の上に照つてゐる月の、廣く涯なく照り渡つてゐるのを見て、その月の光によつて稜威を現はし、又その光の廣く涯のないのを、國家の意に轉じさせて、神を讃へたのである。「天の下をば照らす」といつてゐるので、國家全體の神としてゐる意は明らかではあるが、神佛混淆時代の、單に宗教的の心をもつて讃へてゐる感の伴つてゐるのは、時代の爲といはなくてはならない。

東の方へ、あひ知りたる人のもとへ罷りけるに、さやの中山見しことの、昔になりけるを思ひいでられて

（一七）年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山

「年たけて」は、年老いて。「思ひきや」の「や」は、反語、「命なりけり」は、命があつた爲なのである。「さやの中山」は、駿河。歌枕となつてゐた所。

年老いて、再び越えようと思つたらうか。思はなかつた。命があつた爲なのである。さやの中山や。

誰にでも直ちに頷き得られる感慨である。強く、躍つた心をもつて詠んでゐることが、その調べでわかる。殊に四五句の飛躍にそれが現はれてゐる。事としていへば結句の「さやの中山」は上の句にあるべきであるが、心を主とする所から結句に置いたのである。その爲、さやの中山の山中にあつて、感の發するままに詠んだものといふことが暗示される形となり、感が深まつてゐる。老いて身世を大觀した歌といふ重量をもつてゐる。

あづまの方(かた)に修行し侍りけるに、富士の山を見てよめる

（一七八） 風に靡く富士の煙の空に消えて行方(ゆくへ)も知らぬ我が思ひかな

「風に靡く富士の煙の空に消えて」は、當時の歌には富士を活火山として、煙を吐いてゐることを詠んだものが多い。事實であつたか、歌の傳統からいつてゐるのかは問題であるが、西行のこの歌など、目に見てゐるものとしていつてゐる。吹く風に靡く富士の噴煙が、空に薄れて消えての

意。此の三句は、「行方も知らぬ」の序詞となつてゐる。上からの續きは、煙が「消えて」、「行方も知らぬ」樣になると續いてゐるが、その「行方も知らぬ」は、結句への續きは、「我が思ひ」の狀態に轉じてゐるのである。それで、上三句は、「行方も知らぬ」の同語異義を生み出す爲の單に音樂的のものであるが、同時にそれに意味も持たせて、眼前の寫實としてゐる。卽ち序詞であつて敍景をも兼ねたものとなつてゐるのである。「行方も知らぬ我が思ひ」は、行方も知られない、卽ち無くなつてしまつた我が嘆きの意。

風に靡く富士の噴煙の空に消えて、行方も知られなくなつた、それではないが、同じく行方も知られなくなつた我が嘆きであるよ。

富士の噴煙の風に靡いて空に消えてしまふのを眺めてゐると、平生の我が嘆きも消えてなくなつてしまつたといふので、自然の佳景の爲に、忘我の境に入り、恍惚とした心をいつたものである。此の自然の中に融け入る如く感じたといふのは、西行に特有な心持で、調べの力がその實際であることを感じさせるが、序詞で同時に敍景であるといふ上三句の技巧は、この時代から新古

今時代へかけて盛行した修辭法で、西行も時代風にしてゐるものと見える。全體としては、やや平面的な感をさせる歌である。

陸奥(みちのく)に罷りけるに、野中に、常よりもと覺しき塚の見えけるを、人に問ひければ、中將の御墓と申すはこれが事なりと申しければ、中將とは誰(た)がことぞと又問ひければ、實方(さねかた)の御事なりと申しける、いと悲しかりけり。さらぬだに物あはれに覺えけるに、霜枯の薄ほのぼの見え渡りて、後に語らむも詞なきやうに覺えて

817（二九）朽ちもせぬその名ばかりをとどめ置きて枯野の薄形見にぞ見る

「常よりもと覺しき塚」は、普通よりも稍大きく思はれる塚。「實方の御事」は、一條天皇の御代、中將藤原實方が、勅勘を蒙つて陸奥に貶せられ、その地で薨じたこと。「後に語らむも詞なき」は、後に至つて人に話さうにも、傳へ得る詞がない意で、いひかへると、あはれさが胸に餘つて。

朽ちない、即ち消えないその名だけを世に殘して、枯野の薄を、その人の形見として見ること

である。

詞書は、例の紀行となつてゐるが、此の歌に取つては必要なもので、餘分な所のないものである。歌は、一に調べによつて生きてゐるものである。細く、靜かに、うるほつたもので、西行のその時の氣分を傳へてゐるものである。「形見」といふものは當時は今よりは重く、その人の身代りの意を持つてゐたので、枯薄に對して感じたあはれは、深いものだらうと思はれる。

關（白河）に入りて、信夫（しのぶ）と申すわたり、あらぬ世のことに覺えてあはれなり。都出でし日數思ひつづくれば、霞と共にと侍ることの跡たどるまでに來にける。心一つに思ひ知られてよみける

(一八〇) 都出でて逢坂越えし折までは心かすめし白河の關

「關」は、歌枕としての白河關で、此の歌はその關に泊つた歌の續きのものである。「信夫（しのぶ）」は、同じく歌枕としてのそれ。「あらぬ世のことに覺えて」は、今の世の事ではない氣がしてで、古へからの歌枕として憧れてゐた所なので、眼の前に見ても、今の物ではないやうな氣がする意。「霞

と共にと侍ることの、跡たどるまで來にける」は、昔、能因法師が、「都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」といふ歌の通りに、我もその跡をたどるやうに、多くの日數を經てここに來たの意。「逢坂」は、山城と近江の國境にある山で、京都から東海道へ向つての最初の關の、此の時代以前はあつた所で、此の當時も、そこまでは京都の續きで、その山を越すと、旅へ來たといふ感のした所。「心かすめし」は、心を掠めたで、輕く心に懸かつた意。それは白河の關は、歌枕として憧れさせてゐる所で、同時に極めて遠隔な夢のやうな感のする所との意を、總括して具象的にいつたもの。

都を出て、逢坂山を越えた時までは、心を掠めてゐた白河の關であるよ。

今、白河の關まで來て、そこのあはれを身に沁めながら、京都にあつてここをと思つた遠い日をしみじみと思ひ出し、そして思ひ出だけをいふことによつて、現在のあはれを餘情としたものである。「都出でて逢坂越えし折までは」と細かくいつてゐるのは、この白河の關が、都にあつて永い憧れであつたことをいふと共に、「折までは」と、「は」によつて對立する他の時を餘情とし、

そしてその時の間の心は、「心かすめし」と對立するものであつたことを餘情として暗示はしてゐる。その心は、絶えず面影に立つ程度のものでなくてはならない。結句の「白河の關」の名詞止が、この餘情に照應して、その心を明らかにしてゐるといへる。詞書に、「心一つに思ひ知られて」といつてゐるが、西行としては深いあはれを獨語の態度でいつてゐるもので、心の實際に即した、そしてその自然の成行きとして飛躍と餘情の多い歌である。心が細く、おのづからなる寂びを持つた、優れた歌である。

陸奥の國にて年の暮によめる

(一八二) 常よりも心細くぞ思ほゆる旅の空にて年の暮れぬる

しみじみした感が流れてゐて、捨て難い歌と思はせる。後の芭蕉の「年暮れぬ笠着て草鞋はきながら」を思ひ出させられる。

入道寂然、大原に住み侍りけるに、高野より遣しける

(一八三) 山深みさこそあらめと聞えつつ音あはれなる谷川の水

「大原」は、京都の近郊。「入道寂然」は、當時歌人として高名だつた人で、西行の心合ひの友。「高野」は、高野山で、西行の修行の爲によく籠つた所。「山深み」は、山が深い故にの意のもの。「さこそあらめ」は、さうもあらうで、山が深いと、水音も烈しく聞える意を餘情としたもの。「音あはれ」は、音がさみしく身に沁みる意。

山が深さに、さうもあらうかと聞えつづけて、音のさみしくも身に沁む谷川の水であるよ。

この詞書のもとに十首の歌が續けられてゐて、初句は一樣に、「山深み」となつてゐる。歌は皆特別な意味をもつたもので、高野山の狀態を知らせようとする意を一方に持つてゐるものと取れる。高野山とはいふが、佛の地としてではなく、單に高山としてその趣をいはうとするものである。卽ち高山の風趣を知らせようとするものである。更にいへば、高野山よりの一種の消息である。特別といふのは此の意である。歌は、聞え續けてゐる谷川の荒い音にあはれを感じたものであると、「あはれ」がやさしいものではないことを示してゐると共に、西行の感激の幅も示してゐるといへる。

（一二二〇）　山深み槇の葉分くる月影ははげしきもののすごきなりけり

「はげしきもののすごき」は、烈しきものにして又凄いの意。

山が深さに、槇の葉を分けてさして來る月の光は、烈しいもので、又凄いものでもあるよ。

常磐木の槇の葉をもつて來る月光に、その澄んでゐる爲の烈しさと、凄さを感じたのである。事としては、月の澄んでゐるのであるが、「分くる」といひ、「はげしきもののすごき」と、誇張を思はせる言ひ方をしてゐるのは、西行の印象の表現だからである。これも「あはれ」なのである。

（一二二一）　山深み窓のつれづれ訪ふものは色づきそむる櫨の立枝

「窓のつれづれ」は、徒然を感じて籠つてゐる、その室の窓。「櫨」は、秋、第一に紅葉するものので、火のやうに眞紅になる。「立枝」は、まつすぐに立つてゐる枝で、細い幹をいつたものとも取れる。

山が深さに、紛れるもののない窓の、その徒然を訪つて慰めるものは、紅葉しそめた櫨の立枝であるよ。

山の秋の印象をいつたもので、感激を持つていつてゐるので、印象があざやかである。「訪ふもの」と「櫨」を擬人していつてゐるが、「つれづれ」との照應で、合理的な、自然なものに感じられる。

（一八五） 山深み苔の筵の上にゐて何ごころなく啼く猿かな

「苔の筵」は、苔の狀態が筵を敷いたやうに見えるところからの成語。「何ごころなく」は、猿が人を見ても怖れることも知らず、平氣にの意。

山が深さに苔の筵の上にゐて、人を見ても平氣に啼いてゐる猿ではあるよ。

山中の趣としていつてゐるだけのものである。「何ごころなく」が歌を生かしてゐる。

（一八六）山深み岩にしたたる水とめむかつがつ落つる栃拾ふ程

「水とめむ」は、水の流れに附いて行かう。「かつがつ」は、僅かに。「栃」は、栃の實で、山中では食用にもする物。

山が深さに、岩から涌いてしたたる水の流れに附いて行かう。僅かに落ちてゐる栃の實を拾へる程まで。

山中の趣であるが、これは進んで探す趣である。「水とめむ」は、谷に向つて下つて行くことで「栃拾ふ」は、その「とめ」る程度をいつたもので、すべて實際に卽しての心である。心は細かくはたらいてゐるが、與は童のそれと異らないもので、無意識に西行の面目を示してゐるものである。

（一八七）山深みけ近き鳥のおとはせでもの恐しき梟の聲

「け近き鳥」は、人氣近い鳥で、今は見馴れた鳥といふ程の意。

山が深さに、見馴れた鳥の音はしなくて、するは、恐しい梟の聲であるよ。梟は當時は、荒れた所に棲む、奇怪を聯想させる鳥のやうに思はれてゐた。この歌のそれも、今日より以上の物だつたのである。狀態をいつたのみの歌である。

1225 (一八八) 山深みこ暗き嶺の梢よりものものしくも渡る嵐か

「こ暗き」は、暗き。「梢より」は、梢を。「嵐か」は、嵐かな。

山が深さに、晝も暗い峰の梢を、ものものしい樣に吹き渡る嵐であるよ。

これも狀態をいふだけの歌であるが、「嶺の梢」といふやうな大小の對照を用ゐ、「ものものしく」といふやうな詞をこなして使つてゐるところ、手腕を思はせられる。深みを持つた歌であるが、その深みは西行の感性の強さから來てゐるものである。

1226 (一八九) 山深み榾伐るなりと聞えつつ所にぎはふ斧の音かな

「榾」は、薪。粗朶に當る。「所にぎはふ」は、その所が、賑はふで、大勢の人の働いてゐるのを、離れて、感としていつた詞。

山が深さに、あれは榾を伐るのだと聞え聞えして、その所の賑やかな斧の音であるよ。

大勢の者が斧を使つて榾を伐つてゐる音の、離れて聞くと、そこだけ賑やかなのに興を覺えた心である。外部からの敍述であるが、その一ところ賑やかなのを喜ぶ心が見え、その喜びは、周圍のさみしさと對照される爲だといふことも分つて、餘情が味ひとなつてゐる歌である。實際に即すことからのみ生まれる歌である。

1227 (一九〇) 山深み入りて見と見るものは皆あはれ催すけしきなるかな

「見と見る」は、見る程のの意で、成語。「あはれ催す」は、あはれを催させるで、その「あはれ」は、深山の物の、淸らかにさみしい所から起るものである。「けしき」は、様子。

山が深さに、歩み入つて、見る程の物はすべて、あはれを催させる様子であることよ。

深山の趣を總括しての心である。調べに氣分はあるが、一首の歌として見ると、印象の纏まらない、從つて弱さのあるものである。

しかしこれらの歌の目的である消息の歌として見ると、相手に物ゆかしさを感ぜしめ得るもので、目的には叶つたものといへる。

(一九) 山深み馴るるかせぎの氣ぢかさに世に遠ざかる程ぞ知らるる

「かせぎ」、鹿の異名で、例の少くない詞。

山が深さに、人に馴れた鹿の、身近くも來るので、自分の世の中に遠ざかつてゐる程度が知られることであるよ。

深山の鹿を身近く見ることによつて、反對に、自分の世に遠ざかつてゐることを、今更に知るといふのである。その事よりも、それに對しての意識の方が強く働いてゐる歌で、感激は薄くなつてゐる。しかし消息の歌の旨には叶つてゐようと思はれる。

思はずなること思ひ立つよし聞えける人のもとへ、高野よりいひ遣しける

（一九二）　しをりせで猶山深く分け入らむ憂きこと聞かぬ所ありやと

「思はずなること思ひ立つよし聞え」は、思ひ懸けない事、卽ちその人としては飛んでもない事で、多分は出家を思ひ立つたといふ噂。「しをりせで」は、栞をしなくて、卽ち山路では、行きに、歸りの目じるしにと、木の枝などを折つておく、そんな事もしなくて。言ひかへると、歸らない積りになつて。「猶山深く」は、この上とも山を深くで、「山」は高野。

栞をしなくて、此の上とも山を深く踏み分けて入らう。つらい事の聞えて來ない所があらうかと思ふので。

世間の憂い事の聞えて來ない深山にゐても、やはりそれが聞えて來るので、そんな事の全く聞えない、もつと深山へ入つて行きたいの意で、その人に贈つた消息の歌である。調べが張つてゐて、儀禮の響ではないと思はせるものである。自身、世を厭つて出家してゐながら、他人が同じやうなことをしようとすると、心から悲しみ憐んでゐる心である。西行における佛教の救ひを思

ふより先に、西行がいかに世間に執着を持つてゐたかを思はせられる歌である。その意味で注意させられる。

七、戀の歌

月前戀

（一三五）月見ればいでやと世のみ思ほえてもたりにくくもなる心かな

「いでやと世のみ思ほえて」は、「いで」は思ひ立つことを現はす詞で、「や」は感嘆。「世」は男女の間柄。「思ほえて」は思はれて。「もたりにくく」は、持つて居にくくで、持ちきれなくといふに當る。

月を見ると、いでやと、壓へてゐた男女間のことばかりが思はれて來て、保ちきれなくなつて來る我が心であるよ。

人を思ふ思ひの、物に紛らしてゐたのが、月に對つてゐると頻りに思はれて來て、何うにかしなくてはゐられない思ひに驅られ、保ちにくくなつて來る心であると嘆いたのである。怺へてゐる戀の怺へられなくなつた意では、謂はゆる戀のあはれではあるが、あはれよりは意志の勝つた

ものである。むしろ眞實味で生きてゐる歌である。

（一九四）弓張の月にはづれて見し影のやさしかりしをいつか忘れむ

「弓張の月にはづれて」は、「弓張の月」は月が缺けて弓を張つたやうな形となつた時の稱。光が薄い。「はづれて」は、逸れてで、光を正面に受けず、斜めに、掠める形で受ける意。「はづれ」は「弓」の縁語。「影」は、姿で、女。

弓張の月の光にはづれて、ほのかに見た女の姿の、やさしかつたのを、いつ忘れよう、忘れない。

月の細い頃の夜、ほのかに見た女に對しての憧れの心である。當時はやや身分ある女は、關係のない男に顏を見せるといふことはなかつたので、男からいふと女を見るのは、月影にその姿をほの見るくらゐが頂上だつたのである。この歌は事としては實際を捉へたものと取れる。心としては、細い月に僅かに見たやさしい姿といふので、そこに一脈の艶があつて、それが憧れとなら

せてゐるのである。技巧が過ぎる感はあるが、根本は眞實で、そして率直を失はないところ、西行の歌らしく思はせる。

(一空) 面影の忘らるまじき別かな名殘を人の月にとどめて

「別」は、後影（きぬぐ）の別と取れる。「名殘」は、今は別れ難くする心。「人」は、女。「月にとどめて」は、女がその顔を月光に照らさせて、見送つてゐるのをいつたもの。上の「面影」の説明である。

面影の忘れられまいと思はれる別であるよ。惜しむ名殘を、人は、月の光にとどめてゐて。

相逢つての夜明け、月のある中に男の別れて歸るのを、女は名殘を惜しんで、月光の中に出て見送つてゐる、それを男が振返つて見ての印象である。「名殘」は事であるが、男からいふと、女の「面影」の中に捉へてゐる表情である。別れて、振返つて見た男の眼に映つた、その一瞬間の女の顔だけをいつて、他は一切餘情としてゐるところ、技巧の冴えた、そして細かいものである。

「名殘を人の月にとどめて」は、極めて細かい表情と、夜空の月とが一つに融け合つたもので、感覺ではあるが、深さを持つたものである。

（一九六）　嘆けとて月やはものを思はするかこち顏なるわが淚かな

「月やはものを思はする」は、「やは」は反語。「ものを思ふ」は嘆き。「かこち顏なる」は、かこつける樣子をするで、そのかこつけは、月のせゐとする意。

嘆けといつて、月がもの思ひをさせるのであらうか、させはしない。それを、月のせゐのやうな樣子をして、淚をこぼしてゐることであるよ。

月に對つて、苦しい戀を思出して淚をこぼしてゐたが、自己批評の心を起して、月のあはれさからこぼしてゐるやうだと思ひ、そしてその心に力點を置いて、戀の方は餘情として詠んでゐるものである。謂はゆる戀のあはれであるが、そのあはれは、月と緊密に絡ませることによつて生かされてゐるものである。歌としてはあはれと餘情とが巧妙に扱はれてゐるものであるが、西行

の歌としては、澄んだ、又は鋭い所のないもので、特色の少い方のものである。技巧によつて生かされてゐる歌といふべきである。

160（一六〇） 隈もなき折しも人を思ひ出でて心と月をやつしつるかな

「隈もなき折しも」は、隈もなく、即ち晴れきつた折しもで、「しも」は強め。「心と月をやつし」は、我が心で、月をやつす、即ち見すぼらしいものにするで、人を思ふ涙で、月をよく見えないものにする意。

隈もなく月の晴れた折しも、人を思ひ出して涙をこぼし、我が心から月を見すぼらしいものにしたことであるよ。

前の歌と同じ心を、單純に詠んだものである。「隈もなき折しも人を思ひ出でて」は、偶然のことのやうにいつてゐるが、月光が澄むと、それに誘はれて心も一途になつての意で、そこに必然性がある。そしてこれは餘情となつてゐる。「心と月をやつし」も、詞としては飛躍のある、從つ

て餘情を要求してゐるものである。前の歌よりも手腕は冴えて、それと共に率直となつてゐる。

669 (一九八)　數ならぬ心のとがになしはてじ知らせてこそは身をも恨みめ

「數ならぬ心のとが」は、「數ならぬ」は、人の數にも入らない、即ち卑しい身分。「心のとが」は心の過ちで、人を思ふことを咎、即ち過ちとした意。「知らせてこそは身をも恨みめ」は、相手に思ひ切つて打明けて、いづれは卑しい故に厭はれようが、その上で自分の身分の卑しさを恨みよう。

人の數に入らない身の、心過ちとはしきるまい。おもひきつて打明けた上で、身の卑しさを恨まう。

宮廷を中心としての身分の上下を極めて問題とした時代である。これは戀にも影響してゐた。戀の上では利害關係となつてゐたのである。この歌は、身分の卑い男が高い女を思ひ、問題にはならないと承知し、さうした事を思ひ立つたのを心の咎としてゐたのであるが、それは理智の命じ

ることで、感情としては諦めきれず、懊惱の果てに、同じく諦めるにしても、一應打明けた上でのことにしよう。その上で身の卑しさを恨まうと思立つた心である。大體當時の生活は、感情と理智との調和することを目標とし、感情のみを恣にすることを厭つた。「戀のあはれ」といふのも感情と理智の調和して、それの深まつていつた狀態をいふもので、感情のみに溺れることではない。「戀のあはれ」が悲哀を帶びたものになつてゐるのは、かうした態度でする戀は、悲哀に向ふよりほか行く所がない、自然の成行きなのである。此の歌も、今いふ理智を主としてゐるものである。感情はその上に燃え立つてゐるもので、その物としては強いものであるが、結局は、理智に從はうとして燃えさせてゐるのである。しかし此の範圍での感情とすると、極めて強いものであり、又銳いものでもあつて、言ひかへると世の執着の強いものである。一首の心は題詠として空想したものでもあらうが、それを扱つて行く上には西行の心が現はれてゐると思れる。西行の人柄を思はせる歌である。

（一九九）何となくさすがに惜しき命かな在り經ば人や思ひ知るとて

「さすがに惜しき」は、さうは思ふものの、しかし惜しいで、死を背後に置いての詞。「在り經ば」は、生きながらへてゐたならば。「人や」の「人」は、相手の人。「や」は疑。

何となく、さうは思ふもののしかし惜しい命であるよ。生きながらへてゐたならば、或は相手が、我が心を思ひ知ることもあらうかと思はれて。

片戀の苦しさに堪へられなくて死を思ひ、未練から又思ひ返す心で、心としては、戀の歌の常識ともいふべきものである。しかし調べは、細く、うるほひを持つてゐて、氣分から出たものだと思はせるものである。初句「何となく」は慣用してゐるものであるが、よく利いてゐる。

（二〇〇）身の憂さの思ひ知らるることわりにおさへられぬは涙なりけり

「身の憂さ」は、戀の上で、人に厭はれるつらさで、卽ち片戀のつらさ。「思ひ知らるることわり」は、尤もなことと思ひ知られる道理。「おさへられぬは」の「は」は、對立を示す意の詞で

一方、おさへられるものに對させ、そちらは餘情としてある。おさへられるものは心である。「涙なりけり」は、涙なのであるで、涙を道理に隨はないとしていつてゐる。

我が身の、人に厭はれるつらさも、人から見れば尤もなことだと思ひ知らされるその道理に、心の方はおさへもするが、おさへられないのは、涙なのである。

片戀に終つたつらさにゐて、先方の身になつて見れば、それも道理であると思ひ知らせられて心の方は諦めさせたが、涙の方はそれに伴はずにこぼれるの意である。片戀に嘆きながら、さうさせた先方の身になつて見て、それを尤もと思ふのは、感情ではなく理智である。理智を重んじて、かうした考へ方をするのが、卽ちあはれを知ることだつたのである。あはれを知れば、涙を流しながらも諦めなければならない、それが又あはれなのである。當時の心を詠んだものであるが、身に附いた眞率な表現となつてゐ、又身に附くところから、詞も自然に餘情を持つたものとなつてゐるのである。

（二〇一）　かき亂る心やすめの言ぐさはあはれあはれと嘆くばかりぞ

「かき亂る」は、亂れる。「心やすめの言ぐさ」は、心を休めさせる爲の言ひ草で、我と我を慰める獨語。「あはれあはれと嘆く」は、あゝ、あゝと溜息をする。

思ひ亂れる心を休める爲の言ひぐさは、あゝあゝと溜息をつく、それだけである。

戀の嘆きをいふに、嘆きをする狀態だけをいつて、內容には出來るだけ觸れまいとしたものであるが、その爲に餘情のあるものとなり、あはれを誘ふものとなつてゐる。大體餘情といふものは、詞に屬したものではなく、かうした表現態度を執るところから生まれ來つたものである。餘情としては發生的な、同時に最も效果的なものである。

（二〇二）　今ぞ知る思ひ出でよと契りしは忘れむとての情なりけり

「今ぞ知る」は、今になつて初めてその心が知られるで、戀仲が忘れられて絕えた後の思ひ出をいつたもの。「思ひ出でよと契りしは」は、相手が、我を思ひ出せよといひ、自分も思ひ出すか

らと約束したのはで、「思ひ出でよ」は、忘れるなを積極的にいつたもの。

今になつて初めてわかる。我を思ひ出せ、我も思ひ出さうと約束したのは、今のやうに忘れてしまはうとする上での情（なさけ）だつたのである。

女に忘れられ、關係を絶たれた後の男の愚痴である。女が「思ひ出でよと契」つたのは、その時は僞ではなかつたが、後に何等かの事情で、忘れる、即ち絶えることとなつたのである。男はその當時の女の詞を思ひ出し、思ひ出すといつたのは、豫め今のやうになることを承知してゐての詞だつたと取り、今になつて初めてそれとわかつたと、愚痴をいつてゐるのである。いはゆる情痴の詞であるが、あり得べきものである。技巧的と見える表現にはなつてゐるが、實は眞率なものといへる。

(二〇五)　などかわれ殊の外なる嘆きせでみさをなる身に生まれざりけむ

「殊の外」は、甚しいで、今も口語にいふ。「みさを」は、變らない意で、今は、平生と變らず

卽ち平氣の意。

何だつて自分は、このやうな甚しい嘆きをせずに、平氣でゐられる身に生まれなかつたのであらう。

戀の上で、相手に忘れられた後、甚しい嘆きをしつつ、さうした狀態でゐる自分を性分ゆゑのこととして、その性分を憎んだ心である。理智の心を働かせて、かひのない嘆きはしまいと思ひ更に、してゐる自分を憎んだので、當時に重んじられた態度である。意識して自分の性格を憎むといふ點に、作者西行を思はせられるものがある。

（二〇四）　あはれとて訪ふ人のなどなかるらむもの思ふ宿の荻の上風

「あはれとて」は、氣の毒だといつて。「もの思ふ宿」は、嘆きをして籠もつてゐる家で、その嘆きの種類は餘情となつてゐる。人に慰められることを喜ぶ嘆きは、忘れられた戀のそれよりないと思はせる。「荻の上風」は、荻の上葉を吹く風で、秋の夕暮のもので、さみしさに更にさみし

さを添へるものとされてゐた。
氣の毒だといつて、何だつて訪つて來る人がないのだらうか。歎きをして籠もつてゐる家の、しかも荻の上葉を吹く風の音のする時を。

この物思ひは人には知られないもので、從つて、憐む意味で訪ふ人のないのは當然なものである。しかし、物思ひに加ふるに、秋の夕暮のさみしさがあり、更に荻の上葉を吹く風のさみしさもあると、さみしさに堪へられなくなつて、人の慰めに來ないのを咎める心となつたのである。謂はゆる情痴からの甘え心である。無理が無理でなく通らうとするところのある歌で、いはゆるあはれの深いものである。

戀の歌の中に

(二〇五) 憂き身知るこころにも似ぬ涙かな恨みむとしも思はぬものを

「憂き身知るこころ」は、「憂き身」は人に忘れられたつらい身。「知るこころ」は、それと觀念してゐる心で、即ち諦めてゐる心。「恨みむとしも」は、相手の心變りを恨みようともで、「しも」

は強め。

人に忘れられたつらい身を、それと觀念してゐる心にも似合はずに、こぼれる涙であるよ。その人を恨まうなどとは思つてゐないのに。

二〇一の歌と同じ心のものである。忘れられた者が、忘れた者の心を理解して、諦めて、恨みも持たずにゐるのに、不思議にも涙がこぼれるといつて怪しんでゐる心である。理智を働かせた心で、その究極としてこぼれる涙は、恐らく相手を對象としてのものではなく、人生に對しての涙であらう。これが當時にいふ「あはれ」の高度なものなのである。理智とはいふが、それが生活の中に融け込んでゐて、いはゆる身に附いたものとなりきつてゐることを思はせられる。平坦な物いひをしながら、或る深さがあつて、平凡とはいへないものである。

1681 (二〇六) 疎くなる人を何とて恨むらむ知られず知らぬ折もありしに

「疎くなる」は、戀の上で、心が離れて行く。

我に疎くなつて行く人を、何だつて恨まうとするのであらうか。その人に我の知られず、我もその人を知らなかつた折もあつたのに。

疎くなる相手に恨みを抱きながら、それを理智の力を借りて思ひ返さうとする心である。理智とは、知られず知らぬ折もあつた、それを思ふと、何うならうとも諦めるべきだといふのである。この理智は、世間通の功利的な心に似てゐるともいへようが、人間世界を廣く摑まうとする佛教の心からのものと思はれる。

(二〇七) はるかなる岩のはざまにひとり居て人目つつまで物思はばや

「岩のはざま」は、岩の間で、岩窟の意でいつてゐる。「人目つつまで」は、人の見る目も憚らずに。「物思はばや」は、嘆きをしようで、嘆きは、戀の上のもの。

遙かなる所の岩窟の内に獨りでゐて、人目を憚らずに嘆きをしたい。

戀の嘆きをしてゐる者の、人目につくことを厭つて、その嘆きさへも十分に出來ないところか

ら、せめて人目のない所にゐて、心に足る程嘆きをしたいといふのである。調べが強く、感激の程度を思はせる歌である。戀の上の嘆きを人に見られることを極度に厭つてゐる、此の種の歌は實に多い。何故にこれ程までに厭つたのかと怪しませるまでである。これは當時の社會生活に對する意識から來たものと思はれる。二〇一について云つたやうに、當時、教養があるといふ矜りを持つた人は、感情と理智と調和させた狀態において生活しようとしてゐた。これは第三者から見ると、落着いた、取亂した所のない樣である。當時の人はそれを「樣よき」と稱して、心にくいものとしてゐた。その上からいふと、片戀の爲に取亂し、又忘れられた戀の爲に取亂した狀態は、最も恥づべきものとして、極度に避けようとしたものと思はれる。更にいへば當時の生活樣式はそれが一つの藝術であつて、そして藝術を酷愛する心から、取亂した狀態を、非藝術なものとして厭つたと取れる。社會人としての男子の面目から、戀に取亂した樣子を見せまいとしたのは、それは上代のことであつて、當時の生活にあつては、たとひその心もあつたとしても、聊かのものであつたらうと思はれる。この背景が、此の強い調べを生んでゐるのである。

（二〇八）　有明は思ひ出あれや横雲のただよはれつるしののめの空

「有明は思ひ出あれや」は、有明の月を見ると思ひ出があるで、「有明」は後朝の別を思ひ出させるものとしていつてゐる。「横雲のただよはれつる」は、横雲の如く漂はされたで、「横雲」は、横に靡いてゐる雲で、夜山に沈んだ雲の狀態とされてゐた。それが朝になると動き出すのを漂ふといつて、後朝の別に心の動搖したことの比喩としたもの。「しののめの空」は、相逢つた男女の別れる時刻。

有明の月を見ると、思ひ出がある。その折の横雲の如くにも、名殘惜しさに心の動搖した、しののめの空よ。

名殘の惜しかつた後朝の別を、後から思ひ出した心である。「有明」、「横雲」、「しののめの空」と、その時の自然に深く絡ませて、心の方は漠然と「思ひ出」といひ、「ただよはれつる」といふだけに止どめて、極めて暗示的にしたものである。名殘を惜しむといふ氣分が、自然景象化され

て、生きた、深みのあるものとなつてゐる。西行の表現の手腕を一ぱいに出した作である。題詠としても詠み得られるものであるが、味ひが如何にも深刻である。普通の後朝としては、たとひ濃情な西行としても、心の深過ぎる感のあるものである。何等かの事實を背後に持つての歌ではないかとの想像を、おのづからに起させられるものである。

（二〇九）　人は來で風のけしきのふけぬるにあはれに雁のおとづれて行く

「人は來で」は、待つ人は來ずしてで、その「人」は男であるのが普通だが、女である場合もある。「風のけしきのふけぬるに」は、風の音の様子が、夜更けとなつて來たにで、家の内にゐての感。「あはれに雁のおとづれて行く」は、身にしみる聲を立てて、雁がいへのあたりを過ぎて行く。

待つ人は來なくて、風音(かざおと)の様子も夜更けとなつて來たのに、加へて雁が、身にしみる聲を立てて、家のあたりを過ぎて行く。

いはゆる待戀の心である。いつてゐる所は、秋の夜、待つ人の來ないことを、周圍の自然の方を主としていつてゐるものである。いつてゐる事は、待つ人の來ないわびしさであるが、心としては單なるわびしさではなく、謂はゆるあはれさである。待つ人が來なくて萎れてゐると、秋風の音が夜更けを感じさせるものとなつて、全く待つ見込はなくなつて來たのに加へて、雁があはれに鳴いて、おとづれ顏に過ぎて行くといふので、あはれの重なつてゆく状態をいつてゐるのである。これは當時の、戀を單なる享樂と見ず、あはれを通しての享樂と見、さうした戀だけが價値のあるものと見た、當時の心を餘情としたものである。今の場合も、待つ人が來なくて、一人あはれに浸りてゐるといふことは、わびしさどころではなく價値のあることで、やや誇張していへば、待つ人の來ない爲に味ひ得たあはれさといふ趣のあるものである。これは更にいふと、戀は生活の藝術化の頂點をなしてゐるもので、その藝術はあはれを重んじたものである所から、戀のあはれは、やがて戀の一半であつたといふことを背後にしての心なのである。

(二一〇) 賴めぬに君來やと待つ宵の間は更けゆかでただ明けなましかば

「賴めぬに」は、賴ませずにで、即ち思ひ懸けずに。「君來やと」は、君が通つて來はしないかと。「宵の間」は、男が女の許へ通つて來る時間。

思ひ懸けずに君が來はしないかと待つその宵の間が、夜更けとならずに、そのままに夜明けとなつたならば。

女が、男の通つて來るのを空想して、待つ身の樂しい時間を味ひ、この時間がこれだけで終つて、直ぐに朝になつてくれれば好いと空想したのである。即ち飽くことを知らない戀の上で、都合の好いことばかりを空想した心である。更にいへばこれは、戀の享樂といふことではなくて、戀を情趣として樂しむ心で、謂はゆる戀のあはれの一面である。一首を言ひさしにして、嬉しからましといふ心を餘情にしてゐる所も、心に適當した、心にくいものである。實際に即した歌である。

1292（三二一）逢ふまでの命もがなと思ひしはくやしかりけるわが心かな

「逢ふまでの命もがな」は、單に懸想であつた頃、その惱みの爲に命も絶えさうに感じ、せめて逢ふまでの間（あひだ）の命をほしいと思つた意。「くやしかりけるわが心」は、淺はかなわが心で、逢ふと愛着の爲に新たな惱みを持つて、今度はその爲に死にさうに感じることを餘情としての詞。せめて逢ふまでのあひだの命をほしいものだとおもつてゐたのは、淺はかであつた我が心であるよ。

逢ひ難く見えた戀が叶つて、相逢ふやうになつた後の男の心である。戀の惱みを中心として、總括的に、時の推移をいつたもので、從つて餘情の多いものである。説明的に感じさせやすい心を、その感を起させないものにしてゐるのは、調べがうるほひを持つて、氣分の具象となつてゐるからである。その點に手腕を思はせられる。

1300（三二二）あはれとて人の心の情（なさけ）あれな數ならぬにはよらぬ思ひを

「あはれとて」は、あはれと思つてで、「あはれ」は今は、懸想してゐる男の心に、女が感じての心。好惡の問題ではなく、同感すべきものとしての心。「人」は、男より見ての相手の心。「情」は、「あはれ」の現はれ。「數ならぬによらぬ」は、人の數ではない、卽ち身分の卑しいといふことには、拘はりのない。

あはれだと思つて、その人の心に情があつてくれよ。身分の卑しいといふことには拘はりのない思ひであるものを。

身分の卑しい男が、その高い女に懸想しての嘆きである。單純に、率直に、強い調べをもつていつてゐるので、背後の感激を思はせられるものである。階級意識の強かつた時代を示してゐる歌で、例の少くないものである。身分の卑しい男が、「あはれ」を楯に取つて、自分を主張してゐる所が注意される。

1321 (三二三)　こととへばもて離れたるけしきかなうららかなれや人の心の

「ことゝへば」は、物をいへば。「もて離れたるけしき」は、かけ離れたで、此方のいふ事を、意識的に逸らして、手の附けられない様子をする意。「うららかなれや」は、爽やかにあれよ。「人」は、相手にしてゐる人で、女をさしてゐる。

物をいふと、かけ離れた、手も附けられない様子をすることであるよ。爽やかであれよ、人の心が。

男の様子に、警戒を要するやうにする女を、男が苦々しく思つた心である。若い頃に、親しい仲間から打明け話の一節を聞かされたやうな感のする歌である。歌としてはそれ程のものではないが、西行の作歌の動機を示してゐる一首として興味がある。

(三四)　君慕ふ心のうちはち兒めきて涙脆にもなるわが身かな

「ち兒」は、乳飲兒。「涙脆」は、涙をこぼしやすいで、直ぐ泣きたがる意。

君を慕ふこころの中は、何うやら乳飲兒のやうで、直ぐ泣きたくなるやうになつた我が身であ

るよ。

男の戀の歌としては珍らしく純粹なものである。理智的な、又複雜なことを好んで詠む西行であるが、一方にはかうした所があるのである。複雜からは此の單純は生まれないが、その反對はあり得る。西行の本性はかうしたものではなかつたかと、此の種の歌が他にもあるので、合せて思はせられる。

（三三五）　人知れぬ涙に咽ぶ夕ぐれは引被きてぞ打臥されける

「人知れぬ涙」は、人に知られない涙、即ち隱しての涙で、戀の上のもの。「引被き」は、夜の物を被つてで、人目を避ける爲と、「夕暮」のさみしさに堪へない爲のしぐさ。

人に知られない、忍んでの涙に咽ぶ夕暮は、夜の物を被つて臥させられることである。

前の歌ほど單純ではないが、根本は近いものである。何れも、實感の衝迫がないと詠めない種類のものである。西行の本性を思はせられるところがある。

（三六）さもこそは人目思はずなりはてめあな樣にくの袖のけしきや

「さも」は、然もで、現在口語でいふ「さぞ」に當る。「こそ」は强め。「人目思はずなりはて」は、人の見る目を憚らないやうに、變つて行つてしまふ。「樣にくの袖のけしき」は、態の惡い袖の樣子で、涙でひどく濡れてゐることを評した詞。

さぞかし、人の見る目も憚らないやうに變つて行くことであらう。今でも、態の惡い袖の樣子ではあるよ。

戀の懊惱から、甚しく涙を流して、袖を濡らしてゐるのに心附いて、今はまだ人目を憚つて、人の見るところでは涙などこぼさずにゐるが、これだと、人目も憚らないやうになりさうだと、不安を感じた心である。その不安は、この歌の「樣にく」を人に見られることを厭ふところからのものである。今日から見ると此の歌の心は、或る誇張を持つたものに聞えるが、當時の生活にあつては實感であつたらうと思はれる。調べに懊惱の氣分がある。

（三一七）かつ濯ぐ澤の小芹の根を白み清げに物を思はずもがな

「かつ濯ぐ」は、摘みながら濯ぐといふ意。「小芹」は、芹。「根を白み」は、根が白くて。初句から三句までは、「清げ」に懸かる序詞。それは、「白み」も「清げ」も、ここでは意味が同じなので、繰返しの關係で懸かるのである。「清げ」は「清く」といふと同じ意味で用ゐてゐる。本來は清さうにであるが、それでも通るとして用ゐてゐると取れる。「清げ」は、さつぱりとしてで、戀の惱みに捉へられてゐる心と對蹠的な意味でいつたもの。「物を思はずもがな」は、嘆きをしたくないものである。

摘むと共に濯ぐ澤の芹の、根が白くて、清い、その清げな心になつて、嘆きをしずにゐたいものである。

序詞によつて生きてゐる歌である。この序詞は、實際を捉へた形のものである。即ち野澤に芹を摘んでゐる時の心で、澤の芹は摘むと共に根の泥を澤水で濯ぐ、すると忽ち白くなる、その白

さをほぼ同意義の清げに延長したものと取れる。心理的にいふと、戀の惱みを持つてゐる折柄、根芹を摘んでゐると心が明るくなつて、かうした心でゐたいと思つたので、眼前の狀態を序詞にさせたのだといへる。尤もこれは餘情としてである。本來この序詞は、序詞といふより比喩に近いもので、理詰めの趣のあるものである。序詞の形としたのは、その方が餘情的になるとして選んだものと思へる。

(三八) いかさまに思ひつづけて恨みましひとへにつらき君ならなくに

「恨みまし」は、恨むとするならば恨まうの意で、上に假定を持つたものである。

何のやうに思ひ續けて、恨むとならば恨まう。ひたすらにつらい君ではないことであるに。

初句から三句までは、大體としては恨まうとは思はないが、しかし恨んでも見たい氣がしないでもないといふ、極めて微細な程度をいつてゐるものである。これは戀その物が、或もどかしさ焦れたさを感じさせるものである所から、それについていつてゐるのである。四五句で條件を附

けてゐるのもその爲である。實感がなくてはいへないものである。生きてゐるといへる。

八、雜の歌

題しらず

（三一九） 古畑のそばの立つ木にゐる鳩の友呼ぶ聲のすごき夕暮

「古畑」は、荒れた畑で、今は何も作つてはない、卽ち收獲後の畑と取れる。「そばの立つ木」は、側に立つてゐる木。「夕暮」は、「古畑」との關係で、秋と取れる。

荒れ畑の側の立木にゐる山鳩の、友を呼ぶ聲の凄く聞える夕暮であるよ。

秋の夕暮、收獲後の畑の續いてゐるあたりで見懸けた光景である。中心は「夕暮」で、本來さみしい時とされてゐる、それが今は、鳩の聲によつて凄く感じさせられるのである。山鳩の聲は、その物として凄いといふ程のものではない。今は「夕暮」のさみしさによつてさうした感を起させるものとなつてゐるのであるが、何よりも西行自身の主觀がさう感じるのだと取るべきである。その點からいふと、「古畑のそばの立つ木」といふ荒涼たる境に、群居を習ひとする鳩の

一羽だけゐて、友を呼んで啼いてゐるとして、それをさみしい秋の夕暮の中に捉へ直して「凄き」といつてゐるのである。その上からいふと、都戀しく人なつかしい西行が、田舍の秋の夕暮の中に立つて、鳩に自身の心を感じ、その爲にさみしい夕暮を、さみしい以上の「凄き」ものに感じたものと解される。これは一首の中心が「夕暮」であるところから思はれることである。素材は單純であるが、さみしく涯しのない山里の秋の夕暮に、鳩の聲の凄さを帶びて啼いてゐる感が、無理なく通るものとなつてゐる。不思議な深さを持つた歌である。

994
（三〇）山里は谷の筧の絕え〲に水こひ鳥の聲聞ゆなり

「絕え〲」は、水の細い意。「水こひ鳥」は、斑鳩(いかるが)の類で、群居して、溪流に下(お)りて好んで水を飮む鳥。

山里は、谷に引いてある筧の水も絕え〲で、その水を飮みに來た水こひ鳥の鳴く音(ね)の聞えることであるよ。

山里に庵を結んでゐた時の印象と取れる。落着いた、靜かな氣分が、事と調べと一つになつて一種の魅力を持つたものとなつてゐる。

1425 (三二) 並びゐて友を離れぬ小雀めの塒にたのむ椎の下枝

「友を離れぬ」は、小雀は、夜眠るにも、雌雄翅を交してゐるといふ習性を持つてゐる。それをいつたもの。「小雀め」は、今は小雀といつてゐる。小鳥で、山雀に似てゐる。

いつも並んでゐて、友と離れずにゐる小雀の、塒と頼んでゐる椎の下枝よ。

小雀が、椎の下枝を塒として、その習性で雌雄翅を交して、とまつてゐるのを見ての歌と取れる。小さい鳥の友なつかしくして離れずにゐる様と、椎の下枝といふ、それにふさはしい塒とに、小さい物に對する憐みと親しさとを感じての歌である。西行としては、やや感激の稀薄な歌であるが、その心持は感じられて、捨て難い作である。

題しらず

（三三二）　身にしみてもの荒らげなるけしきさへあはれをせむる風の音かな

「もの荒らげなるけしき」は、荒い樣子で、秋から冬へ亘つての風。「あはれをせむる」は、あはれを感ぜよと迫つて來る。

身に沁みる上に、荒い樣子に聞えるのまでも、あはれを感ぜよと迫る風の音ではあるよ。

秋風を聞いてゐての感と取れる。秋風が身に沁むものであるのに、加へて荒い音までも持つてゐて、聞いてゐると、あはれを感ぜよと迫つてゐるやうだといふので、秋風によつてあはれを催されるのではなく、本來あはれを感じようとして、秋風をその刺戟の一つと見、そして刺戟の强い狀態を呈してゐるのを喜んでゐる心のものである。當時の敎養ある階級の心の、西行に持たれてゐるものを語つてゐる歌である。

（三三三）　訪ふ人も思ひ絕えたる山里のさびしさなくば住み憂からまし

「訪ふ人も思ひ絕えたる」は、尋ねて來る人までも、思ひきつてゐる、卽ちつまらなさに諦め

てゐるで、「絶え」は「人」の縁語。「さびしさなくば」は、多分は冬の山里で、慰めとなるべき何物もなく、あるものはさびしさだけだとし、もし此のさびしさもなかつたならば。

尋ねて來る人までも、今は思ひきつてゐる冬の山里の、もし此のさびしさがなかつたならば、かうして我が住んでゐるに、住み憂いことであらう。

冬の山里に、ひとり、さびしさを相手として住んでゐての心で、もし此のさびしさがなかつたら住み憂からうと思ひやつた心である。「さみしさなくば住み憂からまし」といふことは、常識からいふと一見矛盾した、わかりかねるやうに感じられるが、西行からいふと問題とはならない自明なことであつたらう。それは本來は西行もさびしさを好む人であつたとは思はれないが、佛道を修めようと志し、それには第一に、周圍の刺戟によつて散亂させられる心を集中させる必要を感じ、その時には身を刺戟のない境に置かうとしたので、さびしさとはその必要を充す境なのである。時にはさびしさが反つて刺戟の強過ぎるものとなり、負擔にも感じたのであるが、大體はさびしさによつて心を緊張させてゐ、その喜びを味つてゐたことゝ思はれる。即ちさびしさを

重んずるのは、さびしさその物が好ましいのではなく、さびしさによつて與へられるものを無上のものとしたからである。今はそれを表面的にいつたものと取れる。落着いた、安らかな調べを持つた歌である。この心が自然なものに感じられた時の歌と思はれる。

955 (三四) 曉の嵐にたぐふ鐘の音を心の底にこたへてぞ聞く

「嵐にたぐふ」は、嵐に伴つて來るで、嵐に運ばれてくる意。

曉の嵐に伴つて來る寺の鐘の音を、心の底に沁みさせて聞くことである。

「曉の嵐」は、曉に吹く嵐で、下の「鐘の音」の關係で、山から吹きおろして來るものと取れる。いはゆる秋の木草を枯らす嵐で、嵐はあはれの深いものである。それに運ばれて來るのは山寺の曉の鐘の音で、そのあはれはいふまでもない。この二つのあはれの一つになつた音を、「心の底にこたへてぞ聞く」といふのは、あはれを身に沁めて聞く意である。餘情によつて生きようとする歌である。

（二三五）　待たれつる入相の鐘の音すなり明日もやあらば聞かむとすらむ

「待たれつる入相の鐘」は、「入相の鐘」に、佛者としての往生の心をも持たせ、その時が待たれて來たとの意を持たせたもの。「明日もやあらば」は、若し明日といふ日が我が上にあつたならばで、大法に身を任せた心のもの。

待たれて來た入相即ち往生を示す鐘の音が聞えることであるよ。もし明日といふ日が我が上にあつたならば、聞かうとすることであらう。

佛者として死生を超えた心を持ち、安心して往生の日を待たされて來た、その往生を意味する入相の鐘を聞いてゐる感である。四五句は、往生が明日に延びたならば、明日にしようといふので、「や」の疑を入れていつてゐるのは、一に大法にゆだねて私意を挾まない意を示してゐるものである。晏如としたところと共に緊張を持つた、かうした心にふさはしい調べの歌である。

雜の歌

嵯峨に住みけるに、たはぶれ歌とて人々よみけるを

1955

（三六）小竹(しの)ためて雀弓はる男(を)の童(わらは)ひたひ烏帽子(えぼし)のほしげなるかな

「たはぶれ歌」は、誹諧歌の意である。「人々よみけるを」は、大勢が詠んでゐるのを見てで、自分も詠んだの意。「小竹ためて」の「しの」は、「篠」で、篠の性質として群生してゐる所で、そこに雀がとまつてゐることが、「雀弓」でわかる。「ためて」は、今も口語でいつてゐる、覘(ねら)ふ意。「雀弓はる」の、「雀弓」は、雀を射る弓。「はる」は、張るで、弓を張る意。「ひたひ烏帽子」は、賤民、又は童のしたもので、額の所に着ける小さい烏帽子。

篠を覘つて、雀弓を張つてゐる男の童の、額烏帽子のほしさうな様子であることよ。

男の童の勇ましげな恰好をしてゐるのを見て、可愛らしさを感じ、額烏帽子をしてゐない、させて、もつと引き立たせてやりたいと思つた心である。西行は小さなもの、愛らしいものが好きで、さうしたものを詠んだ歌が可なりある。これもその類のものである。

1958

（三七）入相の音(おと)のみならず山寺は文(ふみ)讀む聲もあはれなりけり

「文讀む聲もあはれ」の「文」は、「山寺」のことであながち經文と取れる。「經」といはないのは、「あはれ」が暗示してゐるやうに、童の稽古の物で、佛前のそれではないからと取れる。「あはれ」は、身に沁むといふ意で、幼い聲で讀むのが、殊勝に聞えるところからいつてゐるものと取れる。

入相の鐘の音ばかりではなく、山寺は、童の稽古の爲に讀む經の聲までも身にしむものであるよ。

前の歌と同じく、小さい者をあはれむ心からのものである。單純な材で、說明的にいつたものであるが、その場の光景が眼に浮ぶ歌である。調べの力と思はれる。

百首の歌の中、雜十首

(三六) 友になりて同じ湊を出づる船の行方も知らず漕ぎ分れぬる

「友になりて」は、一しよになつて。「行方も知らず」は、何所へ行くのかも分らず。

一しよになつて、同じ湊を漕ぎ出した船が、沖へ來ると、それらの船が何處へ行くかも分らず

に漕ぎ別れることよ。

港を出た船の、沖で感じるあはれである。旅の宿でのこのあはれは、誰も感じさせられるものであるが、それが海の上の船であれば、一層深いことが思はれる。まして當時の航海では、心細さを通してあはれが深かつたことと思はれる。

（三元）さまざまのあはれありつる山里を人に傳へて秋の暮れける

「さまざまのあはれ」は、いろ〳〵の身に沁むことで、下の「山里」における生活の上での感銘。「山里を」は、修行の爲に籠つた山里の、そこでの庵で、庵は餘情となつてゐる。「人に傳へて」は、その庵を人に讓つてで、「人」は、同じく修行者で、「傳へて」は、庵を道場と見る上からの詞。「秋の暮れける」は、最もあはれの深い時としていつてゐる。

いろ〳〵の身に沁むことのあつた山里の庵を、同じ志をもつて籠らうとする人に傳へて、秋も暮れたことであるよ。

庵などは、今も同じ心の人が、繼ぎ〳〵に住むものにしてゐる。此の歌も、西行の一時籠もつてゐた山里の庵を、他の人に傳へたが、折柄秋の暮れで、西行としては、その庵での來し方を今更に思ひ出させられ、折柄の秋の終りのあはれを目にして、あはれが取集めて感じられたと見える。靜かに、心を抑へていつてゐる、それが調べとなつてゐて、際立つた所はないが、心を捉へる力のある歌である。

（三四〇）　波高き蘆屋の沖を歸る舟の事なくて世を過ぎむとぞ思ふ

「蘆屋」は、大阪灣の一部で、歌枕となつてゐた。「歸る船の」は、沖から濱へ歸る船の如く。「事なくて」は、無難に。

波の高い蘆屋の沖から、濱へ歸つて來る船のやうに、我も無難に此の世を過ぎたいものだと思ふことだ。

蘆屋の里での實感と思はれる。普通の人情に過ぎないものだが、率直に、思入つていつてゐる

ので、感のあるものとなつてゐる。佛道修行も、要するに「事なくて世を過ぎむ」願ひからのことである。危い海を渡る船を見て、身世を思はせられたのは、たとひ佛者とはいへ當然のことである。

讃岐へおはしまして後、歌といふことの世にいと聞えざりければ、寂然がもとにいひ遣しける

1250

(三三一) 言の葉の情(なさけ)絶えぬる折ふしにあり逢ふ身こそ悲しかりけれ

「讃岐におはしまして後」は、崇德院が讃岐に御遷幸になつて後は。「歌といふことの世にいと聞えざり」は、歌の勅撰といふことが、世間の噂に全く上らない。「言の葉の情」は、歌を言ひかへたもの。「情」は、趣の意で、今は、歌の事の意で、勅撰といふことを暗示したもの。「絶えぬる折ふし」は、連綿と續いたことの、世情の爲に中絶してゐる折柄で、歌の勅撰は、帝(みかど)御一代の盛事として行はれたことで、泰平の御代をも語ることであつた。「あり逢ふ身」は、生まれ合せた身。

歌の趣のあらはれる勅撰の御事の中絶した折柄に、生まれ合せたこの身は、それが何よりも悲しい事であるよ。

勅撰和歌集といふものが、當時何のやうに思はれてゐたか、又歌人をもつて任じてゐる西行や寂然などが、勅撰の作者といはれることをいかに重大なことに思つてゐたかが窺はれる。出家の身でも、歌にはこれだけの關心を持ち、又それを矜りともしてゐたと見える。西行としては、その歌人といふことは、法師といふことには較べられない重大なことだつたと見える。

古さとの心を

(二三二) 野邊になりてしげき淺茅をわけ入れば君が住みけむ石ずゑの跡

「心を」は、あはれをに近く、それを詠むで、題詠の意。「石ずゑの跡」は、礎石の意で、礎のある、家の跡といふ意で、續いての感嘆が略されてゐる。

古さとは野と變つて、そこの繁く生えてゐる淺茅を分けて入ると、君が住んでゐた跡の礎があることよ。

古里のあはれとしては、自分自身のことよりも、自分より貴い人の方が、その荒廢に對してのあはれが深い。又、そこに何もないよりも、聊の物のある方が却つてあはれが感じられる。この歌はさうしたあはれを集めたものである。題詠ではあるが、實感味の感じられるのは、當時かうしたことは眼前に幾らもあつたからであらう。

行基菩薩の何處にか身を隱さむと書き給ひたる事思ひ出されて

(二三三)　いかにせむ世にあらばやは世をも捨ててあな憂の世やと更に思はむ

「いかにせむ」は、何うしようで、思ひ迷つての心。「世にあらばやは」は、「やは」は疑で、「や」と同じで、もし普通の世間にゐる身であつたならばに、「やは」の添つたもので、この「やは」は、意味としては、初句へ續く。「更に思はむ」は、改めて思はう。

何うしようか。もし世間にゐる身であつたならば、かうした時には世間を捨てて、ああ憂い世の中だと、改めて思ふだらう。

出家をして、世間の憂さからは離れたはずの身になつた後、さうした身分にも拘らず甚しく憂

いことのあつた時の心で、こんな時には、もし以前のやうに世間にある身ならば、これを機會に世間を捨てて、ああ憂い世間だと改めて思はうといふので、世の憂い時には、厭つて捨てることによつてそれから脱れられるが、既に出家の身の今には、それも出來ないと當惑した心である。混迷した心を披瀝したものであることが、一首の調べで感じられる。出家後、時として持つた西行の心境を窺はせる歌である。

　寂蓮法師、人々すゝめて百首歌よませ侍りけるに、いなびて熊野へ詣でける道にて夢に、何事も衰へゆけど、この道こそ世の末に變らぬものはあれ、なほ此の歌よむべきよし、別當湛海、三位俊成に申すと見侍りて、驚きながらこの歌を急ぎ詠み出して遣しける

(二三四)　末の世もこの情(なさけ)のみ變らずと見し夢なくば餘所に聞かまし

「いなびて、熊野へ詣で」は、斷つて、紀伊の熊野へ參詣に行く。百首歌は、力量ありと認められてゐた人のすることになつてゐた。それを勸めた寂蓮は、當時高名な歌人の一人(ひとり)である。そ

の事から見ても、その人からいつても、斷る方が不自然に見えるものである。西行はそれを斷つて、熊野へ詣でたといふのは、本意は歌にはない、佛道であるとの心からのことと思はれる。しかしこれは、西行の歌を通讀すると、當つてゐないことである。逆てさうした所に、西行の氣むづかしさの見えることである。「世の末に變らぬものはあれ」の、「世の末」は末世の意。佛典に、世が移つて末世即ち惡い時代が來るといひ、大體その時を指してゐる。この時代は、その時に當つてゐた。一方、京都に未曾有の戰亂もあつたので、一層それを信じて、絕望的になつてゐたのである。末世にも變らない、即ち惡くならないものは、歌だけであるの意。「別當湛海、三位俊成に申す」は、熊野の別當の僧湛海が、三位の藤原俊成にいふで、俊成は當時の歌界の權威となつてゐた。「驚きながら」は、目が覺めながらで、覺めるか覺めないに。「この情」は、言葉の情で、歌の意。

末世でも、この言の葉の情即ち歌だけは變らないと見た、その夢がもしなかつたならば、百首歌のことは、無關係のことに聞いたであらう。

西行といふ人の、いかにも氣むづかしく、神經質で、そして人の良かつたことを語つてゐる詞書である。氣むづかしさは上に云つた。神經質なのは、見た夢であるが、さうした夢は、斷つた百首歌のことが餘程氣になつてゐた爲のものと取れる。「別當湛海」が見えたのは、歌は神佛の嘉みしたまふものとなつて、信心に關係のあるものとなつてゐた爲で、又「俊成」は、歌人の代表者としてであらう。夢ではあるが合理性を持つたものである。「驚きながら、急ぎよみ」は、西行の善良さを思はせるものである。歌は挨拶代りのもので、一と通りのものであるが、三四の句は、斷りを取消すにつけても、理窟をつけ、甘くはない意を見せたもので、西行の負けじ魂を示してゐるものである。

　　寂覺がもとに、俊惠と語り合ひて、述懷し侍りしに

(二三五)　何事にとまる心のありければ更にしもまた世の厭はしき

「何事にとまる心」は、何ういふ事に執着する心で、その「事」は、世間の事。「更にしもまた」は、今更に又で、「しも」は强め。

世間の何ういふ事に執着する心のあるので、今更に又世間が厭はしく思はれるのであらうか。

素覺も俊惠も僧で、それに西行も加はつて、世間話もしたことと思はれる。第三者の立場に立つて、かうした人達が世間話をしたら、不平が起るにきまつてゐる。西行はその不平を怪しんで、世を捨てた身には、何の執着もないはずで、執着がなければ不平も起らないはずである。何事に執着があつて、この不平であらうと、我と我を怪しんだのである。理智的な心を働かせて自己批評をしたのである。西行の心境の程度を、我と語つてゐるものである。

題しらず

(二三六) いづくにも住まれずばただ住まであらむ柴の庵の暫しなる世に

「柴の庵の」は、「柴」を「暫し」の「暫」と同音の繰返しで懸けた序。

何處にも住まれないならば、いつそ住まぬことにしよう。暫らくの間(あひだ)の世だのに。

「いづくにも住まれずば」は、修行者として諸所を移住したのを背後に置いての詞であらう。それだと「住まれずば」は、假定としていつてはゐるが、住んでゐられないといふのではなく、

住み憂い、即ち主觀的に感じてのことと取れる。その意味の住み憂いのは、西行の孤獨に堪へない意を多分に持つたものである。「暫しなる世」は、消極的の意味でいふのではなく、生命を限りないものと觀、現世はその一部に過ぎないものとしてゐる、佛教の意でいつてゐるものである。住み憂くて、或る所の「柴の庵」を捨てようとする際の心と取れるが、大體は思想味の勝つたものである。

老人述懷

1717（二三七）　ふけにける我が身の影を思ふ間にはるかに月の傾きにける

「ふけ」は、老い。「影」は、月に映し出される影法師。

老いた我が身の影法師を見て物を思つてゐる間に、映し出した月は、遙かに西へ傾いたことであるよ。

ただ一人、月の漏つてさし入る室に坐つて、ものに映し出される影法師の老いたのを相手に、物を思はせられてゐると、いつの間にかその月は、遠く西へ傾いたといふのである。庵室にあつ

てのことと取れる。思つたことは多分過去のさまざまな事であつたらうが、月の傾くも知らなかつたといふので、靜かな心をもつて眺め返され、味ひ返されたものであつたらう。ただ時の久しさだけをいつて、內容をいつてゐない爲に、自然かうしたことが聯想されて、それが餘情となつてゐる。

題しらず

1051 (二三八) はらはらと落つる涙ぞあはれなるたまらず物の悲しかるべし

「たまらず」は、堪へられずで、今も口語でいふ。「涙」の緣語。「べし」は、想像。はらはらと落ちる涙は、何うにもあはれなことだ。こらへられずに悲しいのであらう。知る人の泣いてゐるのを見ると、自分の泣く時よりもつらいのは、共通の人情である。何うといふ人ともいはず、唯はげしく涙をこぼすといふ一點を捉へてゐるのは、一に聯想に訴へるもので、一種の技巧ともいへる。誰の心にも觸れうる歌である。

（二三九）山人よ吉野の奥にしるべせよ花も尋ねむ又思ひあり

「山人」は、山に住んでゐる人で、普通の人。「花も」の「も」は、感嘆。「又思ひあり」は、思ひが又もするで、久しくなかつたことを餘情としたもの。

山人よ、吉野の奥の方に案内をしてくれ。花を尋ねて眺めようとする思ひが、又出て來た。年老いて、あれ程好きであつた花も忘れたやうになつてゐた春の或る時、ゆくりなく、又花でも見ようかといふ氣の起つた、その心境を、無雜作に具象したものである。枯れきつた歌で、その人、その時に至らなければ詠めない性質のものである。老境といふことが餘情となつてゐて、それが味ひをなしてゐる。

故郷の述懐といふことを、常磐の家にてためなり詠みけるに罷り合ひて

（二四〇）繁き野を幾ひと群に分けなして更に昔をしのびかへさむ

「ためなり詠みけるに罷り合ひて」は、藤原爲業がその家で、故郷述懐といふ題で歌を詠み合つてゐる所へ行き合せて、自分も詠んだ意。「繁き野を幾ひと群に」の、「繁き野」は、草の繁つ

た野で、題の「故郷」の樣。「幾ひと群」は、「幾」は多くで、下の續きで、「幾群を」の意と取れる。「ひと群」は、一むらがり。「分けなして」の「なし」は、變へる意で、强ひて分けての意に近い。「更に」は、改めて。「しのびかへさむ」は、偲んだ上にも偲ばうで、滿足する程に偲ばう。

草の繁つてゐる野の、その草の幾群を一群の如くに强ひて分け入つて、改めて昔を、滿足するまで偲ばう。

題の「故郷述懐」即ち故郷に對しての述懐の心である。故郷は荒れ果てて、草繁き野となつてしまつて、分け入らうにも入り難いまでになつてゐる。離れて見てゐてもあはれであるが、近寄つて見ずにはゐられないので、强ひても分け入つて、滿足するまでに偲び返して悲しまうといふのである。故郷を偲ぶのは悲しみで、その悲しみは即ちあはれである。この歌はそのあはれをむさぼり盡さうといふので、當時の詩情の上に立つたものであるが、その荒く、烈しいものである。「繁き野を幾ひとむら」といふ詞は、その「繁き」は草であることは餘情でわかるが、これ

は本歌を取つた詞であると「古今餘材」（釋契沖）は注意して、本歌は古今集、哀傷歌「君が植ゑし一むら薄虫の音のしげき野邊ともなりにけるかな」であるといつてゐる。それだと妥當な詞づかひとなる。猶ほ此の歌は新古今集十六卷に「題しらず」として載つてゐる。拙著「新古今和歌集評釋」の此の歌の解は訂正する。

述懷の心を

（二四一）山里にうき世厭はむ人もがなくやしく過ぎし昔語らむ

「山里に」は、庵のある山里にで、修行をする爲の所。

山里に、憂き世を厭ふ人のゐてほしいことである。その憂き世に立ちまじつて、殘念なさまで過ぎた我が昔を語らう。

修行の爲に籠もつた山里にゐて、その甲斐があつて、うき世を離れた身の歡びを味ふと共に、曾てあつたうき世の生活を顧みて、殘念なものに感じて、もし同心の人がゐて、懺悔の心でそれを話したならば、今のこの心持が一層強く味はれようと、無意識の中に思つての心である。落着

いた調べを持つた所から、西行の晩年の心境ではなかつたかと思はせられる歌である。

（二四二）見ればげに心もそれになりぞ行く枯野のすすき在明の月

「見ればげに」の「げに」は、如何にも、云はれるやうに。「なりぞ行く」は、變つて行く。見てゐると、いかにも云はれるやうに、心がその物に變つて行く。枯野の薄に、又在明の月に。己れを空しくして物に對してゐると、心がその物と一つになつて、差別のない物になるといふことは、詩文の上にも、經文の上にもあることである。今はそれを、枯野の薄と、在明の月とで體驗して、實にもとうなづいた心である。擇んだ物が、幽寂な、いはゆるあはれな物ばかりである所に、西行の面目が見える。

（二四三）山深くさこそ心は通ふとも住までぁはれは知らむものかは

「山深く」は、山の深い所で、出家して籠もる所としていつてゐる。「さこそ」は、何のやう

にの意。「かは」は、反語。

山深い、即ち出家して籠もる所を慕つて、何のやうに心は通はせようとも、そこに住むのでなければ、そのあはれは知られようか、知られない。

山深い所に籠もつて、そのあはれさを身に沁ませて、顧みて世の人の、山をゆかしむ心を思つてのものである。誰にも領ける心である。しかし山深く籠もるのは、佛道修業の爲である。そこでの所得を、「あはれ」といふ詞で現はしてゐるのは、當時の修行の何ういふものであつたかと共に、西行の心境をも窺はせるものとして注意される。

(二四)　數ならぬ身をも心のあり顔にうかれては又歸り來にけり

「數ならぬ身をも心のあり顔に」の、「數ならぬ身をも」は、物の數にも入らない、即ちつまらない身をもであるが、その比較は、下の「心」を標準としたもので、貴い人は心あるもの、卑しい人はそれのないものとして云つてゐると取れる。「心のあり顔に」は、「心」はあはれを知る

といふ詩情の上のそれで、「あり顔に」は、ないのにある様子をしての意。「うかれて又も歸り來にけり」の「うかれて」は、輿に乘つて心の浮き立つのを、今もいつてゐる詞で、ここもあはれに浮かれて。「又も」は、以前あつたのに重ねて。「歸り來にけり」は、田舍から都へ歸つて來たといふのに、感嘆を添へたもの。その田舍は、修行の爲に行つてゐたところ。

西行が修行の爲に田舍に行つてゐて、たまたま都へ歸つて來た時、久しぶりで見る都へ對して獨語したものとも、または都の人の誰かに對して挨拶の心でいつた歌とも取れる。後のものではないかと思はれる。一首は、物の數にも入らない此の身をも、あはれを知る者のやうな樣子に、あはれに浮かれて、又も都に歸つて來たことであるよの意と取れる。卑下しての詞のやうに見えるが、それは外見で、「數ならぬ身をも」は、「心」卽ちあはれを知るのは、都の貴い人のこととしていつてゐるのであるが、それは人を階級的に見ての上のことで、いはば儀禮的な言ひ方である。あはれその物からいへば、西行は身分は低いが、あはれに責められて惱んでゐる人である。しかし階級的にいへば、今は出家した世外の者で、今はあはれなどといふことには拘はりのない

はずの身である。その世外の身といふことは、西行に取つては矜りであらうが、今は儀禮として、あはれに遠い身といふことを、「數ならぬ身」と言ひかへたものと思はれる。大體此の歌は解しにくいものであるが、それは西行の心に矛盾があるのに、それを無いが如くいはうとしてゐるが爲である。西行の都へ歸つて來るのは、あはれに浮かれるのではなく、山里の寂しさに堪へきれず、人戀しさに驅り立てられるが爲である。しかし今はそれとは云へぬので、あはれの無い身があり顏にと取りつくろひ、そのあはれのない身といふことを「數ならぬ身」と言ひかへてゐる、この無理が一首を解し難いものとしてゐるのである。西行の心境を語つた歌としては、矛盾の複雜と、負けじ魂を示してゐる、味ひのある歌である。

高倉院の御時、傳へ奏せさする事侍りけるに、書き添へて侍りける

（三〇四）　跡とめて古きを慕ふ世ならなむ今もあり經ば昔なるべし

「世ならなむ」は、時代であつてほしい。「今もあり經ば」は、現在も亦、過ぎ去つて行けば。跡を追けて、古い時代のことを慕ふ時代であつてほしい。現在も、過ぎ去つたならば、同じく

昔となることであらう。

事につけて上聞に達した、西行の述懐である。御代は平家全盛の高倉院の時代で、現在のみが珍らしく貴く、昔は顧みられなかつたことと思はれる。身は武臣であつたが、王朝の生活氣分に浸つて過した西行は、現代の樣が苦々しく、過去のみの戀しかつたことは察しやすい。上聞に達しようとするのは、西行の身分としては思ひきつてのことであつたらう。西行の全體としての心持のよく窺はれる歌である。

題しらず

134

（二四六） 曇りなき鏡の上にゐる塵を目に立てて見る世と思はばや

「目に立てて見る」は、目に立つは、今も口語で使つてゐる。態と目に立たせて見る。曇りない鏡の上に置いてゐる塵を、態と目に立たせて見る世間と思はうよ。

自身の上か、又は信じてゐる人の上かで、世間が聊かの、いふにも足りないことを言ひ立てて非難した時の述懐と思はれる。第三者の冷酷は、むしろ人間の本能ともいふべきもので、今はそ

の對象とされた側（かは）の心である。激してゐないのは、さすがにと思はせる。

（二三七）　よしあしを思ひ分くこそ苦しけれ唯あらるればあられける身を

「唯あらるれば」は、「唯」は上を承（う）けて、何も思はずにの意。「あらるれば」は、居させて見れば。「身を」は、身であるものを。

善惡を辨別することは極めて苦しいことである。何も思はずに生きて居させて見れば、居させられる身であるものを。

「よしあしを思ひ分く」は、いはゆる文字を知るは憂患の初めで、常識になつてゐるものである。西行の此の歌はその程度のものではなく、善惡に惱まされてゐた身が、老來それを離れて安らかにゐられる時が來て、振返つて、以前その爲に惱まされた時を思つて、現在のことの如くに憐んだ心である。この含蓄は四五句にある。理智のものであるが、感激としていつてゐるので、感のある、又餘情のある歌となつてゐる。

（二四八）　世の中を夢と見る見るはかなくも猶おどろかぬわが心かな

「夢と見る見る」の「夢」は、佛典に人生の譬としていつてゐる語。「見る見る」は、見ながらで、現に見てゐる心のもの。「おどろかぬ」は、目覺めぬで、「夢」卽ち眠より覺ぬ意。此の世の中を、さながら夢だと見い見いしながら、はかなくも、やはり夢から目覺めずにゐるわが心であるよ。

我と我を歎いてゐる歌である。いふ所は常識となつてゐたものであるが、強い感激をもつていつてゐるもので、實感の伴つてゐるものである。出家以前の詞といふ形を持つてゐるが、それとは限らないもので、多分は出家後、我と鞭打つた心ではないかと思はれる。

（二四九）　呉竹の今いく夜かは起き臥して庵の窓をあげおろすべき

「呉竹の」は、「いく夜」の「夜」に、「節」と續き、それを「夜」に轉じる意での枕詞。

今いく幾夜を、寢起きをして、この庵の窓を上げたり下したりすることであらうか。

餘命も今は幾夜もないと觀じて、靜かに庵に籠もつてゐる心である。幾何もないといふことを「幾夜」とし、それを「起き臥し」にし、更に寢るとて「下ろし」、明けたとて「上げる」窓の戸によつて具象させてゐることが、心靜かさを現はすものとなつてゐる。境涯の現はれてゐる歌である。

（二五〇）その筋に入りなば心なにしかも人目思ひて世につつむらむ

「その筋に入りなば」の「筋」は、今も口語に、筋の立つてゐる人、筋のとほつた食べものなどいひ、道に叶つたといふ意に用ゐてゐる。その道に入り得たならば。「人目思ひて」は、人の批評を氣にしてといふ程の意のもの。「世につつむ」は、世間に憚る意。

その道に入り得たならば、心が、何だつて、人の批評を氣にし、世間に憚りなどするのであらう。

他人に對しても云ひ得ることであるが、多分我と我に向つていつたものであらう。「人目思ひて世につつむ」といふ感を自分自身に持つてゐるのに對し、心がまだその筋に入つてゐない爲と思つて、我と我を勵ましたものと取れる。「筋」といふのは佛道の上のことであらう。修行中の或時の實感と思はれる。

友に逢ひて昔を戀ふるといふことを

(二四一) 今よりは昔語は心せむあやしきまでに袖しをれけり

「心せむ」は、注意しようで、止めようの意。「袖しをれ」は、涙に袖のしめつた意。

これからは、昔の思ひ出話は止めよう。したので、いぶかしいまでに、袖が濕つたことであるよ。

昔戀しい思ひ出話に滿足した後の心である。しみ〴〵とした、心足りた氣分が調に現はれてゐる。人一倍昔を戀しがる西行であつたので、實感として持つてゐたものであらう。

（二五二）情ありし昔のみ猶しのばれてながらへま憂き世にもあるかな

「情ありし」は、趣のあつたといふ程の意。「ながらへま憂き」は、生きてゐることの辛い。趣のあつた昔の事ばかりが、やはり思はれて、生きてゐることの辛い世ではあることよ。

「情ありし昔」といふのは、保元、平治の亂を境界としての以前の世で、「世」といふのは、武家時代と取れる。その双方の世界に亘つてゐた西行には、「昔」はいかにもなつかしく、今が淺ましい世に見えたことであらう。注意されることは、政治を直接に問題にするのではなく、文化といふよりはむしろ風雅の方を問題としてゐることである。これは言ひかへると生活の雰圍氣の相違である。尤も在俗の時も身分は低く、後には出家してゐる西行であるから、實感としてはさうした點にあつたらうと思はれる。

（二五三）何事も昔を聞けばなさけありて故あるさまにしのばるるかな

「昔を聞けば」は、昔の「さま」を聞けば。「故あるさま」は、由緒即ち尊い傳統のある様。

何事も、昔の様を聞くと、趣のある、由緒のある様に思へて、なつかしく思はれることであるよ。

前の歌と同じ心のものであるが、この「昔」は、西行が眼で見たそれではなく、耳に聞いて知る昔である。前の歌の昔を遡らせて、古い程なつかしいといふのである。時代の轉換に遭遇した當時の人は、王朝の最盛時とされた延喜、天暦の御代をひたすらに戀つてゐた。これは戀はざるを得なかつたのである。今は文化の上についていつてゐるのであるが、その根本は政治の上にあるものである。

そのかみ志し仕うまつりける習ひに、世をのがれて後も、賀茂にまゐりけるに、年高くなりて四國の方(かた)修行しけるに、又歸りまゐらぬこともやとて、仁安三年十月七日の夜まゐりて幣(ぬさ)をまゐらせけり。内へもまゐらぬことなれば、たなをの社にとりつぎて參らせ給へとて志しけるに、木の間の月ほのぼのと常よりも神さび、あはれに覺えてよみける

(二六四) かしこまるしでに涙のかかるかな又いつかはと思ふあはれに

「四國の方へ修行しけるに」は、下の續きから見ると、修行に出ようとしての意でいつてゐると取れる。「內へもまゐらぬことなれば」は、出家して法體となつてゐるので、社の內へは參れないことなので。「たなをの社にとりつぎて」は、末社のたなをの社の宮人に、取次ぎての意。「ほのぼのと神さび」は、ほのぼのとしてゐて、神々しくの意。「かしこまるしで」は、「かしこまる」は畏まるで、畏まり持つ意でいつてゐるもの。「しで」は、玉串に着ける木綿又は紙。畏まり持つ四手に、淚のこぼれてかかることであるよ。又いつの日か參り得るだらうと思ふあはれさの故に。

一二句の續きには無理があると思はれるが、調べが澄んで、身に沁みるものがある。皇室を初めとして、一般に崇敬してゐた賀茂の社ではあるが、西行の信心の程の思はれる歌である。

九、哀傷歌

ゆかりありける人、はかなくなりにける、とかくの業に鳥部山へ罷りて歸るに

806 (二五五) 限りなく悲しかりけり鳥部山なきを送りて歸る心は

「とかくの業に鳥部山へ」は、「鳥部山」は火葬場で、京都の東山の中。「とかくの業」は、いろいろと葬送の事をする意。

限りもなく悲しいことである。鳥部山へ、亡き人を送つて、歸つて來る心は。

この上もなく單純に悲しみをいつた歌である。佛者西行が、少しも教の旨に觸れず、一俗人と同じやうに悲しんでゐるのが注意される。その悲しみは、單純な調べとなつて現はされてゐる。

ゆかりにつけて物思ひける人の許より、などか訪はざらむと、恨み遣したりける返りごとに

820 (二五六) あはれとも心に思ふ程ばかりいはれぬべくは訪ひもこそせめ

「ゆかりにつけて物思ひける人」は、縁のある人の死んだ爲に、悲しんでゐるところの人。「などか訪はざりけると、恨み遣し」は、何だつて今まで、尋ねてはくれないのだと、恨みをいつて來た。「あはれとも」の「も」は、感嘆。

あはれだと心の中で思つてゐるだけ口へ出していへるものであるなら、直ぐにも訪つたことであらう。

濃情な、悲しみの味を十分に知つてゐる詞で、西行の人柄を思はせるに足りる歌である。心を盡せないくらゐならば、むしろ、默つてゐようといふのは、普通に似て普通のことではない。

墓に詣りて

(二五七) 思ひ出でし尾の上の塚の道絶えて松風高し秋の夕闇

「思ひ出でし」は、下の「塚」で、忘れてゐたもの。「道絶えて」は、訪ねる人がないので、道がなくなつて。

思ひ出した山の上の塚に詣でると、そこへの道はなくなつて、松風が高く鳴つてゐる、秋の夕

闇に。

「思ひ出でし」といふので、いささかのゆかりはあるが、平生は忘れてゐる人といふことを現はしてゐる。又「秋の夕闇」で、さうした人を思ひ出したのは、さみしい秋の夕暮であつたことも現はしてゐる。一首の心は、墓が寂しいとか悲しいとかいふ感傷的のものではなく、墓まで行く途中の、奥行の深い、限りなく荒涼とした味である。緊張した心のもので、或る時の西行の死に對しての心を暗示してゐるものと見られる。單なる哀傷ではない。誰の墓ともいはないのは、今はその必要のない心だからである。

同じさまの歎しける人とぶらひけるに

(二五八) なきあとの面影をのみ身に添へてさこそは人の戀しかるらめ

「同じさまの歎」は、ここには引かない此の前の歌が、女に死別した男に對しての歌で、それと同じ歎の意。「身に添へて」は、文字通りに、夫婦の共にゐる樣子。「さこそ」は、さぞ。「人」は、死んだ女。

死んだ後の、思ひ出の面影だけを身に添へて、さぞその人が戀しいことであらう。

死んだ人よりも、後に殘つた人のさみしさをいたはつた心である。「身に添へて」といふ詞は、精神的にも、肉體的にもいへる詞である。今は肉體的の心の强いもので、それが「さこそ戀しかるらめ」といふこの背景になつてゐる。「戀し」も、從つて同樣である。しみじみと、食ひ入つた心で、調べもそれにふさはしいものである。

無常の歌あまたよみける中に

(二五九) いづくにか眠り眠りて倒れ伏さむと思ふ悲しき道芝の露

「いづくにか」は、何處にかで、下の「倒れ伏さむ」場所である。一所不住の修行者の、何處で往生するともわからない心をいつたもの。「ねぶりねぶりて」は、眠を重ねてで、「倒れ伏す」は、死、卽ち往生。「道芝の露」は、道の上に生えてゐる芝の、その葉に置く露で、「道芝」は「倒れ伏す」ところ「露」は命の果敢なさを暗示したもの。

何處に、このやうに夜々の眠を重ねた上で、倒れ伏すことであらうか。それを思ふと、何れは

道芝の上であらうが、さう思ふと悲しく見える道芝の露の果敢なげなさまであるよ。

謂はゆるのたれ死にをすることを覺悟をして、その時を思ひやつての心である。主としてゐる所は、のたれ死にの覺悟ではなくて、それをする時を空想して悲しんでゐることである。思ふに西行の心境が高まつてゐたならば、かういふことを空想して悲しむといふことはしなかつたであらう。これは修行などしない俗人の心である。大悟を求めて修行はしてゐるが、その域にはかなりの距離のあるもので、その姿とその心との間に不自然さの感じられるものである。歌としては感の強いものである。

（二六〇）なき跡を誰と知らねど鳥部山おのおのすごき塚の夕暮

「なき跡」は、なき人の意を、塚に絡(から)ませていつたもの。「鳥部山」は、火葬場で、墓地。なき人を、誰とは知らないけれども、鳥部山に見るとそれぞれ皆、すぐに感じられる塚の夕暮であるよ。

塚に對して、すごさを感じた心である。その感を強くいはうが爲に、夕暮に見る塚を、「塚の夕暮」と、「夕暮」の方を主としていつてゐるのである。佛者に取つては、墓は人間最後の場所ではない。すべてをすごく感じるといふことは、一俗人としても感傷に過ぎるものである。この感傷の普通以上のところに、西行の人柄が見える。

百首の歌の中に、無常十首

（二六一）うらうらと死なむずるなど思ひ解けば心のやがてさぞと答ふる

「うらうらと」は、心のどかに。「など」は、單にやはらげる爲に添へた詞。「思ひ解けば」は、問題即ち題の「無常」といふことを、心に解することで、悟るといふに近い意。「やがて」は、直ちに。「さぞ」は、然なり。

心のどかに死なうと、無常といふ問題を我が事として解すると、心は直ちに、さうだと答へる。無常といふ經文の上の大問題を問題として考へ、我が事として考へると、「うらうらと死なむずる」といふ解釋を得た。これは宇宙の理法に安んじて順はうといふ意である。すると心は、緣

返し確める意をもつて、然なりと應じたといふのである。謂はゆる工夫をしてゐる中の消息を語つたものである。「うらうらに死なむずる」といふ詞は、當時としては、可なりまで日常語に近いものだつたらうと思はれる。

一〇、神祇の歌

太神宮御祭日によめる

(二六二) 何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる

「太神宮」は、伊勢の神宮。「何事のおはしますかは知らね」は、何ういふ事があらせられるかは知らないで、祭禮によつて示されることの內容の捉へ難いことをいつたものと取れる。神佛習合の信仰は既に久しいもので、天照大御神も佛の示現と信じられてゐた當時である。佛には教旨があつて、その教旨も明らかなものとなつてゐた。今、太神宮の御祭日に、このやうな感を抱いたといふのは、佛の示現としての大御神よりも、むしろ大御神の方を主とした心持と取れる。何事が大御神の上にあらせられるかは知らないが、御前に立てば、唯忝なさに涙がこぼれる。西行の感は、四五句の、「かたじけなさに涙こぼるる」といふだけで、初句から三句までは、そのことにこれといふ理由のない事をいつてゐるものであるが、その理由のなさをいふのは、卽

ち理由を求める心なのである。佛に較べると神は、ただ崇敬を受けたまふだけで、神より物をいひかけられることは、必要がある場合の神託だけで、それも上代にはあつただけで、中世になると殆どなくなつてゐたのである。敎旨の複雜な、又大組織を持つてゐる佛敎を信じ、佛者ともなつてゐる西行が、佛と並ぶ神に、その敎旨のない事を注意するのは、當然のことといへる。加へて此の當時は、祭禮が何ういふものであるかといふ意識も、可なりまで曖昧になつてゐたらうと思はれるから、祭日にかういふ感を起すのは、一層當然であつたらうと思はれる。信心深い純粹な氣持が調べの上に現はれて、それが人の心を捉へるものとなつてゐる。

(二〇三) 世の中を天の御影のうちになせ荒潮あみて八百會の神

「夫木集」には詞書が添つてゐる。それは、「公卿勅使に土御門右府、宰相にて立ちけるを、五十鈴川のほとりにて見てよめる」といふのである。即ち土御門右大臣が宰相時代に、公卿勅使として伊勢太神宮へ參向されたのを、西行は、五十鈴川のほとりで見てよんだといふのである。據

るところのあつての詞書と思はれる。「天つ御影のうちになせ」は、天の御光、即ち天照大御神の御心のやうに變らせよで、世の中を御光の反對、即ち闇であるといふことを餘情としての詞。「荒潮あみて八百會の神」の、「荒潮」は、海の荒い潮。「あみて」は浴みてで、潮を浴みるのは、身を清めて、力を得る爲にする禊の意で、普通の禊は川水でするのであるから、これは特別な、荒く力強いそれと取れる。「八百會」は「八百」即ち限りなくも潮の會ふ所の意で、潮のはげしい所にゐたまふ神よで、そのゐられるのは禊の爲である。「荒潮の潮の八百會」は、大祓の中にある詞で、それを取つたもの。

世の中を天の御光、即ち天照大神の御心のとほりに變らせよ。禊の爲に、荒潮を浴みて八百會にゐたまふ神よ。

世の中の暗黑を光明に復らせたまへと、神に祈る心である。その祈る神は、荒潮を浴みて八百會にゐられる神で、この神は天照大御神に仕へる神で、又強い力を持つてゐる神である。直接大御神に祈らないのは、恐れ多しとしての意と取れる。この「神」といふのは、神代の武神である

健嚴槌（たけみかつち）の神を心に置いたものかとも思はれる。武家に反抗しようとする强い精神のあらはれといへる。

ふけ行くままにみたらしの音神さびて聞えければ

(二六四)　みたらしの流はいつも變らぬを末にしなればあさましの世や

「みたらし」は、ここには拔かない前の歌に、賀茂のことがあつて、その社のみたらしである。賀茂神社は皇室の守護神として、特別に崇敬された社である。「末にしなればあさましやの世や」の、「末」は、下の「世」のことで、佛說にいふところの末世（まつせ）である。「あさまし」は、その末世は惡いものと說かれてゐる、その惡い意で、そして今は、世が武家のものとならうとしてゐる、その事をさしてゐるのである。「や」は感嘆。

みたらしの流の音は、昔に變らないものを、末になつて來たので、淺ましくも變つた世のありさまよ。

皇室の守護神である賀茂の社のみたらしの音は變らぬといふのは、神の稜威（みいつ）は變らない意を暗

示し、然るに、その守護せらるる皇室の稜威は衰へを見せて、武家の專橫する世となつたといつて、それとこれとを對照して嘆いた心である。しかしそれも、末世の故であるとして、世の推移を不可抗力のやうに感じて、嘆きを深めたのである。佛教の盛んな世に、佛者となつてゐて、心は、皇室を離れなかつた西行を思はせる歌である。

西行法師

— 歴代歌人研究 —

昭和十三年五月十七日印刷
昭和十三年五月二十日發行

著者　窪田空穂

東京市麹町區下六番町四十八番地
發行者　岡本正一

東京市麹町區土手三番町廿九番地
印刷者　谷口熊之助

東京市麹町區土手三番町廿九番地
印刷所　合資會社谷口印刷所

東京・麹町・下六番町
發行所　厚生閣
電話九段(33)三二一八番
振替東京五九六〇〇番

歴代歌人研究《全十巻》

〈豫約〉作家研究に一新時期を劃す名著

巻	歌人	著者
第一巻	柿本人麻呂	文學博士 國大學教授 武田祐吉
第二巻	山上憶良 山部赤人	文學博士 東洋大學教授 谷馨 森本治吉
第三巻	大伴旅人 大伴家持	文學博士 佐佐木信綱
第四巻	紀貫之	文學博士 東京女高師教授 尾上八郎
第五巻	藤原俊成	文學博士 駒澤大學教授 福井久藏
第六巻	西行法師	早大教授 窪田空穗
第七巻	藤原定家 藤原家隆	文學士 森直太郎 尾山篤二郎
第八巻	源實朝	川田順
第九巻	賀茂眞淵 香川景樹	文學博士 帝大學教授 久松潛一
第十巻	橘曙覽 良寛和尚	文學士 辻森秀英 相馬御風

體裁——四六判別漉局紙豪華裝幀各巻三百五十頁
頒價——毎月拂一圓八十錢・申込金不要
送料——市内六錢・内地十四錢・外地廿一錢